

高瀬山遺跡(HO)2期

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第167集



2008

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



たかせやま
高瀬山遺跡(HO)2期

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第167集

平成 20 年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





D区発掘状況（南から）



E区発掘状況（南東から）



出土中世陶器



SK192出土土器

序

本書は、財團法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、高瀬山遺跡（HO地区）の調査成果をまとめたものです。

高瀬山遺跡は、山形県のほぼ中央に位置する寒河江市にあります。寒河江市は、西に月山、朝日の山々を連ね、北に葉山、南に蔵王連峰を望みます。南部には、山形県内を貫流する最上川が悠然とした流れを見せてくれます。

この度、最上川ふるさと総合公園整備事業に伴い、工事に先立って高瀬山遺跡（HO地区）の発掘調査を実施しました。

調査では、主として奈良・平安時代、中世の遺構や遺物が見つかりました。特に奈良・平安時代では、高瀬山遺跡（1期地区）の集落群と関連する竪穴住居跡と溝跡が検出されました。また中世では、竪穴建物跡などの遺構が重なり合って発見され貴重な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた大きな責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係の皆様に心から感謝申し上げます。

平成20年3月

財團法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

本書は、最上川ふるさと総合公園整備事業に係る「高瀬山遺跡（HO）2期」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、現地調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は、山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物・調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	高瀬山遺跡（HO地区）
遺跡番号	昭和60年度登録
所在地	山形県寒河江市大字島字島西、大字寒河江字高瀬山、大字寒河江字山西
調査委託者	山形県
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	第1次 平成16年4月1日～平成17年3月31日 第2次 平成17年4月1日～平成18年3月31日 整理 平成19年10月1日～平成20年3月31日
現地調査	平成16年4月26日～6月4日（第1次調査）
調査担当者	調査第二課長 尾形 輿典 主任調査研究員 小林 圭一 調査研究員 山口 博之（調査主任） 調査研究員 榎 純 調査研究員 伊藤 成賢
現地調査	平成17年4月25日～7月14日（第2次調査）
調査担当者	調査研究部長 佐藤 庄一 主任調査研究員 伊藤 邦弘 主任調査研究員 山口 博之 主任調査研究員 今田 秀樹（調査主任） 主任調査研究員 伊藤 成賢 調査員 深澤 篤
整理作業	平成19年10月1日～平成20年3月31日
整理担当者	整理課長 野尻 侃 調査課長 長橋 至 専門調査研究員 伊藤 邦弘 主任調査研究員 今田 秀樹（整理主任）

調査指導 山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力 山形県村山総合支庁建設部西村山道路計画課
山形県教育庁村山教育事務所
寒河江市教育委員会

凡　例

- 本書の構成には山口博之が担当し、執筆・作成は今田秀樹が担当した。編集は齋藤健が担当し、全体については柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、野尻侃、長橋至、黒坂雅人、伊藤邦弘が監修した。
- 遺構図に付す座標値は、日本測地系（改正測量法以前）に基づいている。方位は座標北を表し、高さは海拔高で表す。
- 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S T…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S K…土坑	S D…溝跡
S P…ピット	S X…性格不明遺構	E L…カマド	E K…遺構内土坑
E D…遺構内溝跡	E P…遺構内ピット	R P…登録土器	R Q…登録石器
R M…登録金属製品	P…土器	S…縁	
- 遺構・遺物実測図の縮尺・網点などの用法は各図に示した。なお、遺構実測図中の遺物実測図は任意の縮尺で採録した。
- 遺構実測図中の柱穴内の破線は柱痕を示している。
- 遺物実測図中の拓本について、断面図の左側を外面、右側を内面とした。ただし、插鉢については左右逆となる。
- 土器の種別について、中世の素焼きの土器を土師質土器とした。
- 遺構・遺物図版の構成については、基本的にA～F区の調査区順、遺構番号順とした。ただし、F区の遺物実測図及び拓本は編集の都合上、E区と順番を逆にして掲載した。
- 基本層序及び遺構覆土、土器胎土の色調記載については、2002年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。
- 第2・3図及び表1は、高瀬山遺跡（HO地区）発掘調査報告書から引用し、編集・作成した。
- 第4図は、高瀬山遺跡（1期）発掘調査報告書から引用し、編集・作成した。
- 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々からご協力・ご助言をいただいた。（敬称略）

大宮富善 中野晴久 柳原敏昭 吉田 鍾 米村祥央
- 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務	株式会社寒河江技術コンサルタント
遺物実測図化業務	株式会社シン技術コンサル

目 次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の概要	10
IV 遺構と遺物	20
V 総括	32
報告書抄録	卷末

表

表1 高瀬山周辺の道路	9	表2 遺物観察表	76
-------------	---	----------	----

図 版

第1図 調査区位置図	5	第15図 C区の遺構（豊穴住居跡ほか）	38
第2図 地形分類図	7	第16図 D区の遺構全体図	39
第3図 高瀬山道路周辺の道路	8	第17図 D区の遺構（土坑・柱穴）	41
第4図 高瀬山道路群	12	第18図 D区の遺構（豊穴住居跡ほか）	42
高瀬山道路（1期）遺構配置図（4・7区）		第19図 D区の遺構（溝跡）	43
第5図 A区遺構配置図	13	第20図 D区の遺構（土坑）	44
第6図 B区遺構配置図	14	第21図 D区の遺構（土坑ほか）	45
第7図 C区遺構配置図	15	第22図 D区の遺構（豊穴建物跡ほか）	46
第8図 D区遺構配置図	17	第23図 D区の遺構（豊穴建物跡ほか）	47
第9図 E区遺構配置図	18	第24図 D区の遺構（土坑ほか）	48
第10図 F区遺構配置図	19	第25図 D区 S D185・186集石配置図	49
第11図 B区の遺構（豊穴住居跡ほか）	34	第26図 E区の遺構全体図	51
第12図 B区の遺構（土坑ほか）	35	第27図 E区 S T501豊穴住居跡	53
第13図 C区の遺構（豊穴住居跡ほか）	36	第28図 E区 S T501豊穴住居跡出土遺物	54
第14図 C区の遺構（溝跡ほか）	37	第29図 E区 S B556掘立柱建物跡	55

第30図 E区 S B 557掘立柱建物跡	56	第40図 D区出土遺物（7）	67
第31図 F区の造橋全体図	57	第41図 D区出土遺物（8）	68
第32図 A・B区出土遺物	59	第42図 D区出土遺物（9）、F区出土遺物	69
第33図 C区出土遺物	60	第43図 E区出土遺物（1）	70
第34図 D区出土遺物（1）	61	第44図 E区出土遺物（2）	71
第35図 D区出土遺物（2）	62	第45図 中世陶器集成図（1）	72
第36図 D区出土遺物（3）	63	第46図 中世陶器集成図（2）	73
第37図 D区出土遺物（4）	64	第47図 石器集成図	74
第38図 D区出土遺物（5）	65	第48図 金属遺物集成図	75
第39図 D区出土遺物（6）	66		

写真図版

卷頭写真1 D・E区完掘状況

卷頭写真2 出土中世陶器、S K192出土土器

- 写真図版1 A・B・C・F区完掘状況
- 写真図版2 A区 S X390完掘状況ほか
- 写真図版3 B区 S K343出土状況ほか
- 写真図版4 C区 S T395出土状況ほか
- 写真図版5 D区北壁断面ほか
- 写真図版6 D区 S K15・16完掘状況ほか
- 写真図版7 D区 S K192出土状況ほか
- 写真図版8 D区 S D186出土状況ほか
- 写真図版9 E区西壁断面ほか
- 写真図版10 E区 S T520断面ほか

- 写真図版11 F 3・4・6区完掘状況ほか
- 写真図版12 出土遺物（1）
- 写真図版13 出土遺物（2）
- 写真図版14 出土遺物（3）
- 写真図版15 出土遺物（4）
- 写真図版16 出土遺物（5）
- 写真図版17 出土遺物（6）
- 写真図版18 出土遺物（7）
- 写真図版19 出土遺物（8）
- 写真図版20 出土遺物（9）

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

高瀬山遺跡は、山形盆地中央のやや西側、寒河江市の最上川左岸に位置し、その規模約90haに及ぶ山形県内屈指の大規模遺跡である。高瀬山遺跡（H O地区）2期については、山形県教育委員会による遺跡詳細分布調査で確認され、昭和60年度に登録されたものである。その後、「最上川ふるさと総合公園整備事業」に伴い、平成13・16年に山形県教育委員会が試掘調査を実施したところ、当事業区内については、記録保存を目的とした緊急発掘調査を行わなければならぬ遺跡と決定され、発掘調査は財團法人山形県埋蔵文化財センターが県からの委託を受けて行った。

寒河江市高瀬山周辺は、明治の本頃から古墳や柵文・平安時代などの遺跡の存在が知られており、大正時代の調査ではすでに十数基の古墳群の存在が確認されていた。しかし、残念ながらその後の開墾などで古墳は失われ続けた。そのような中の昭和7年（1932）、ぶどう園の造園中に現れた石碑から直刀が出土し、これを機に発掘調査が行われることとなり、高瀬山古墳は昭和30年（1955）に県史跡に指定された。

集落跡としての高瀬山遺跡が注目されるようになったのは、昭和55年（1980）の温泉湧出を契機とした、高瀬山周辺の開発計画に伴う分布調査による。その後、各種開発に伴う発掘調査が寒河江市教育委員会や山形県教育委員会によって実施されてきている。

近年では、平成6～9年（1994～97）の4ヶ年にわたって、東北横断自動車道酒田線（山形自動車道）建設に伴う調査が、財團法人山形県埋蔵文化財センターにより約15haの面積で実施されている。調査対象面積が広範囲に及ぶことから、調査区域を大きく3地区に分けて調査が行われた。調査区域は各々「高瀬山遺跡1期」、「高瀬山遺跡2期」、「高瀬山遺跡SA（サービスエリア地区）」と呼称されている。

加えて、山形県土木部では、高速道路サービスエリアの外周から高瀬山の南側に至る一帯に最上川ふるさと総合公園整備事業を計画したことから、平成9～13年（1997～2001）にかけて、同センターによる「高瀬山遺跡（H O地区）」発掘調査が約9haの面積で実施された。なお、高瀬山遺跡の東側には三条遺跡が、西側には落衣長者屋敷遺跡が隣接しており、「高瀬山遺跡群」として一連の遺跡を捉えることができる。

前述した高瀬山遺跡（H O地区）の名称は、「最上川ふるさと総合公園整備事業」の旧称が、「ハイウェイ・オアシス事業」であったことによる。その事業名及び発掘調査名との継続性を保つ必要から、今回の発掘調査は「高瀬山遺跡（H O）2期」と呼称することになった。

2 調査の方法と経過

発掘調査は2ヶ年に及び、調査区については調査が計画された順にA～F区の名称を付した。基本的には事業者側との協議により、工事工程に応じて発掘調査を進め、F区についてはE区

調査原因

十数基の古墳群

に先行して調査を実施することとなった。

発掘調査は、重機を用いて表土を除去し、その後に面整理、遺構検出、遺構精査の工程で進め、並行して写真・図面などによる記録を行った。

第1次調査 第1次調査は、平成16年4月26日から6月4日まで実施された。A～C区とD区東端の460m²が調査され、D区の残り大部分については遺構が密集して検出されたため、関係者間で協議の上、遺構調査を次年度に持ち越すこととなった。遺構の調査は、D区・A区・B区・C区の順に実施し、A区は他区に先行して5月24日に引き渡しを行った。調査の結果、奈良・平安時代の堅穴住居跡、中世の土坑などの遺構が検出された。調査説明会は5月27日に開催され、出土遺物数は30箱であった。

第2次調査 第2次調査は、平成17年4月25日から7月14日まで実施された。D区の前年からの継続部分とE・F区の合わせて800m²について、D区・F区・E区の順に遺構の調査を進めた。D区では、4月27日から改めて遺構検出と遺構の調査を行い、6月30日には先行して引渡しを行った。調査の結果、奈良・平安時代の堅穴住居跡と掘立柱建物跡、中世の堅穴建物跡などが検出された。調査説明会は6月2日に開催され、出土遺物数は35箱であった。

グリッド設定 調査用方眼（グリッド）は、1次・2次共通のものとし、公共座標（日本測地系）に基づく50m方眼の大グリッドを設定した。A～D区とE・F区が數100m離れていて大グリッド制を探る必要があったため、また高瀬山遺跡（H O地区）調査区（5～14区）のグリッド設定との統一も図った。なお、H O地区調査の1～4区については、高速道路関係調査の高瀬山遺跡（1期・2期・S A）の座標と同じである。

大グリッドは50m×50mで、西から東に向かってアルファベット、北から南に向かってアラビア数字とし、「Z10」のように表記した。A～Zの次は2 A・2 B…2 Fとなる。高瀬山遺跡（H O地区）は、東西軸がA～W、南北軸が1～10の範囲にある。高瀬山遺跡（H O）2期の調査区は、東西軸がZ～2 F、南北軸が8～19の範囲内に位置する（第1図）。

さらに大グリッド内を5 m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…とした。したがって各々の小グリッドは、「Z10-22」のように表記し、グリッドの帰属は北西隅の杭を基準にした。50m四方の大グリッドは、5 m四方の小グリッド100個で構成されることになる。

遺構の登録番号は、第1次調査分が1～400、468～485となる。基本的に、遺構検出を行ったD区・C区・B区・A区の順に番号を付している。なお、468～485は整理段階でB・C区の未登録の遺構に付した番号である。第2次調査分はD区の401に始まる。改めて行った面整理により、また遺構精査の折に新たに検出された遺構があったためである。E区は501～557、F区は601～669である。各々400・500・600番台としたのは、調査の工程上、遺構検出と遺構精査を各区にまたがって同時並行的に行う必要があったためである。

遺物の登録番号は、第1次調査が1～42、第2次調査が101～261である。

整理作業は、平成16・17年度に図面、写真などの資料整理並びに出土遺物の基礎整理を行った。平成19年度には図面作成、出土遺物の実測・写真撮影などの整理作業と報告書作成業務を行った。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

高瀬山遺跡が所在する寒河江市は、山形県内陸部のほぼ中央に開けた山形盆地の西部に位置する。山形盆地西部に位置し、東の大町市、西の大江町、北は河北町、南は中山町に隣接する。面積約139km²のおよそ3分の2を山林が占める寒河江市の北西部には、標高1,000mを超える葉山や月山などの山々が連なる。寒河江市の地勢は、山地・火山地、丘陵地などがおよそ60%を占めるが、約40%は台地・段丘または低地が占める。全県下では前者が75%以上の割合を占めるのに対して、比較的バランスがとれていると言える。

山形県内を貫く最上川は、本流の長さが229km、流域面積は7,040km²に及び、長さでは全国第7位、水量では第4位を記録する。寒河江市は、この最上川のほぼ中流域に位置する。最上川は寒河江市西部から市の南端を遡るように流れた後、再び流れを北に転じ、その後市北部を東流する寒河江川が合流する。平地の大部分は寒河江川扇状地と低位段丘、河間低地が占めている。東部は最上川が自然堤防と後背湿地を形成し、この2つの河川が造り出した平地に市街地が広がっている。

高瀬山遺跡は、JR左沢線寒河江駅の南西方向約1kmにあり、遺跡からは周辺に広がる果樹園や水田、住宅街、そして最上川を見渡すことができる。遺跡東端に位置する高瀬山は、周辺との比高差が約20~30mで標高122mの断層地盤であると指摘してきた。1997年の東北横断自動車道建設工事では、高瀬山を東西に掘削した際に断層頭が現れた。詳細な観察の結果、沖積世に活動している活断層であることが報告された（阿子島1999）。高瀬山の周囲の段丘面上に高瀬山遺跡は立地する。落衣長者屋敷遺跡はその西側に隣接し、旧河道を随所に残す低位段丘面上に位置している。また、東に隣接する三条遺跡で検出された水田跡は河間低地に営まれたものと考えられる。

最上川の現河床面の標高は約93mを測り、倉庫群と考えられる遺構が検出されたD区との比高差は6m程度となる。川底は浅く、漫水期には川底が現れることも少なくなく、高瀬山の「高瀬」名の由来となったことが想定される。なお遺跡直下の河原では、良質の硬質頁岩を採取することが可能である。

2 歴史的環境

高瀬山遺跡を中心とした半径5kmほどの中に、約40ヶ所の遺跡が分布する。時代は旧石器から近世までと幅広く、種別も集落跡、生産跡、城館跡など多様である。最も多いのは縄文時代の集落跡で23遺跡を数え、次いで奈良・平安時代の集落跡が16ヶ所で確認されている。

旧石器時代の遺跡は6ヶ所発見されている。この中では富山遺跡、金谷原遺跡、そして高瀬山遺跡（1期）などが調査され、金谷原遺跡から出土した石器により、東北日本の石刃技術やナイフ型石器などの研究が進められた。

II 遺跡の立地と環境

縄文・弥生時代 縄文時代に入ると遺跡数は急増する。しかし、周辺では草創期、早期の遺跡は発見されておらず、前期の調査例も現在のところ高瀬山遺跡（1期）のみである。1期地区の上位の段丘面で、前期後葉～末葉の環状集落跡が検出されている。集落は直径120mの範囲内に住居群が配置され、竪穴住居跡は標準的な規模のものが37棟と、長軸が15m前後～20m超の大型住居跡12棟が検出されている。大型住居跡は主軸を放射状に配置されている。大規模集落であることから、山形盆地の拠点集落であったことがうかがえる。

中期以降は、柴橋遺跡、うぐいす沢遺跡、富沢I遺跡などが調査されている。中期の高瀬山遺跡においては、SA地区で大木10式の竪穴住居跡1棟、HO地区では大木8a式1棟、大木10式6棟、大木9・10式1棟などの竪穴住居跡が検出されている。

一方、弥生時代の遺跡は非常に少なく、現在周辺では3遺跡しか発見されていない。高瀬山遺跡に近接する石田遺跡では前期の再葬墓が検出されており、後期の土器も採集されている。

古墳時代 古墳時代では、高瀬山古墳が知られているが、遺跡数は非常に少ない。高瀬山遺跡では1期の調査区で円墳と方形周溝墓、HO地区では竪穴住居跡が検出されている。

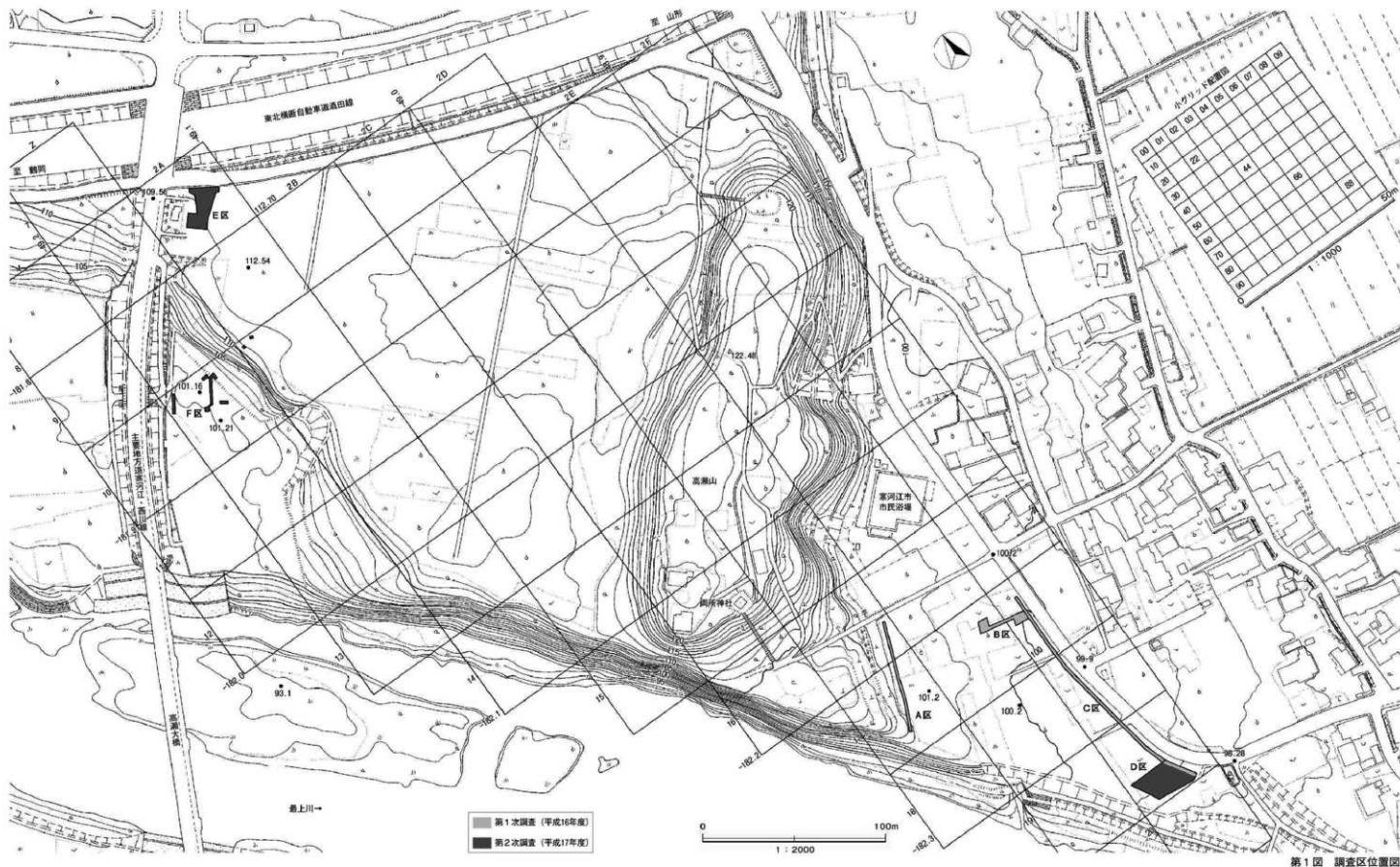
奈良・平安時代 高瀬山遺跡の主要な時代となる奈良・平安時代の周辺地域は、次のような経緯を辿る。

和銅5年（712）に出羽国が建国されると、それ以前は陸奥国に属していた現在の村山地方は出羽国最上郡に編入された。その後、仁和2年（886）に最上郡を2つに分けて村山郡が成立する。高瀬山遺跡が所在する寒河江市は、この仁和2年以降、村山郡城に入ったと考えられている。「和名類聚抄」によると、村山郡は大山・長岡・村山・大倉・梁田・徳有の六郷から成り立ち、寒河江市は、この中の長岡郷に比定する考えが有力である。

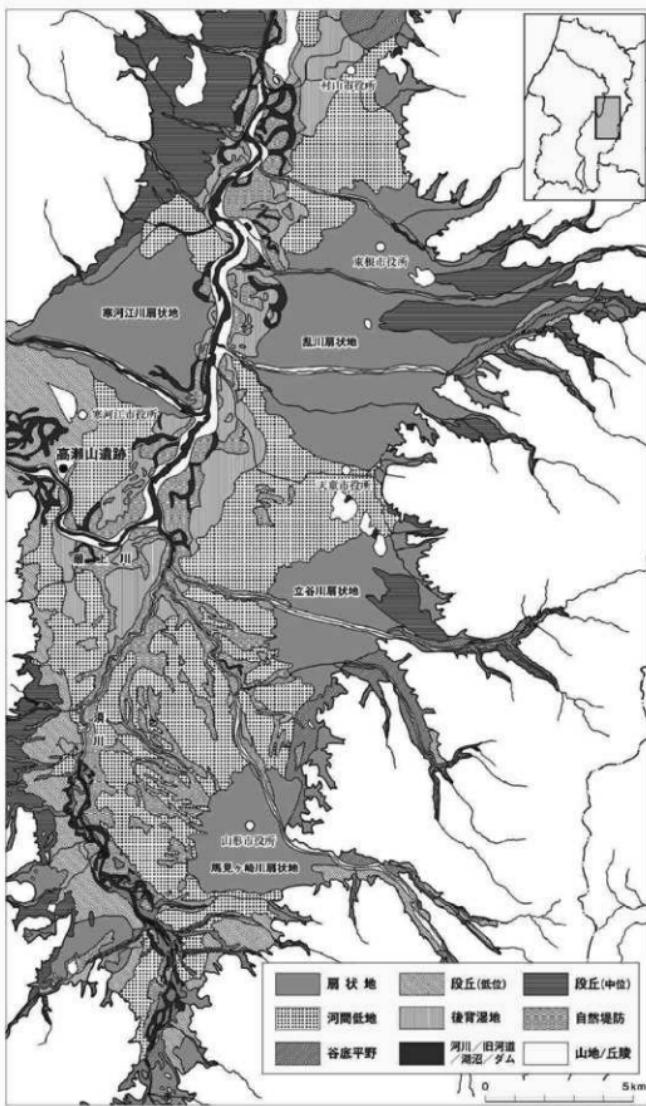
高瀬山遺跡の周辺には、旧石器時代から中世に至るまで数多くの遺跡が点在する。広範囲にわたる高瀬山遺跡にも、旧石器や縄文、古墳、奈良・平安、中世など重なりながら、あるいは地点を変えて各時代の遺構が存在する。また、東に隣接する三条遺跡や西に隣接する落衣長者屋敷遺跡などは、大きく捉えれば高瀬山遺跡と一連の流れの中にあると言える。

三条 遺跡 三条遺跡は、奈良・平安時代を主体とした遺跡で、約450点以上もの墨書き土器や木製品が出土し、合わせて東側には水田が營まれていたことも確認され、高瀬山遺跡群に住んでいた人々が依存していた耕地であったと推定されている。落衣長者屋敷遺跡では、西へ行くにつれて竪穴住居跡などの遺構が希薄になり、集落の西端部の印象を与える。代わって石組井戸跡など中世の所産である遺構が顕著に現れるようになる。遺跡名は、室町期の築城と考えられる一辺約100mの方形短郭の落衣長者屋敷に近接することに由来する。他に中世では、高瀬山経塚の存在が知られている。

平野山古窯跡群 高瀬山遺跡の北西約2kmの所には、村山西部丘陵地域古窯跡群中最大の規模を持つ平野山古窯跡群がある。今まで14地点で、窯跡あるいは散布地が確認されている。平成7年に同古窯跡第12地点の調査が、山形県埋蔵文化財センターによって実施され、12基の窯跡が検出された。出土した遺物から、8世紀後半と9世紀中葉～末葉にかけて操業されていたと考えられている。さらに、その西にある富山2遺跡や木ノ沢跡の竪穴住居跡などは、9世紀代の須恵器工人と関連する遺跡として捉えられており、高瀬山遺跡もこれら周辺遺跡と深い関係を有していたことが考えられる。



第1図 調査区位置図



第2図 地形分類図



表1 高瀬山周辺の遺跡

遺跡名	市町村	時代	種別	遺跡名	市町村	時代	種別
1 高瀬山遺跡	寒河江市	石器～近世	集落跡	75 乱戸井遺跡	大童市	绳文	集落跡
2 高瀬山古墳	寒河江市	古墳	墳墓	76 南側東遺跡	大童市	令良・平安	集落跡
3 高瀬山城跡	寒河江市	中世	城郭跡	77 大久塚2号古墳	大童市	古墳	古墳
4 高瀬山御陵遺跡	寒河江市	鉄器	城郭跡	78 人木道跡	大童市	令良・平安	集落跡
5 和幡山城跡	河北町	中世	城郭跡	79 高瀬東道跡	大童市	会良・平安	集落跡
6 武田道跡	河北町	絞文・平安	遺物包含地	80 高瀬城跡	大童市	南北朝～EFL	城郭跡
7 若宮八幡道跡	河北町	平安	遺物包含地	81 白野道跡	大童市	绳文	集落跡
8 行燈城跡	河北町	中世	城郭跡	82 南西道跡	大童市	绳文	集落跡
9 大塙館跡	河北町	中世	城郭跡	83 中安遺跡	大童市	会良・平安	集落跡
10 月山堂遺跡	河北町	平安	遺物包含地	84 伊川田道跡	大童市	绳文・弥生・平安	集落跡
11 鳴尾遺跡	河北町	平安	遺物包含地	85 影山北遺跡	大童市	会良・平安	集落跡
12 熊野台遺跡	河北町	古墳・奈良・平安	遺物包含地	86 松井道跡	大童市	平安・江戸	集落跡
13 下板道跡	河北町	古墳	遺物包含地	87 佐南南道跡	大童市	绳文・平安	集落跡
14 頂中山道跡	河北町	平安	遺物包含地	88 伊川道跡	大童市	绳文・奈良	集落跡
15 頂中八道跡	河北町	平安	遺物包含地	89 佐南北道跡	大童市	古墳	集落跡
16 小豆船跡	寒河江市	中世	城郭跡	90 今城跡	大童市	城郭跡	城郭跡
17 通次郎御殿遺跡	河北町	中世	城郭跡	91 甲子日道跡	山形市	平安	集落跡
18 舟前人遺跡	河北町	平安	城郭跡	92 吉井遺跡	山形市	奈良・平安	集落跡
19 佐藤城跡	寒河江市	平安	集落跡	93 月日2遺跡	山形市	古墳・奈良・平安	集落跡
20 重櫻上原敷道跡	寒河江市	中世	城郭跡	94 甲子日1遺跡	山形市	古墳・奈良・平安	集落跡
21 重櫻上原敷道跡	寒河江市	中世	城郭跡	95 佐野台遺跡	中山町	中世	城郭跡
22 日和田城跡	寒河江市	中世	城郭跡	96 月日道跡	中山町	平安	集落跡
23 上の寺道跡	寒河江市	絞文～近世	寺々・社寺跡	97 長坂道跡	中山町	南北朝～戦国	城郭跡
24 尾山寺跡	寒河江市	中世	城郭跡	98 竹・花道跡	中山町	中世	城郭跡
25 日和田道跡	寒河江市	絞文	遺物包含地	99 有吉道跡	中山町	平安	遺物包含地
26 ゴロビツ道跡	寒河江市	中世	城郭跡	100 影野道跡	中山町	绳文・平安	遺物包含地
27 肥前船跡	寒河江市	中世	城郭跡	101 人屋山道跡	中山町	平安	遺物包含地
28 佐藤船跡	寒河江市	中世	城郭跡	102 横山道跡	中山町	平安	遺物包含地
29 四ヶ火災苦道跡	寒河江市	中世	城郭跡	103 月原道跡	中山町	绳文・平安	遺物包含地
30 不動水道跡	河北町	会員	遺物包含地	104 月2道跡	中山町	平安	空跡
31 道延城跡	河北町	中世	城郭跡	105 月3道跡	中山町	绳文・平安	遺物包含地
32 今町軒道跡	大童市	江戸	羽絣道跡	106 月1道跡	中山町	羽石郡・繩文・平安・中世	遺物包含地
33 一家堀道跡	大童市	中世	墳墓	107 木戸松道跡	中山町	中世	城郭跡
34 碇坂北山遺跡	大童市	平安	集落跡	108 桶原・桶原道跡	中山町	中世	城郭跡
35 道場跡	大童市	古墳・平安	集落跡	109 木戸道跡	中山町	绳文	遺物包含地
36 三条冬至道跡	大童市	奈良・平安	冬至道跡	110 木戸山船跡	中山町	室町	城郭跡
37 泊泊治水道跡	大童市	古墳	集落跡	111 和琴寺社道跡	中山町	绳文	遺物包含地
38 八反田道跡	大童市	絞文	集落跡	112 鮎余糸屋跡	中山町	奈良・平安	冬至道跡
39 磐尾北山遺跡	大童市	小津	集落跡	113 木子花道跡	中山町	中世	城郭跡
40 貴船寺遺跡群跡遺跡	大童市	江戸	羽絣道跡	114 阿闍梨收衣跡	中山町	中世	城郭跡
41 墓城跡	大童市	室町～江戸	城郭跡	115 木戸道跡	中山町	平安	遺物包含地
42 旗崎南一丁目石軒易道跡	大童市	江戸	新経道跡	116 新原道跡	中山町	中世	城郭跡
43 旗田船跡	寒河江市	中世	城郭跡	117 新野道跡	山形市	不明	城郭跡
44 日田城の内道跡	寒河江市	中世	城郭跡	118 人山道跡	中山町	弘生	遺物包含地
45 本船船跡	寒河江市	中世	城郭跡	119 月古古布群	山形市	古墳	羽石郡・奈良・信長
46 石田道跡	寒河江市	絞文・弥生	集落跡	120 西山船跡	山形市	戦国	城郭跡
47 寒河江城跡	寒河江市	中世	城郭跡	121 月坂道跡	山形市	平安	墳墓
48 山岸道跡	寒河江市	絞文	遺物包含地	122 月北毛里道跡	山形市	会良・平安	冬至道跡
49 阿良山城跡	寒河江市	中世	城郭跡	123 月ノ原城跡	中山町	戦国	城郭跡
50 石持原道跡	寒河江市	絞文	遺物包含地	124 月原道跡	中山町	平安	遺物包含地
51 球磨原跡	寒河江市	中世	城郭跡	125 月原飛坂道跡	中山町	会良・平安	集落跡
52 望遠原跡	寒河江市	中世	空跡	126 月原寺道跡	中山町	会良・平安・中世	集落跡
53 高船船跡	寒河江市	中世	城郭跡	127 月原寺3号道跡	中山町	平安	集落跡
54 穴松1道跡	寒河江市	絞文・平安	散居地	128 月ノ原道跡	山形市	会良・平安	集落跡
55 無衣長若狭道跡	寒河江市	奈良・平安・中世	集落跡	129 月ノ原道跡	山形市	会良・平安	集落跡
56 無衣長若狭道跡	寒河江市	中世	城郭跡	130 月ノ原道跡	山形市	古墳	集落跡
57 平塚柄口山道跡	寒河江市	絞文・奈良・平安	集落跡	131 月ノ原山道跡	山形市	古墳・奈良・平安	集落跡
58 山崎船跡	寒河江市	中世	城郭跡	132 月ノ原山道跡	山形市	平安	肥前地
59 鶴引山道跡	寒河江市	絞文	散居地	133 月ノ日道跡	山形市	古墳	遺物包含地
60 遊森山道跡	中山町	中世	城郭跡	134 月ノ山道跡	山形市	渋生～中世	集落跡
61 佐間山道跡	中山町	中世	遺物包含地	135 月ノ原道跡	山形市	渋生～中世	集落跡
62 福ノ原道跡	中山町	絞文	遺物包含地	136 月ノ心山道跡	山形市	不明	城郭跡
63 三条道跡	寒河江市	絞文～近世	集落・城郭跡	137 新井田道跡	山形市	会良・平安	集落跡
64 高屋船跡	寒河江市	中世	城郭跡	138 天保道跡	山形市	会良・平安	集落跡
65 中原道跡	大童市	平安	集落跡	139 田山道跡	山形市	会良・平安	集落跡
66 篠田道跡	大童市	古墳	集落跡	140 牛伏塚道跡	山形市	渋生	集落跡
67 里正塚道跡	大童市	室町	寺院跡	141 附守塚2号古墳	山形市	古墳	古墳
68 里正塚道跡	大童市	絞文～平安	集落跡	142 附守塚4号古墳	山形市	会良・平安	古墳
69 西沼田道跡	大童市	古墳	集落跡	143 清水山道跡	山形市	古墳	城郭跡
70 口久道跡	大童市	絞文	集落跡	144 伊豆古墳群	山形市	古墳	古墳
71 田沼道跡	大童市	絞文	集落跡	145 北之上山道跡	山形市	渋生	集落跡
72 鳴野日ノ道跡	大童市	渋生～平安	集落跡	146 北之上山道跡	山形市	会良・平安	集落跡
73 乱戸戸室里道跡	大童市	平安・寅年	冬至道跡	147 上牧免道跡	山形市	会良・平安	集落跡
74 清野西道跡	大童市	平安	集落跡				

III 遺跡の概要

1 各調査区の概要

A～D区は、寒河江市大字島字島西、高瀬山の南麓方面に位置する。公園の造成及び駐車場など関連施設の建設に係る調査区で、東西が約120m、南北が約170mの範囲内にある。一帯は、標高約102mのA区北西端から標高約99mのD区南東端に向かって緩やかに傾斜する段丘低位面に相当し、果樹園や畑として利用されていた区域である。

E・F区は、それぞれ寒河江市大字寒河江字高瀬山と同字山西に所在し、A～D区の北西およそ500mの地点に位置する。ストリートスポーツ広場及び駐車場などの建設に係る調査区である。E区は標高約112mの段丘中位面、F区は標高約101mの段丘低位面に相当し、両調査区は段丘崖により隔てられている。地目としては果樹園や畑として利用されていた区域である。

基本層序 遺跡の層序については、A区が第5図の西壁各断面、B区は第11図西壁断面と第12図東南壁断面、C区は第14図西壁断面、D区は第16図北側断面、E区は第26図基本層序、F区は第31図F3区東壁断面の各土層断面図で示した。

A～D区の層序は、表土であるI層、表土から地山への漸移層であるII層、地山のIII層に類別される。I層は、黒褐色土を基調とする果樹園または畑の耕作土である。II層は、耕作土の深土であり、地山層との漸移層的な様相を示す。III層は、A区においては黒褐色土または灰黃褐色土・にぶい黄褐色土、B区は暗褐色土またはにぶい黄褐色土、C区では暗褐色土となっている。D区のIII層は、にぶい黄褐色シルトと灰黃褐色シルトを基本とする。北側断面では、耕作土の下層に他のIII層に相当する河川堆積層が見られ、粒子が粗い褐色シルトと繊維の2層からなっている。そこでD区北西域にあっては、この河川堆積層の上面から遺構が掘り込まれている。A～D区の遺構検出面までの深さは、傾斜地ゆえに約0.2～1.0mと聞きがある。

E・F区の層序も、A～D区と同じように表土、漸移層、地山のI～III層に類別される。E区については、I層が褐色シルトを基調とする耕作土で、III層はにぶい黄褐色粘質シルトとなっている。F区のIII層も同様で、E・F区とともにIII層上面が遺構検出面である。E区の遺構検出面までの深さは約0.3～0.5mで、F区については約0.3～0.7mである。

6ヶ所の調査区 各調査区の概要については次の通りである。A区は、ほぼ南北を主軸とする長さ約60m、幅が約1.5mの線状の調査区で、南端は最上川の崖線に接する。面積は約90m²で、大グリッドは2D16～17の範囲にある。検出された遺構は、ピット25基、性格不明遺構1基である。

B区は、A区の東方約50mの所に位置する調査区で、面積は約115m²、大グリッドは2E17・2F17の範囲にある。検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑24基、溝跡6条、ピット41基、性格不明遺構1基である。

C区は、B区の東に隣接し南北に伸びてD区に至る、長さ約117m、幅が1.7mほどの線状の調査区である。面積は約215m²で、大グリッドは2F17～19の範囲にある。検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑14基、溝跡3条、ピット93基、性格不明遺構8基である。

D区は、北東角でC区と接するほぼ平行四辺形の形状をした調査区で、面積は約470m²、大グリッドは2F19の範囲にある。検出された遺構は、堅穴住居跡1棟、堅穴建物跡2棟、土坑69基、溝跡2条、ピット150基、性格不明遺構23基である。

E区は、最も標高が高い調査区で、面積は約280m²、大グリッドは2A8の範囲にある。検出された遺構は、堅穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、溝跡4条、ピット39基、性格不明遺構5基である。

F区は、段丘崖の落ち際に及び段丘崖下に位置する調査区で、面積は90m²、大グリッドはZ10・2A10の範囲にある。なおF区については、離れた7つの区域から成り立っているため、各々F1～7区と呼称している。段丘崖の落ち際に設定した約1.7m四方のF1区とF2区では、表土除去と面整理の結果、遺構は検出されなかった。検出された遺構は、土坑11基、溝跡9条、ピット40基、性格不明遺構9基である。

2 遺構と遺物の分布

当遺跡では、主として奈良・平安時代と中世の遺構が検出されており、特にA～D区ではこれららの遺構が同一面で確認されている。

奈良・平安時代の遺構

A区では、北側半分でピットと性格不明遺構が検出されたものの、最上川に程近い南半分では、その大部分が搅乱で壊されていることもあり、遺構は検出されなかつた。遺物は、ピットと性格不明遺構から若干の土師器片が出土している。遺構外からは中世陶器の擂鉢、須恵器の破片が見つかっている。

B区の西側からC区を経てD区の東端に至る一帯は、奈良・平安時代の遺構がほとんどで、わずかに中世の遺構も混在する。B区では、西側で奈良・平安時代の堅穴住居跡と土坑、古鏡・中世陶器が出土した中世の土坑3基などが検出された。中央部分で遺構が希薄になり、東側からC区にかけて再び遺構数が増加する。

C区の中央部分では、搅乱により遺構が検出されなかつた。その北側と南側で、奈良・平安時代の堅穴住居跡が1棟ずつ検出されている。

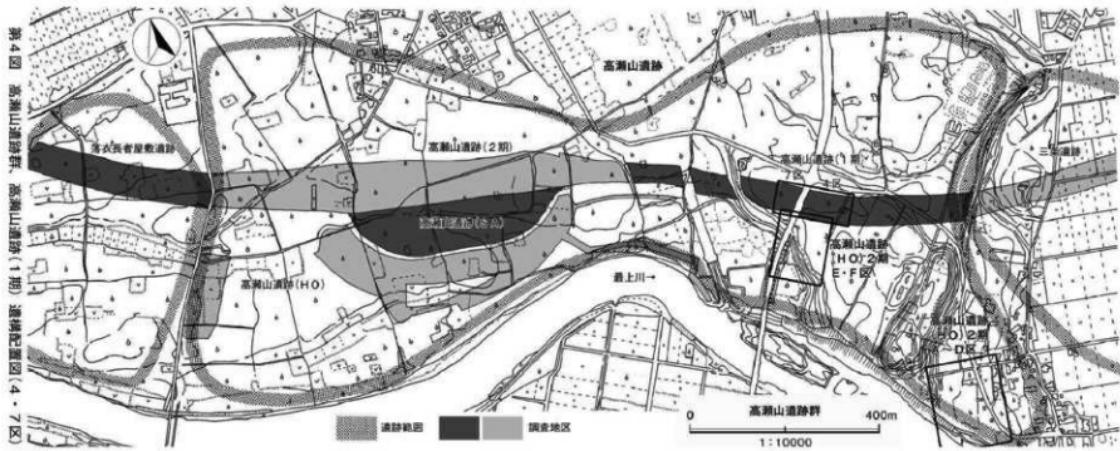
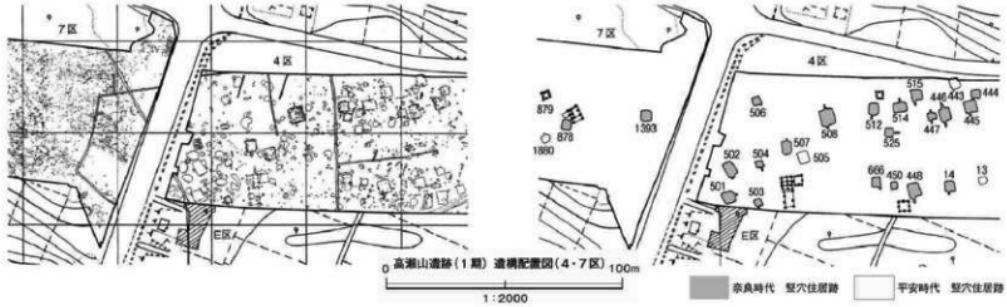
D区では、堅穴建物跡と土坑、溝跡の大部分が互いに切り合ながら密集して存在する。ピットの数も多く、D区だけで遺構数は247基を数える。遺物は、中世陶器と五輪塔、古鏡が出土しており、D区全体に中世の遺構が数多く存在する。北側から北西部にかけての砂礫層におおわれた地域では、遺構がほとんど検出されなかつた。東方面では中世の遺構が希薄になり、堅穴住居跡など奈良・平安時代の遺構数が増加する。以上のことから、中世の遺構群はD区の範囲を中心部分とし、南と南東方面にやや広がりを持つものであることが推定される。

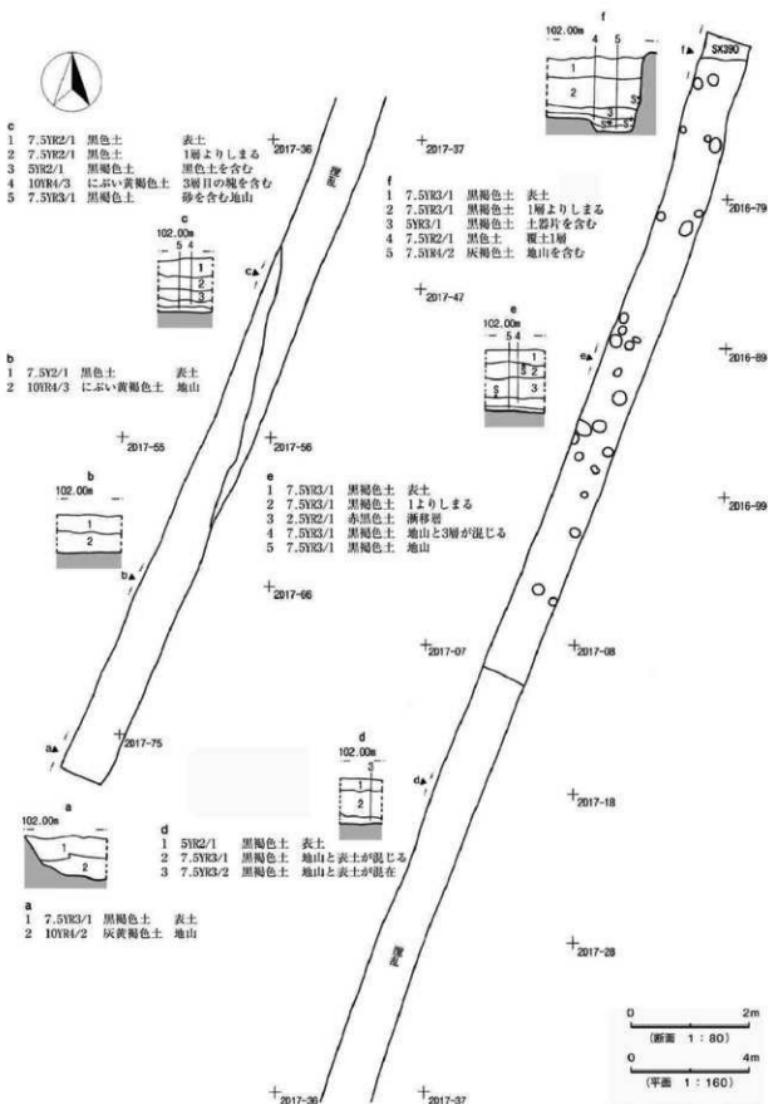
中世の遺構

E区では、縄文時代の堅穴住居跡1棟が検出された。住居跡外からも流れ込みと考えられる繩文土器、石器が見つかっている。奈良・平安時代の堅穴住居跡1棟と掘立柱建物跡2棟、そして溝跡1条についても、隣接する高瀬山遺跡（1期）発掘調査の第4・7区（第4図）における同時期の集落群との関連で考える必要がある。

縄文時代の遺構

F区の遺構は奈良・平安時代のもので、土坑、溝跡などが検出された。遺物は土師器・須恵器片と石製品が出土している。





第5図 A区遺構配置図

III 進路の概要



+ 2E17-23 + 2E17-33 + 2E17-43 + 2E17-53 + 2E17-63

C区

+ 2E17-22 + SD300 SD469 SD470 SD301 + 2E17-62

+ 2E17-21 + SK319 OP SK302 SK323 + 2E17-61

B区

+ 2E17-20 + SK321 + + + 2E17-60

+ 2E17-29 + + + + + 2E17-69

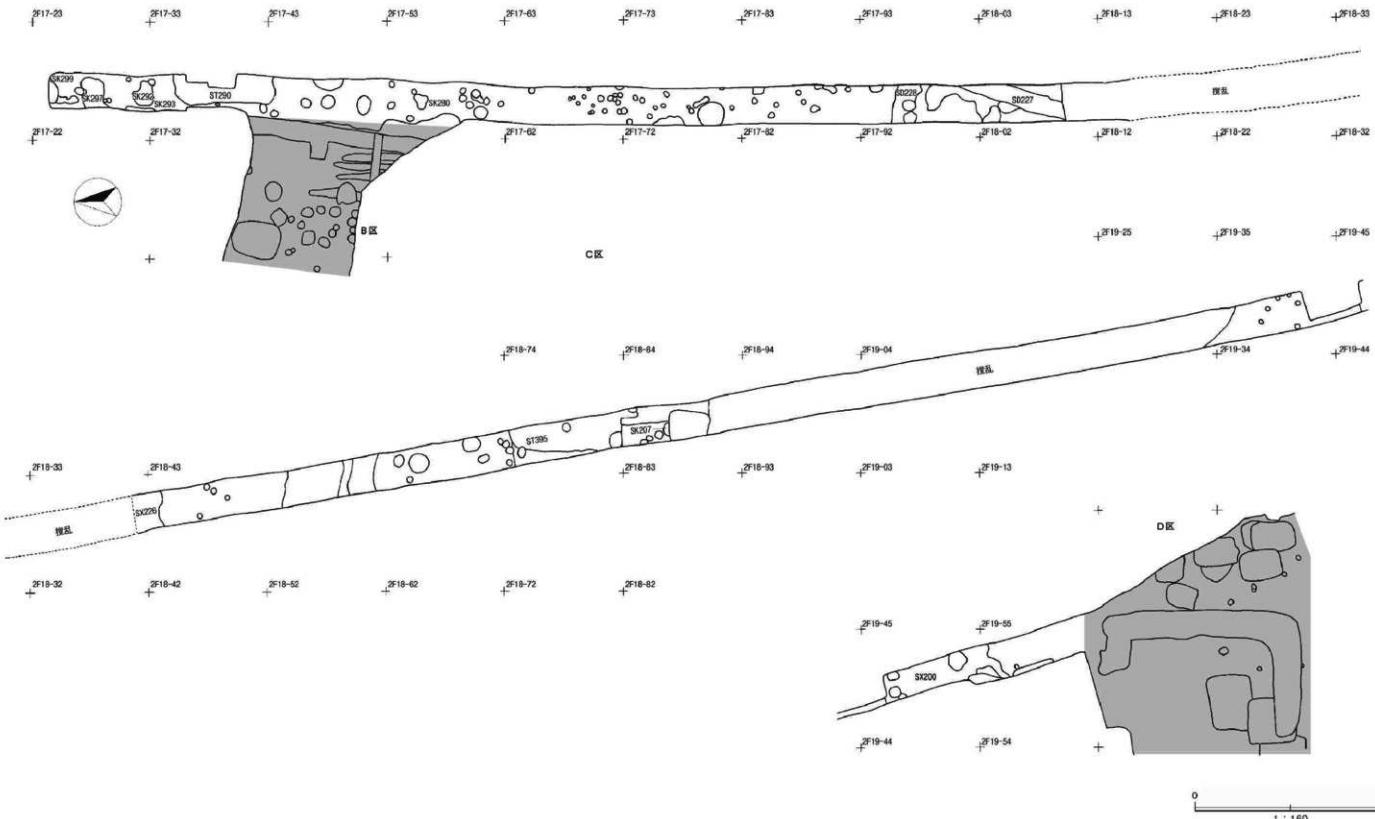
+ SK331 + + + + + 2E17-88

+ 2E17-27 + SK343 SK344 SK342 ST341 SK336 + + + + + 2E17-87

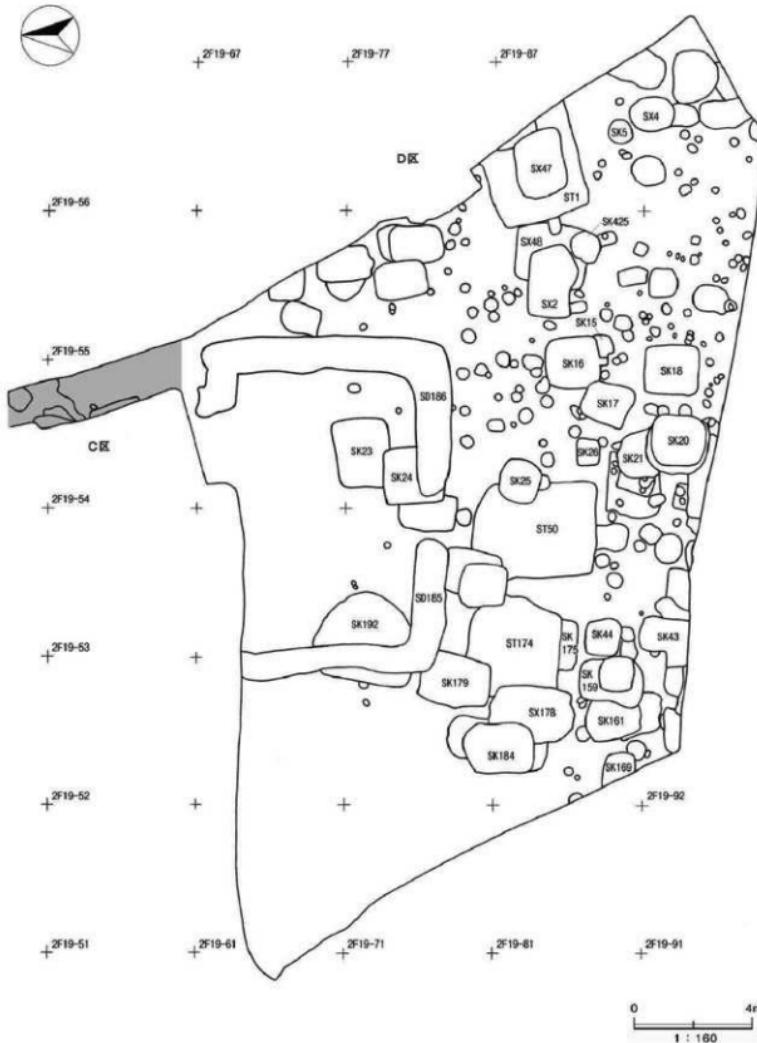
+ SK352 SK354 SK355 SK356 O + 2E17-47 + 2E17-57 + 2E17-67

0 4m
1 : 160

第6図 B区造構配置図

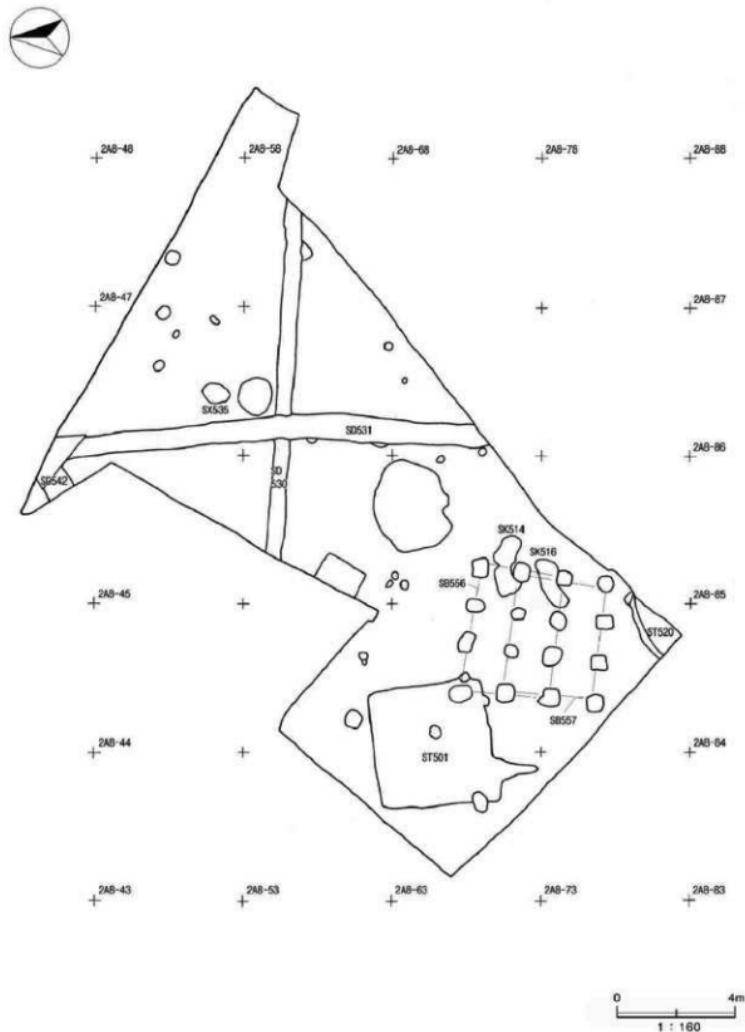


第7図 C区構造配置図

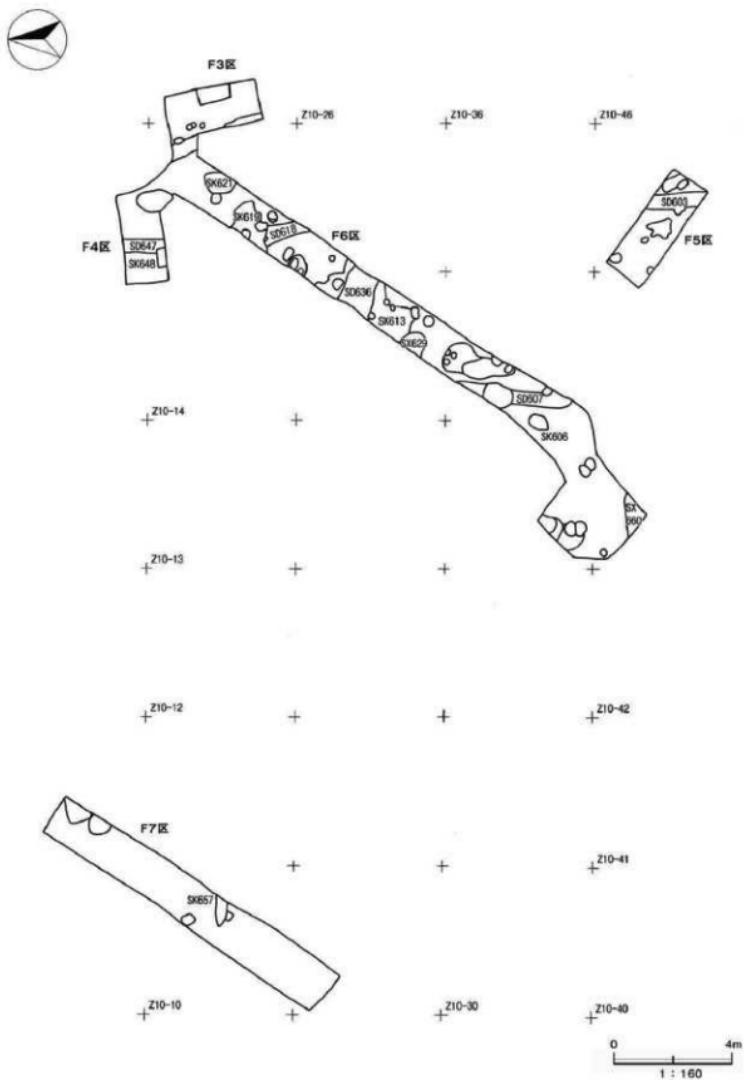


第8図 D区遺構配置図

III 進路の概要



第9図 E区遺構配置図



第10図 F区造体配置図

IV 遺構と遺物

1 A区の遺構と遺物

性格不明遺構

S X390 (第5図)

A区北端の2 D16・58・59・68・69グリッドに位置し、三方を調査区の壁に切られているため外形がうかがえるのは南側の一部のみである。底面は平坦で、遺構面からの深さは24cmを測る。覆土は黒色土と灰褐色土である。

遺物は、土師器片2点が出土している。

その他の遺構と遺物

検出されたピットはすべて円形で、径は16~56cm、深さは9~51cmである。

遺構外から、須恵器系陶器の擂鉢（第32図1）が出土している。1の鉗じ目は、やや粗雑な撲歯原体による10条の直線文で描かれる。胎土には海綿骨針が混入する。

2 B区の遺構と遺物

竪穴住居跡

S T341 (第11・32図)

2 E17~27・28・37・38グリッドに位置し、南半分以上が調査区外にある。平面形は方形で、規模は一辺約3m以上を測る。確認面から床面までの深さは32cmである。覆土は、黒色土・暗褐色土を主体とし、炭化物、ブロック状の地山が混入する。E K400の覆土には炭化物が多く混入する。

床はほぼ平坦で、主柱穴は確認できないが、南壁際で柱穴が2基検出された。E K400は床面から20cmほどの掘り込みである。カマドは検出されなかった。

遺物は、土師器壺（第32図2）、須恵器壺（同図5）、須恵器蓋などが出土している。E K399では須恵器壺（同図4）、E K400からは土師器壺（同図3）が出土している。

2は、内面黒色処理の無台壺で、内面にミガキ、外面にケズリの調整が見られ、底面に黒斑がある。3は長胴になるタイプで、内外面にナデ後ハケメ調整が認められ、外面はナデによる凹凸が顕著である。口縁部の屈曲は弱く、端部には丸みを持つ。4・5は無台壺で、内外面ともロクロナデ調整が施され、回転ヘラ切りである。4は口径・底径が大きく、身は浅い。内面はよく使いこまれ摩滅している。5は内底面中央部が窪んでおり、体部の器厚が極端に薄い。

8世紀中葉の竪穴住居

土坑

S K343 (第11・32図)

2 E17~28グリッドに位置する。東側は調査区外にあり、S K344・S X357を切る。平面

形は、検出された部分を見る限りでは方形を呈する。規模は東西が0.8m以上、南北が2.4mで、深さは67cmである。覆土は黒褐色土を主体とし、上層はにぶい黄褐色土と炭化物、下層は砂を含む。

遺物は、鉄津（第32図9～11）と古銭（同図12）が出土している。12は北宋の「嘉祐元寶」で、初鋤年は1056年、書体は篆書である。
 鉄津
 「嘉祐元寶」

S K354（第11・32図）

2 E17-27グリッドに位置し、S D355・S K356との重複関係は、古い順に S D355→S K354→S K356となる。平面形は長方形を呈し、規模は1.9m×1.1m以上である。深さは78cmで、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は黒褐色土で、にぶい黄褐色土が混在し、炭化物を多く含む。

遺物は、瓷器系陶器壺（第32図7）と古銭（同図8）が出土している。7は内外面にナデ調整が施される。胎土及び内外面の色調が灰色で胎土に細砂が混入する特徴から、新潟県笹神銀沢窯の製品に類似するものと考える。8は北宋の「天禧通寶」で、初鋤年は1017年である。
 「天禧通寶」

溝 跡

S D355（第11・32図）

2 E17-17・27グリッドに位置し、S K354に切られる。ほぼ南北方向に直線的に走り、長さは4.4m以上で調査区外に伸びる。幅は40～55cmで、深さは南端で21cm、北壁際で16cmである。覆土は暗褐色土で、黒褐色土が混在する。

遺物は、須恵器壺（第32図6）が出土している。6は、肩から体部にかけてなだらかな曲線を描き、体部上部に最大径を有する。胎土には黒色吹き出しが認められる。

S D301・302・468・469斂状造構（第12図）

2 F17-41・51グリッドに位置し、S D302はS K304に切られる。S D301～469は4条で一組の斂状造構と考えられる。跡はほぼ南北に平行して直線的に走り、長さは1.9m～2.5m以上で調査区外に伸びる。跡間は20cm程度、S D302のみ約40cmの間隔を持つ。幅は23～42cmで、深さは10～15cmを測る。覆土は黒褐色土・灰黃褐色土である。

斂 状 造 構

遺物は、S D301から内面黒色処理の土師器壺と、摩滅した土師器片が数点出土している。

3 C区の遺構と遺物

堅穴住居跡

S T290（第13・33図）

2 F17-32・42グリッドに位置し、東半分以上が調査区外にある。なお、東壁際に矩形の未調査部分を残したのは電柱があったためである。平面形は方形で、規模は東西が1.2m以上、南北が4.3mを測る。覆土は、少量の褐色土の微粒と土器片、炭化物が混入する黒褐色土と灰黃褐色シルトの2層である。

壁高は31cmを測り、床面には凹凸が見られる。E P470は、対になる柱穴は検出されなかつたものの、径60～80cmで底径が40cm程、また床面からの掘り込みの深さは50cmとしっかりしていることから主柱穴の可能性がある。壁際に並んだE P471～476は、直径20～30cmのやや細い

補助柱穴と考えられる。S P477は、S T290の壁面とE P471を切っており、直径50cm弱のしつかりとした掘り込みで、補助柱穴の可能性がある。カマドは検出されなかった。

遺物は、土師器壺（第33図1）と釘（同図2）が出土している。1は無台壺で、口縁部は直線的に外反する。胎土には赤色粒が混入している。9世紀後半の所産と考えられる。2の頭部には炭化した木片が付着している。

S T395（第15・33図）

2 F18-73-83グリッドに位置し、東半分以上が調査区外にある。平面形は方形と推定され、規模は東西が1.5m以上、南北が4.7m以上である。覆土は黒褐色土を主体とする。

壁高は57cmを測り、床面はほぼ平坦である。主柱穴は確認できない。カマドは住居内の南壁に位置し、煙道は72cmを測る。

遺物は、カマド付近に多く出土しており、土師器壺（第33図3～5）、土師器甕（同図6・7）、須恵器蓋（同図8・9）がある。3～5は無台壺で、3は体部が緩やかに内湾しており、大粒の赤色粒が混入する。4は、体部がわずかに内湾するが口縁部は弱く外反する。胎土には海綿骨針が混入する。5は底部に黒斑がある。6は小型のもので、口縁部は強く外反し、端部を上方につまみ上げている。7も小型のもので、2次被焼により器面が荒れている。外面はロクロナデによる凹凸が顕著である。8は形状が扁平で、天井部と体部の境が明瞭に見られる。口縁部は屈曲し、比較的シャープな端部を作り出す。9は、天井部が幾分丸みを帯びて傾斜している。天井部内部が著しく摩滅し、滑らかである。8・9のつまみはリング状で、胎土には海綿骨針と黒色吹き出しが認められる。これらの遺物は概ね9世紀中葉の所産と考えられる。

9世紀中葉の壁穴住居

性格不明遺構

S X200性格不明遺構（第7・33図）

2 F19-44・54グリッドに位置し、東側・西側ともに調査区外に広がり、確認できる範囲での規模は東西が1.6m、南北が5.3mで、平面形は不明である。土坑2基と3基のピットに切られ、深さは56cmである。

遺物は、須恵器無台壺（第33図10）が出土している。回転ヘラ切りで、口径・底径が大きく、身は浅い。体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。時期は、8世紀第3四半期のものと考えられる。

S X226性格不明遺構（第15・33図）

2 F18-32・42グリッドに位置し、東側・西側を調査区壁に切られ、北側は搅乱で壊されている。確認できる範囲での規模は、東西が1.6m、南北が1.2mである。平面形は不明で、深さは58cmを測る。遺物は、土師器有台壺（第33図12）が出土している。内面は黒色処理が施され、高台は貼付け部から剥離し欠損する。胎土には海綿骨針と赤色粒が混入する。時期は、9世紀後半のものと考えられる。

その他の遺構と遺物

「開元通寶」

S K207（第15図）から古銭（第33図11）と、多量の炭が出土している。古銭は唐の「開元通寶」で、初鑄年は621年である。S K207の平面形は円形で、確認面からの深さは5cmと浅い皿状を呈している。規模は東西の径が60cmで、南北分ほどをS X481に切られている。

遺構外から土師器甕（第33図13）、須恵器壺（同図14）、須恵器甕（同図15）、石器（同図16）

が出土している。13と14、特に14は胎土に海綿骨針が多く混入する。14は有台坏で、台は比較的低く、断面形は内側に稜を持つ三角形を呈する。内外面ともロクロナデ調整である。15の外側は平行タタキが施され、内面には同心円状のアテ痕が認められる。16はスクレイバーで、時期は縄文時代中期である。

4 D区の遺構と遺物

竪穴住居跡

S T 1 (第18・34図)

2 F19-76・86グリッドに位置し、東側はS X428と調査区壁に、また中央部分はS X47に切られている。平面形は方形で、規模は東西が3.6m以上、南北が3.2mである。覆土は、黒褐色・褐色の自然堆積土である。なお、S X47からは多量の土師器・須恵器片が出土している。

壁高は26cmを測り、床はカマド付近がやや低くなっているのを除けばほぼ平坦である。主柱穴は確認できない。カマドは北東角寄りに位置する。袖はほとんど遺存しておらず、煙道の大部分は調査区外にある。カマド燃焼部では焼土が多量に検出され、底面も焼けている。

遺物は、カマド付近から土師器壺（第34図3～5）が出土している。3は外面に煤が付着し、底部に木葉痕が残る。体部はわずかに内済するものと思われる。4は長胴壺で、頭部が短く外反しており、一部は強く外に引き出されている。体部外面の中央部分には帯状の被熱した使用痕が、また内面には輪積痕が認められる。5は内外面に煤が付着し、ほぼ直立する体部から口縁部が直線的に外反する。屈曲する部分に一条の沈線が認められる。

他に、土師器壺（第34図1）、鉢と考えられる土師器（同図2）、須恵器蓋（同図6）、須恵器壺（同図7）が出土している。1は無台坏で、体部下方と底部にケズリが認められ、外面にナデ、内面にロクロナデの調整が施される。胎土には白色粒を多く含む。2は底部に木葉痕、底部から体部にかけて被熱した使用痕が残る。体部外面はかなり摩滅しているもののハケメ調整が確認できる。6は短頸壺の蓋で、外面全体に自然釉が付着する。天井部は平坦で、にぶい橙色の付着物がほぼ全面を覆う。擬宝珠のつまみが付けられる。7は肩から体部にかけてなだらかな曲線を描き、体部上部に最大径を有する。外面には、タタキ成形後のロクロナデ調整が認められる。これらの遺物は8世紀中葉～後半の所産と考えられる。

竪穴建物跡

S T 50 (第22・35図)

2 F19-73・74・83・84グリッドに位置し、S K25・46・151、S P156に切られる。新旧関係は、古い順にS T50→S K151→S K46、S T50→S P156→S K25となる。平面形は全体的には長方形を呈するが、北側では弧を描く。規模は東西が3.2m、南北が4.0mである。覆土は、黒褐色シルト・黒色シルトを主体とし、にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に含む。にぶい黄褐色砂質シルトの混入具合から埋め戻されたと考えられる。

壁高は80cmを測る。壁は東側の一部がオーバーハングするものの、他は地山をほぼ垂直に掘り込む。床面は、東側でやや低くなる段差が見られるが全体に平坦である。床面からは、厚さ2mmほどの炭化した繊維質のものが全面に散き詰められた状態で検出された。柱穴は見つかっ

竪穴建物跡

ほぼ垂直の
掘り込み

ていない。

遺物は、壺器系陶器壺（第35図14～16）が出土している。いずれも内外面にナデ調整が施され、16の内面には被熱による剥落が見られる。

S T 174（第22図）

2 F19・72・73・82・83グリッド、S T50の約1m西に位置する。SK46・175・179、SX178との重複関係は、古い順にSK175→ST174→SK46・179、SX178となる。平面形はほぼ正方形で、一辺は3.2mを測る。覆土は、灰褐色・黒褐色の砂質シルト、黒褐色・黒色のシルトである。

深さは80cmと深い。壁は、東側と西側で地山を垂直に近い角度で掘り込む。床面はほぼ平坦である。柱穴は検出されていない。ST174より古いSK175から中世陶器が出土しているため、中世の遺構であると判断する。遺物は、土師器・須恵器片が出土している。

土 坑

SK15（第17・34図）

2 F19・85グリッドに位置する。SK16と重複し、SK15→SK16の新旧関係が認められる。平面形は1.6m×1.4mの方形で、深さは41cmを測る。

遺物は、須恵器系陶器壺（第34図14）が出土している。14は珠洲で、外面に平行タタキ、内面にアテが施される。胎土は緻密で、海綿骨針が混入する。

SK16（第17・35図）

2 F19・84・85グリッドに位置する。平面形は一辺が1.8mの隅丸方形で、深さは84cmを測る。覆土は、黒褐色シルトにぶい黄褐色砂質シルトが混入する。

遺物は、土師器器台（第35図1）、土師器壺（同図2）、壺器系陶器壺（同図3）が出土している。1・2とも胎土に赤色粒が混入する。1は摩滅が激しく、調整が確認できない。2は回転糸切り、内外面ロクロナデ調整である。3は体部資料で、内面にナデが施される。

SK20（第24・35図）

2 F19・94グリッドに位置する。D区中央部南壁付近では特に遺構が密集し、互いに切り合っている。SK20は、SK19・32・168・410、SP96・464を切っている。平面形は、一辺が約1.8mのやや歪んだ正方形で、南壁はゆるやかな弧を描く。底面までは128cmと深く、壁はほぼ垂直に掘り込んでいる。覆土は黒褐色シルトと灰黃褐色砂質シルトである。

遺物は、土師器有台壺（第35図4）、壺器系陶器壺（同図5）が出土している。4の高台は低く、「ハ」の字形に開く。5は壺の体部下部で、自然軸が付着する。

SK25（第22・35図）

2 F19・84グリッドに位置する。平面形は一辺が1.4mの隅丸方形で、全体に丸みを帯びている。深さは83cmを測る。覆土は黒褐色シルトで、下層に黄褐色砂質シルトを多量含む。

遺物は、壺器系陶器壺（第35図6）、金属製品（同図7）が出土している。6は内外面にナデ調整が施される。7は鉄製の容器の可能性がある。

SK26（第17・35図）

2 F19・84グリッドに位置する。平面形は東西が88cm、南北が80cmの隅丸方形である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さ26cmを測る。覆土は黒褐色シルトと褐色砂質シルトである。

遺物は、須恵器壺（第35図8）が出土している。8は外面タタキ、内面アテ調整で、胎土に海綿骨針と黒色吹き出しが認められる。

S K43（第21・35図）

2 F19-83・92・93グリッドに位置する。平面形は不整形で、調査区南壁に切られる。重複関係は、古い順にS K45・408→S K43→S K404となる。深さは67cmである。覆土は、黒褐色シルト・灰褐色砂質シルトの2層で、上層にぶい黄褐色砂質シルトをまだらに含む。

遺物は、瓷器系陶器壺（第35図9・10）、青磁碗（同図11）が出土している。9・10は体部資料で、青磁内面にナデ調整が施される。11は軸が緑灰色に発色し、胎土は灰白色である。

S K44（第21・35図）

2 F19-83グリッドに位置する。平面形は一辺が1.2mの方形で、深さは32cmを測る。覆土は、黒褐色シルトに黄褐色砂質シルトが混入する。

遺物は、須恵器壺（第35図12）、古銭（同図13）が出土している。13は北宋の「紹聖元寶」で、「紹聖元寶」初鋤年は1094年、書体は行書である。12については、S K192で後述する。

S K161（第21・35図）

2 F19-82グリッドに位置する。S K159・S X166と重複関係にあり、古い順にS X166→S K161→S K159となる。平面形はほぼ長方形で、長軸の長さは1.9m、深さは51cmである。覆土は黒褐色シルトで、下層では黄褐色砂質シルトをまだらに含む。

遺物は、瓷器系陶器壺（第35図18）と鉄滓（同図19・20）が出土している。

S K192（第20・39~41図）

2 F19-62・63・72・73グリッドに位置し、S D185に切られる。断面図の1層はS D185の覆土である。平面形は、西壁がほぼ直線の半楕円形を呈する。長軸は3.5m、短軸は3.0mを測る。断面図から深さ約55cmの所に平坦な面を確認することができる。調査後に検討した結果、S K192の掘り込みはこの面までで、先に存在した確認面からの深さが108cmの土坑とはほぼ同じ位置に、S K192が新しく構築されたものと考えられる。

遺物はすべてS K192出土扱いとした。土師器壺・鉢、須恵器壺・蓋・壺、石器など（第39図1～第41図7）がある。他にも土師器の破片が226点、須恵器の破片が59点と、先に構築された土坑、本来のS K192部分の両方から多数の土器が出土している。特に底面近くからは、投げ込まれた漆と土器片が丸く固まりをなして出土しており、この土坑は捨て場として利用されていたものと考えられる。

39-3は土師器壺、39-4は土師器鉢と推測される。いずれも底部に窪みがあり、底部から体部下方にかけて黒斑が広がる。

39-5は土師器壺で、外面にハケメ・ナデ調整が施される。底部には木葉痕が残る。

39-6・7は土師器壺で、いずれも内外面にロクロナデ調整が施され、胎土に赤色粒が多く混入する。6は全体に摩滅の程度が激しいが、底部に回転糸切りの痕跡が認められる。7は特に外面が被熱して赤く焼けている。

40-1は土師器鉢で、内外面にロクロナデ調整が施され、赤色粒が顕著に見出される。

39-8~14は須恵器無台壺で、いずれも内外面にロクロナデ調整が施される。12を除き、胎土には海綿骨針と黒色吹き出しが確認される。特に8~10では海綿骨針が多量に混入している。

8~11は回転糸切り、12~14は回転ヘラ切りである。8は、口縁部直下に強い凹が作り出され、口縁部は玉縁状を呈する。外面に煤が付着している。9は底径が小さく、体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。10(36-1と同一のもの)は底径が小さく、体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は弱く外反する。ただし、一部分のみ直線的な体部で口縁部もほとんど外反しないところがある。11は底部資料で底径が小さい。12(35-12と同一のもの)は口径・底径が大きく、身は浅い。底部の厚さに比べて体部は薄い。13は、底部中央の窪みと対応するように内底面中央が盛り上がっている。14は内底面に使用痕が認められる。

種 硬 40~4~11は須恵器有台杯で、すべて内外面にロクロナデ調整が施され、胎土には海綿骨針と黒色吹き出しが見出される。底部は4~7が回転ヘラ切り、8~11が回転糸切りである。4は、腰部が屈曲し縦を持つ接続である。台部は比較的高く、高台外面と内面全体に灰被りが顕著に認められる。5~7は、ヘラ切り後無調整の底部に断面四角形の台を貼り付けたものである。6~8は台の内側に縦を持ち、8は低い高台が「ハ」の字状に貼り付けられる。9は、端部を外側に引き出した特徴的な台が貼り付けられる。10は接地面が頗り、外側のみ接地面する低い台である。11の体部は丸みを持ち、外面ともロクロナデによる凹凸が顕著に見られ、口縁部は特徴的にくびれ外反する。

40~12は、体部が丸みを帯びて立ち上がる小型の壺と考えられる。

40~13(36-2と同一のもの)・14は須恵器双耳杯である。ケズリにより面取りされた耳の平面形は、いずれも先端部が幾分狭まる方形を呈する。

40~2~3は須恵器蓋である。2のつまみは中央部がやや突起するものの、高さが4cm弱しかなく扁平である。天井部内面は著しく摩滅し、滑らかである。3のつまみは、中窪みの扁平なものである。

15は須恵器壺と考えられる。肩から体部へはなだらかな曲線を描き、体部上部に最大径を有する。外面に自然軸が付着する。

41~1~7は須恵器壺で、いずれも胎土に海綿骨針と黒色吹き出しが認められる。1~2の体部外面は平行タタキ後ロクロナデ調整が施され、外面には自然軸が付着する。1は肩が大きく張り出し、外反する頸部から口縁部が台形状に引き出される。内面には同心円状のアテ痕が明瞭に残る。2の頸部は外反し、口縁端部は内側に弱く引き出される。3~6は体部資料である。3の外面はタタキ成形後カキメが入れられ、自然軸が認められる。内面には梢円形のアテ痕が残る。6は外面に平行タタキ、内面に平行アテの調整が施される。4~5の底部は中心部が窪み、内底面は盛り上がる。4は、外面がケズリ後ナデ、内面はカキメ後ナデの調整が施される。5は、外面はタタキ成形後ナデ、内面はアテ後ナデの調整である。7の底部は広く欠損し、体部外面は平行タタキ、内面はアテ後ナデの調整が施される。内面にはアテによる凹凸が顕著に見られる。

石器の使用痕 39~1は石鉋、39~2は2次加工のある石器剥片である。1は、両側をはさんで柄に取り付けた痕跡、エッジがぶれた部分が確認される。下方に摩滅して光沢のある使用痕が見られる。

溝 跡

S D 185・186 (第19・25・36~38図)

S D 185・186は対になる溝で、2F 19~62~65・72~75グリッドに位置する。S D 185はS

K192を切り、調査区外に未検出の部分を残す。S D186はSK24を切る。規模は、東西が112m、南北が8.5m程度で、南側に1.2mの開口部を持つ。

S D185の幅は80~120cmで、深さ32cm~42cmである。S D186は幅90~130cm、深さ45cm~55cmで、断面形はいずれもU字形を呈する。覆土は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色砂質シルトをわずかに含む。南側半分では、確認面から深さ30cm程度までの層から、数cm~30cm程の円礫が溝の中軸に沿って敷き詰められた状態で大量に検出された。

礫層直下の底面から珠洲V期の鉢、礫層下方の覆土からは古瀬戸後Ⅰ期~後Ⅱ期の鉢目皿、さらに礫層に混入するものを含め14点の中世陶器が出土している。これらのことから、溝は1400年頃またはそれ以降に掘り込まれ、自然堆積で埋没した後に礫層が構築された様子が断面からうかがえる。他にS D186から五輪塔が出土している。この礫を伴う溝は、内側に存在したお堂などの仏教施設の外周を巡る雨落ち溝として機能していたと推測される。

S D185の出土遺物は、須恵器坏(第36図1・2)、須恵器系陶器擂鉢(同図3)、瓷器系陶器甕(同図4・5)、陶器(同図6)、石器(同図7)、釘と考えられる金属製品(同図8)である。

1と2は、SK192で既に述べた39~10、40~13と同一のものである。3は珠洲V期に相当し、幅2.9cmの鉢口を12条の櫛歯原体で描く。口縁端面に櫛描波状文が施され、端面を窪ませ内側に作り出されている。4・5は同一個体で、内外面ナデ調整である。6は瀬戸の灰釉鉢目皿で、古瀬戸後Ⅰ期~後Ⅱ期に相当する。鉢口は3条以上認められる。口縁部内外面に施釉し、体部は露胎である。7は石核である。

S D186出土遺物は、土師器鉢(第36図9)、須恵器甕(同図10・11)、須恵器系陶器(第36図12~第37図1)、瓷器系陶器(第37図2~6)、石製品(第37図7~第38図2)である。

36~9は内外面にナデ調整が施され、把手部は手づくねによるもので丸みを帯びる。36~10・11は胎土に海綿骨針、黒色吹き出しが認められる。10は肩から体部にかけてなだらかな曲線を描く。外面に自然釉が付着する。11は体部外面に櫛描波状文と沈線状の窪みが見られる。36~12と37~1は同一個体で、珠洲V期の壺である。頸部はくびれて弓形になり、外面に山形の凸帯を有する。36~13~15は珠洲V期の鉢で、いずれも内外面にロクロナデ調整が施され、胎土に海綿骨針が混入する。13は内面と口縁端面の境が丸みを帯びて明瞭でなく、口縁部はわずかに外反する。14・15はやや張り出しを持つ口縁端面で内面との境を画す。16・17は珠洲の擂鉢で、ともに内外面にロクロナデ調整が施される。16は、8条以上の波状の鉢口が縱方向に走り、外面に自然釉がかかる。17は鉢口が3条以上で、海綿骨針の混入が認められる。37~2~6は甕で、2・3・5に黒色吹き出しが認められる。4・6は同一個体である。

37~7、38~1・2は凝灰岩製の五輪塔で、7が台座、1は火輪、2は水輪である。

その他の遺構と遺物

SK5(第18図)は、径が85cmの円形を呈し、深さは58cmである。遺物は、瓷器系陶器甕(第34図12)と硯(同図13)が出土している。12は内面ナデ調整で、外面に自然釉が付着する。胎土には大粒の砂が混入する。13は黒色の粘板岩製長方硯で縦面に切断痕が残る。海面に墨の付着が見られる。

SK169(第21図)は、西側を調査区壁に切られている。平面形は隅丸方形と推測される。深さは35cmである。遺物は、須恵器蓋(第35図21)が出土している。

五輪塔
雨落ち溝

珠洲V期の擂鉢

古瀬戸の
灰釉鉢目皿

S K 404（第21図）は調査区外に広がり、S K 43・45・160を切る。平面形は方形、または梢円形と推測される。確認面からの深さは60cmである。遺物は、鉄滓（第41図8）が出土している。

S K 425（第18図）は、径が1.2mのほぼ円形を呈し、S K 426・S X 48を切る。深さは47cmである。遺物は、刀子と考えられる金属製品（第41図9）が出土している。

S P 128（第17図）から釘と考えられる金属製品（第35図17）が出土している。

S X 2（第18図）は、長軸が2.4mの歪な長方形を呈し、深さが91cmである。覆土は黒褐色シルト・にぶい黄褐色砂質シルトである。遺物は、壺器系陶器壺（第34図8）と壺器系陶器甕（同図9）が出土している。8の内面はナデ調整が施され、外面に自然釉が付着する。越前の可能性がある。9は珠洲で、外面タタキ、内面アテ調整である。胎土は緻密で、海綿骨針が混入する。

S X 4（第18図）は、長軸が1.5m、短軸が1.1mの梢円形を呈し、深さは45cmである。遺物は、壺器系陶器甕（第34図10・11）が出土している。10・11は同一個体で、内外面ナデ調整である。

遺構外から、土師質土器（第42図1・2）、須恵器坏（同図3）、須恵器蓋（同図4）、壺器系陶器（同図5～13）が出土している。

1・2は回転条切りで、外面にはロクロナデ調整が施され、胎土に海綿骨針が混入する。1は小型のかわらけで、内外面に油煙による煤が付着する。2は柱状高台で、底部は体部と比較し器厚が極度に肥厚する。3は外面ロクロナデによる凹凸が顕著に見られ、胎土に海綿骨針が多量混入する。4は蓋の天井部から体部にかけての資料で、つまみの貼り付け部分が確認できない。胎土は海綿骨針を含み、黒色吹き出しと細砂の混入が顕著に見られる。5～11は甕、12は鉢、13は擂鉢である。5は、常滑の技術影響を受けている。頸部はくびれて弓形になり、口縁端部を上方に引き出す。6～12は体部資料で、6・7・9・11は同一個体である。

5 E区の遺構と遺物

豎穴住居跡

S T 520（第26・44図）

縄文時代の豎穴住居跡は、S T 520の1棟のみである。2 A 8-74・75グリッドに位置し、検出された北西部分を除き大部分が調査区外にある。平面形は円形あるいは梢円形を呈するものと推測される。覆土は、黒褐色シルト・黒色シルトを主体とし、褐色・灰褐色のシルトが混入する。壁はほぼ垂直で、深さは確認面から約40cmである。

周溝 床はほぼ平坦である。周溝は壁に接し、断面U字形を呈する。幅は約15cm、深さは9cm程度である。径15cmの浅い掘り込みは明確に柱穴と認められるものではない。炉は未検出である。

遺物は、縄文土器（第44図1・2）、円盤状石製品（同図3）、石器（同図4・5）と、被熱したものを含む石器の剥片が床面から3点出土している。他にも石器の剥片は24点出土している。1は深鉢の体部破片で、R L 縄文が施されている。焼成が軟質で胎土には粗砂を多く含む。2は深鉢の底部破片で、器面の摩滅が著しく詳細は不明だが、胎土が緻密でなく焼成が甘いことから前期後業の所産の可能性がある。4・5は石核で、5の後線が摩滅している部分に顕著な使用痕を認める。

S T501 (第27・28・43図)

2 A 8 - 53・54・63・64グリッドに位置する。南東部で S B556を切っていることから、本址が S B556より新しいと考えられる。平面形は一辺4.0mの方形である。覆土は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色粘質シルトが混入する。深さは約30cmで、壁は急角度で掘られている。

床面は、全体的にはほぼ平坦だが、所によりゆるやかな凹凸が見られる。中央部付近で浅い2基の掘り込みが検出された。E K547は径が約1.0mの円形で、深さは21cmである。本址に伴う貯蔵穴と考えられる。E K548は長軸が約1.6mの不整形で、深さは14cmである。

主柱穴は E P543と E P545である。E P543は西壁際、南西角のカマド近くに位置する。平面形は長軸が70cm、短軸が45cmの歪んだ梢円形を呈し、確認面からの深さは89cmを測る。床面からの掘り込みの深さは約59cmとしっかりしている。E P545は東壁際、南東角近くにあり、対向する壁柱穴 E P543と位置的に対をなす。直径が30cmで、確認面からの深さは76cm、床面からの掘り込みの深さは約46cmである。中央付近に位置するE P549も主柱穴の可能性がある。直径が30cmで、床面からの掘り込みの深さは43cmである。E P546・552・553・554は補助柱穴の可能性がある。E P553・554は北西と北東の角で対をなす位置にあるものの、床面からの深さが10数cmほどと浅く、主柱穴にはならないと考えられる。

カマドは南壁の南西角寄りに位置する。煙道は堅穴外に約1.4m伸びる。カマド袖は、にぶい黄褐色粘質シルトにより構築されている。燃焼部はわずかに掘り窪められており、焼土が多量に検出されている。

遺物は、須恵器蓋（第43図2）、須恵器坏（同図3）、土師器甕（同図4～8）、繩文土器（同図1）や多量の土師器、須恵器片と石器が出土している。両極削離による黒曜石の剥片は、不純物を含まず比較的透明度が高い。

2は天井部に丸みを持ち、つまみを欠損する。口縁端部は幾分内傾し、胎土には海綿骨針が多量混入する。3は有台坏で、E L541の煙道から出土している。体部は内湾した後、直線的に開く。底部は回転ヘラ切りで、高台は端部を外と内の両側につまみ出している。高台の接地面に黒色の付着物が確認される。胎土には海綿骨針が多量混入する。4～7は長胴甕で、いずれも体部に幾分丸みを持ち、口縁部を「く」の字状に強く屈曲させ、口縁端部に平坦面を作り出している。調整は内外面にカキメ、ロクロナデなどが施されるが、7の内面だけはカキメが施されていない。4は内外面、特に体部下方に使用痕が認められる。底部には丸みがある。5・6は底部を平底に作り出しているが、底部中央がやや盛り上がる。6にも4と同様の使用痕が確認される。8は小型甕で、内外面ともロクロナデによる凹凸が顕著に見られる。体部は弱く内湾し、口縁部は短く直線的に外反する。底部のはば中央が穿孔されている。1は深鉢の口縁部で、R L R繩文が施され、隆沈線の渦巻文が描かれる。大木9式である。これは、高瀬山遺跡（1期）7・8区に見られる繩文時代中期後葉集落圈からの流れ込みと考えられる。

出土遺物から8世紀後半～9世紀前半の住居跡と考えられる。

掘立柱建物跡**S B556** (第29図)

2 A 8 - 64・65・74・75グリッドに位置する。段丘中位面に立地し、標高は約111.5mである。

S B557、S T501と重複関係にある。S T501との新旧関係については、S T501の床面から S

8世紀後半～
9世紀前半の
堅穴住居

B 556の柱穴 E B 550が検出されていることから、時代の古い順に S B 557→S T 501となる。建物の構造は、梁行2間、桁行3間の東西棟である。主軸方向はN-82°-Wである。規模は梁行が3.1m、桁行が4.2mで、面積は約12m²である。柱心心間の距離は、西側梁が北から1.4m-1.7m、東側梁が1.6m-1.5mを測る。北側桁が西から1.5m-1.4m-1.3m、南側桁が1.6m-1.2m-1.4mを測る。

柱穴の平面形は方形または楕円形を呈し、規模は45~80cm、深さは24~46cmである。覆土は黒褐色シルト・黒色シルトを主体とし、柱痕（アカリ）はすべてのピットで検出されている。なお、E B 502・503・515・517がS B 557と共通する柱穴として使用されていることから、新旧の前後関係はわからないものの建て替えが行われたと推測される。

獨立柱建物 の建て替え

遺物は、E B 503から石器の剥片が1点出土している。

S B 557（第30図）

2 A 8-64・65・74・75グリッドに位置する。段丘中位面に立地し、標高は約111.5mである。S B 556と重複関係にある。建物の構造は、梁行2間、桁行3間の東西棟である。主軸方向はN-82°-Wである。規模は梁行が3.1m、桁行が4.1mで、面積は約12m²である。柱心心間の距離は、西側梁が北から1.7m-1.4m、東側梁が1.5m-1.4mを測る。北側桁が西から1.5m-1.2m-1.4m、南側桁が1.5m-1.3m-1.3mを測る。

柱穴の平面形は方形または円形を呈し、規模は40~65cm、深さは18~30cmである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、柱痕はすべてのピットで検出されている。

遺物は、E B 518から石器の剥片が1点出土している。

溝跡

S D 530溝跡（第26図）

2 A 8-55~57グリッドに位置し、S D 531に切られる。ほぼ東西方向に直線的に走り、長さは12m以上で調査区外に伸びる。幅は55~65cmで、深さ17cm~25cmである。断面形はU字形で、覆土は黒褐色シルト・褐色粘質シルトである。

遺物は、石器の剥片が出土している。

S D 531溝跡（第26・44図）

2 A 8-35・36・46・56・66グリッドに位置し、垂直に交差してS D 530を切る。S T 501、S B 556・557と平行してほぼ南北方向に走り、北に向かうにつれやや西寄りにカーブする。北端は搅乱で切られている。長さは14m以上で調査区外に伸びる。幅は70~90cmで、深さ39cm~51cmである。断面形はV字形を呈し、覆土は黒褐色シルト・褐色粘質シルトである。

遺物は、土師器、須恵器の破片、流れ込みの石器（第44図7）が出土している。

その他の遺構と遺物

S P 528（第26図）では縄文土器（第44図6）が出土している。6は中期後葉の深鉢の体部破片で、R L R 縄文が施される。

遺構外からは縄文土器（第44図8・9）、石器（同図10~12）が出土した。8は深鉢の体部破片でR L 縄文が施され、沈線により2単位の楕円形が描かれる。大木9式と考えられる。9は中期後葉の深鉢の体部破片で、R L R 縄文が施される。8・9ともに外面に煤が付着している。10~12はいずれも頁岩製の石核である。10には節理が認められる。

6 F区の遺構と遺物

土 坑

S K606 (第31・42図)

Z10-33・34グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は70cm×50cm、深さは26cmである。

遺物は、須恵器壺（第42図14）と須恵器蓋（同図15）が出土している。14は回転系切りの無台壺で、内外面ともロクロナデ調整が施されている。15の天井部は丸みを持ち、回転系切りの痕跡が認められる。つまみは浅いリング状を呈し、幾分沈み込む形で貼り付けられている。15・16ともに胎土に海綿骨針と黒色粒が混入する。

溝 跡

S D603・618・647 (第31図)

S D603はF5区、S D618はF6区、S D647はF4区に位置し、Z10-05・15・25・45グリッド内にある。S D618はS K619に、S D647はS K648に切られる。いずれも段丘崖に平行した一直線上に位置する。これらは、ほぼ南北方向に直線的に走る1条の溝跡の可能性が高い。
北端から南端までの長さは約20mと推測され、幅は40~50cm、深さは8cm~19cmである。F区の南約100mのところを流れる最上川方面に向かうほど、幅がやや広がり深くなる。

1条の溝跡

遺物は、土師器・須恵器の小片42点と石器の洞片が3点出土している。

同様に、S D649とS D669も1条の溝跡と考えられる。

その他の遺構と遺物

S K621・648から須恵器壺（第42図16・19）、S K657から鉄滓（同図20）、S X646から須恵器壺（同図17）と須恵器蓋（同図18）が出土している。16~19はいずれも内外面にロクロナデ調整が施され、胎土は海綿骨針が混入し黒色吹き出しが見られる共通点がある。16・17・19は回転系切りである。16は有台壺で、台の端部は内側に稜を持つ。17は内底面が、18は天井部内面が著しく摩滅し、滑らかである。19は無台壺で、体部はわずかに内湾するが口縁部は弱く外反する。

V 総 括

**高瀬山遺跡
(1期) 発掘調査
区との関連**

今回の発掘調査では、地区による検出遺構及び出土遺物の性格の違いを看取することができた。また、E区に隣接する高瀬山遺跡の1期発掘調査区(第4図)との関連について明らかになつた事柄もある。この章では、これらをつなぎ合わせることによって、高瀬山遺跡(HO)2期の様相について、時代別に、また遺物については出土した中世陶器を中心に述べていく。

**縄文前期の
環状集落**

縄文時代の遺構は、E区で検出された竪穴住居跡1棟のみである。このS T520からは前期後葉の深鉢が出土している。高瀬山遺跡(1期)発掘調査では、7・8区において前段大木5~6式の直径120mの環状集落跡が発見されている。20mを超える大型住居跡が3棟、15m前後のものが9棟、標準的な規模のものが37棟検出され、集落中央部には直径30mの広場を持つ。この大集落は、E区から北西に50m程離れた同じ中位段丘面上に立地する。これらのこととは、S T520が大集落の縁辺部に位置し、上記集落圏が広がる可能性を示唆するものである。

他の遺構と遺構外から出土した大木9式の深鉢など中期の縄文土器は、7・8区で検出された中期後葉の集落に關係するものと推定される。またE区の南100m程の地点では、山形県教育委員会による平成14年度の試掘調査において、後期の竪穴住居跡が3棟検出されている。以上のように、S T520はこの一帯で営まれた縄文の集落の構成と変遷を解明する資料となる。

奈良・平安時代については、B~E区で竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出された。出土遺物から、これらの竪穴住居は8世紀中葉~9世紀後半の所産と推測される。B区のS T341とD区S T1は奈良時代、C区のS T290・395は平安時代に相当する。A~D区に係る奈良・平安時代の集落は、B区からD区東部に至る一帯を西端として、東から北方面にかけて広がつてゐたものと考えられる。

区画溝

高瀬山遺跡(1期)調査では、7・4区から東隣りの1区にかけて奈良時代の竪穴住居跡が高い密度で検出されている。奈良時代の住居数は31棟で平安時代の6棟に卓越する。そのほとんどがE区のS T501と主軸方向をほぼ同じくし、カマドを南北角寄りに持つものが多い。このことから、S T501は同じ時期にこの集落圏内に位置していたものと考えられる。S D531は、7・4区を貫く溝跡と位置的に連続し形状も同じである。1期調査区全体で計22条の溝跡が検出されているが、奈良・平安時代の遺物が出土し、同時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡との重複関係をほとんど持たないという共通した特徴を持つ。S D531も同様で、この溝は奈良・平安時代の竪穴住居及び掘立柱建物で構成される集落に伴う区画溝であると推測される。

中世陶器の分類

中世では、B区のS K343から鉄滓と炭、古銭が出土し、この土坑は鉄製品の生産に関わる場であった可能性がある。同様に近接するS K354でも炭と古銭、また中世陶器が出土していることから、S K343と関連する遺構であったと考えられる。

須恵器系陶器

須恵器系陶器(第45図)については、11点のうち32-1、34-9・14、36-3・12・15・17、37-1の10点で海綿骨針が確認され、緻密な胎土である。これらは珠洲の可能性が高い。

36-3・12-15、37-1は、吉岡編年の珠洲V期に相当する。32-1はやや粗雑な胎土で在地産の可能性が残る。

壺器系陶器については、胎土の特徴などから①～⑦（第45・46図）に分類することができた。 壺器系陶器

①の42-5は、常滑の技術影響で成立した壺器系陶器である。常滑市民俗資料館の中野晴久氏の実見によると、年代は13世紀末から14世紀前半と考えられる。また、この時期の東北地方の在地窯である八郎窯や白石窯などの資料と、受け口状に作られた口縁部形態が類似する（飯村1995）。他に42-5と胎土、焼成が類似するものとして35-10・14と42-12が挙げられる。

②は、胎土が緻密で堅くしまり、外面が茶褐色であるのに加え、緑褐色の自然釉がかかる。これらの特徴から越前の可能性がある。③は、胎土及び内外面が灰色の特徴を示している。胎土には細砂が混入し、高瀬山遺跡に隣接する三条遺跡出土の能神狼沢窯の甕に類似する。

④～⑥の胎土に共通する特徴は、乳白色の粘土が練り込むように混入する点にある。在地産と考えられる。④は胎土が橙色と明黄褐色で、内外面がにぶい赤褐色になっている特徴を示す。胎土には赤色粒・透明粒・粗砂が混入している。これら8点は、甕2個体の可能性がある。⑤は胎土の色調がにぶい橙色で、内外面は黒みを帯びる。胎土は④に類似し、赤褐色粒が混入する。⑥は胎土の色調が灰色、内面は灰色と褐灰色で、外表面は酸化して黒みを帯びる。胎土には細砂と黒色粒が混入する。34-12は外面に自然釉が認められる。

⑦の胎土の色調には、灰色と褐灰色、暗赤灰色などがあり、内外面が赤みを帯びているものや、35-15、42-13のように胎土がサンドウイッチ状に3層の色調になるものも認められる。⑦のグループも在地産と考えられる。胎土に共通するのは粗雑でしまりがない点で、やや大きめの砂礫が混入する。乳白色の粘土の練り込みは見られず、④～⑥とは識別できる。5個体以上の甕と擂鉢1個体を含む。

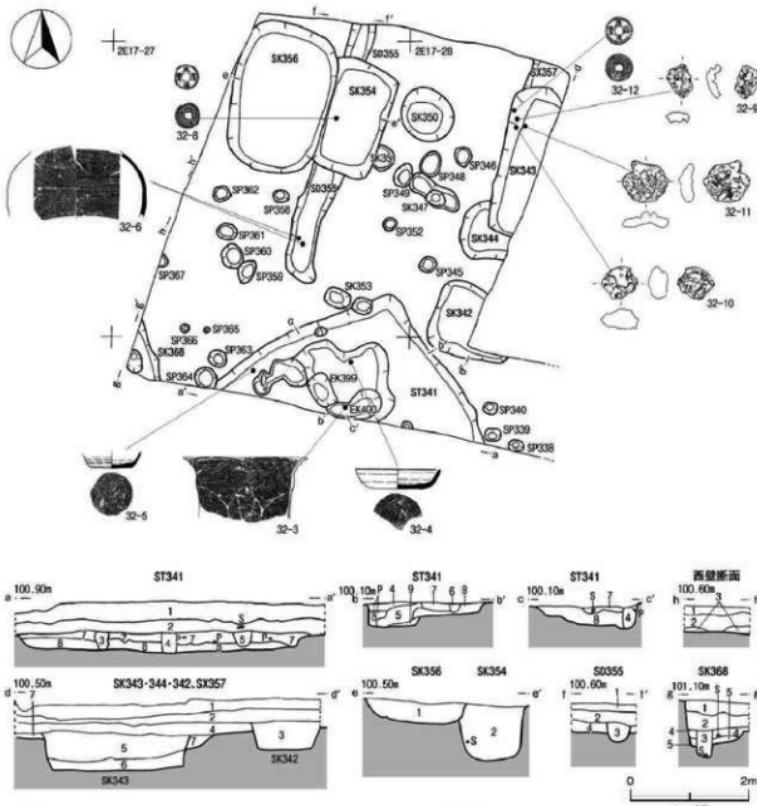
D区のS T50、S T174は、平面形が方形で大規模、深さは80cm、壁を垂直に掘り込むといった点で、D区の他の土坑とは一線を画す構造である。特にS T50は、長軸が4.0m、短軸が3.2mと規模が大きい。中世陶器が出土し、床面から繊維状の敷物の炭化物が検出されたことも特徴的である。柱穴は検出されなかったが、古代の竪穴住居跡とは掘り込みの深さが歴然と異なり、他の形態的観点及び出土品からも半地下式の竪穴建物と判断した。

D区における中世陶器や古錢が出土した方形の土坑として、S X2、S K16・20・25・43・161・175・179を挙げることができる。規模は、長軸で1.7～2.4m、深さが51～128cmを測る。また、重複関係から中世の所産と考えられる方形の土坑にはS K17・46・151・158・159・178・184・404があり、合わせると16基となる。他にも規模・深さ・形状から同種の方形の土坑と推定されるものが6基存在する。

これまで指摘した立地条件や出土遺物から、最上川に近接するD区が中世における舟運と流通の一拠点であったとの想定は可能であろう。以上の事柄から、大型の竪穴建物については倉庫としての用途が考えられる。また、竪穴建物以外の方形の土坑は、大型の竪穴建物を機能上補完する小倉庫群跡と考える。

半地下式の
竪穴建物

舟運と流通
の一拠点

**ST341**

- 1 10YR3/1 黒褐色土 かうり大きなブロック状の粘土と小石が混じる粘土
- 2 7.5YR3/1 黒褐色土 小さな炭化物が混入する表土
- 3 7.5YR3/1 黒褐色土 炭化物が微量混じる
- 4 5YR2/1 黒褐色土 炭化物がやや多く混じる
- 5 7.5YR2/1 黒色土 7層より炭化物が多く混じり、地山の小さな粒を含む
- 6 7.5YR3/2 黒褐色土
- 7 7.5YR2/1 黒色土 地山がブロック状に混じり、小さな炭化物と土器が混入
- 8 10YR3/3 黄褐色土
- 9 10YR3/3 黄褐色砂

SK343-344-342-SK357

- 1 10YR3/1 黒褐色土 ブロック状の粘土と小石が混じる粘土
- 2 7.5YR3/2 黑褐色土 表土
- 3 7.5YR3/2 黑褐色土 に少い黄褐色土が混在し、炭化物を含む。SK342の覆土
- 4 7.5YR3/2 黑褐色土 炭化物・粘土が混在する表土の下層
- 5 10YR3/1 黑褐色土 に少い黄褐色土が混在し、炭化物を含む
- 6 10YR3/1 黑褐色土 5層に分を含む。SK343の覆土
- 7 10YR3/1 黄褐色土

西壁断面

- 1 10YR3/1 黒褐色土 大きなブロック状の粘土が混じる粘土
- 2 7.5YR3/1 黒褐色土 表土
- 3 10YR3/3 黄褐色土

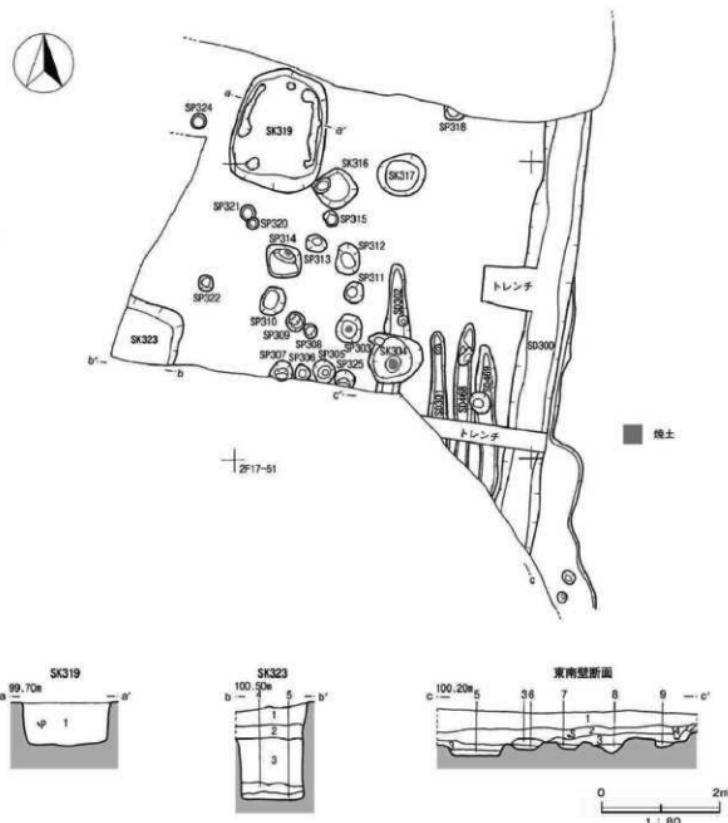
SK354-356

- 1 10YR3/1 黒褐色土 大きなブロック状の粘土が混じる粘土
- 2 7.5YR3/2 黑褐色土 表土
- 3 10YR3/3 黄褐色土 黑褐色土が混在
- 4 7.5YR4/3 黄褐色土

SD355

- 1 10YR3/1 黒褐色土 大きなブロック状の粘土が混じる粘土
- 2 7.5YR3/1 黑褐色土 表土
- 3 7.5YR3/2 黑褐色土 黑褐色土が混在
- 4 7.5YR2/1 黑色土 粘土質
- 5 10YR3/1 黄褐色土

第11図 B区の遺構(堅土住居跡ほか) ST341・SK343ほか



SK319		
1	10YR2/1	黒色土
2	7.5YR2/1	黒褐色土
3	3YR2/1	黒褐色土
4	7.5YR3/3	暗褐色土
5	2.5YR2/1	赤褐色土

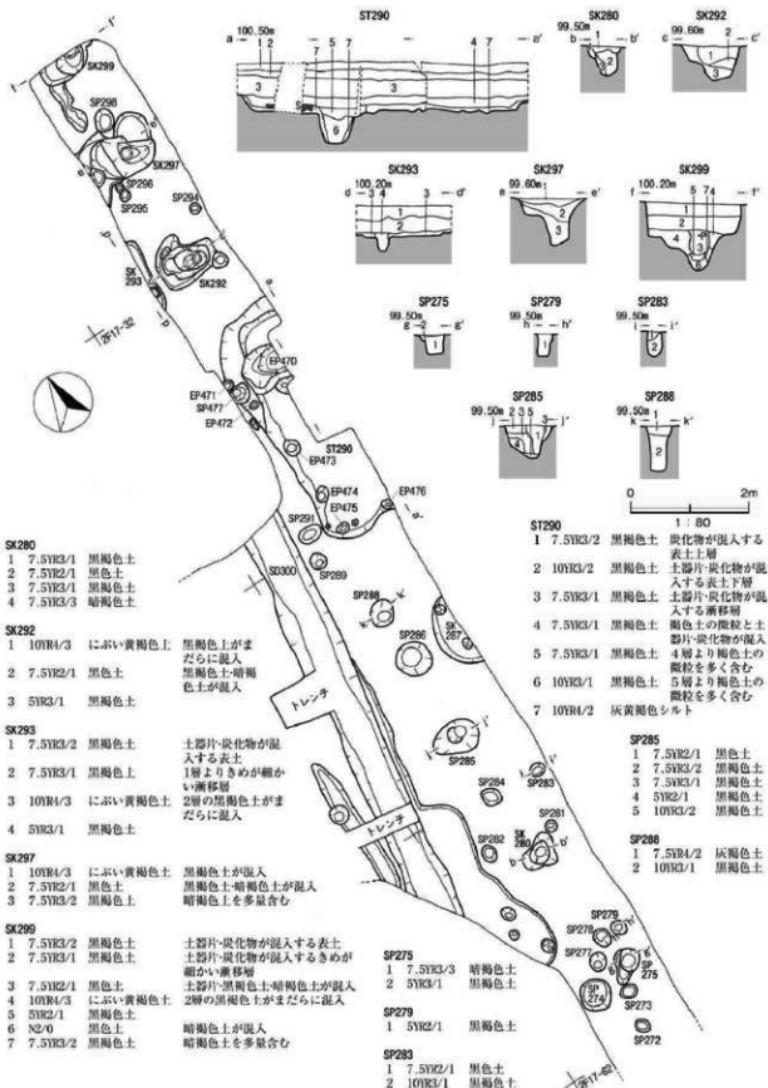
SK323		
1	10YR3/1	黒褐色土
2	7.5YR2/1	黒褐色土
3	3YR2/1	黒褐色土
4	7.5YR3/3	暗褐色土
5	2.5YR2/1	赤褐色土

東南壁断面		
1	10YR3/2	黒褐色土
2	5YR2/1	黒褐色土
3	7.5YR3/1	黒褐色土
4	7.5YR3/1	黒褐色土
5	7.5YR3/2	黒褐色土
6	7.5YR2/1	黒褐色土
7	10YR3/2	黒褐色土
8	7.5YR3/2	黒褐色土
9	10YR4/2	灰黄褐色土

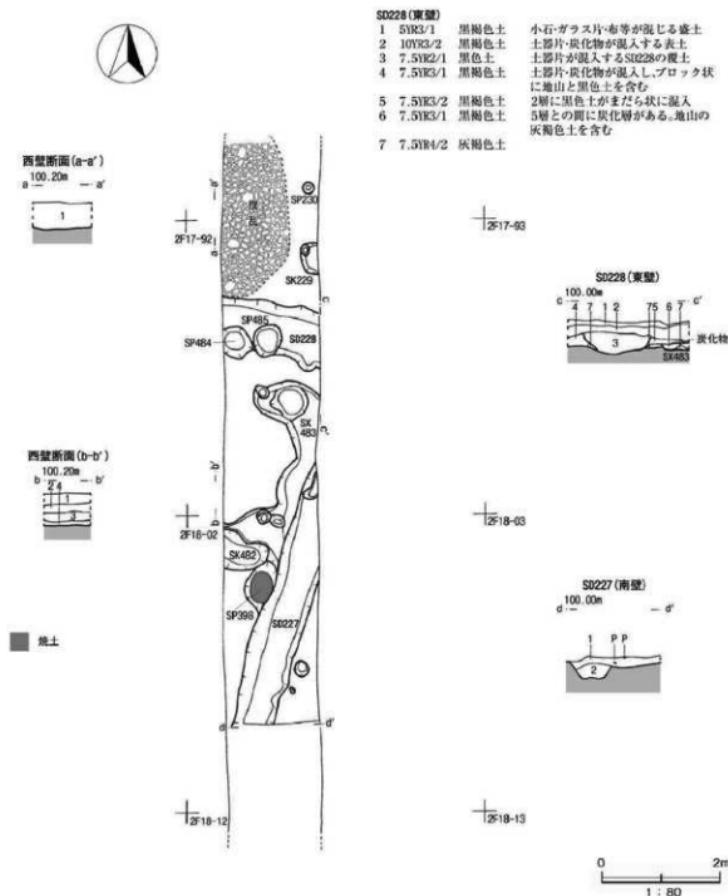
土器片・炭化物が混入する表土
土器片・炭化物が混入する耕層上層
土器片・炭化物・埴山の暗褐色土が混入する耕層下層

SD300の覆土
SD46bの覆土
SD46bの覆土
地山のにぶい黄褐色土が混入。SD301の覆土
地山のにぶい黄褐色土を多量含む

第12図 B区の遺構(土坑ほか) SK319・323ほか

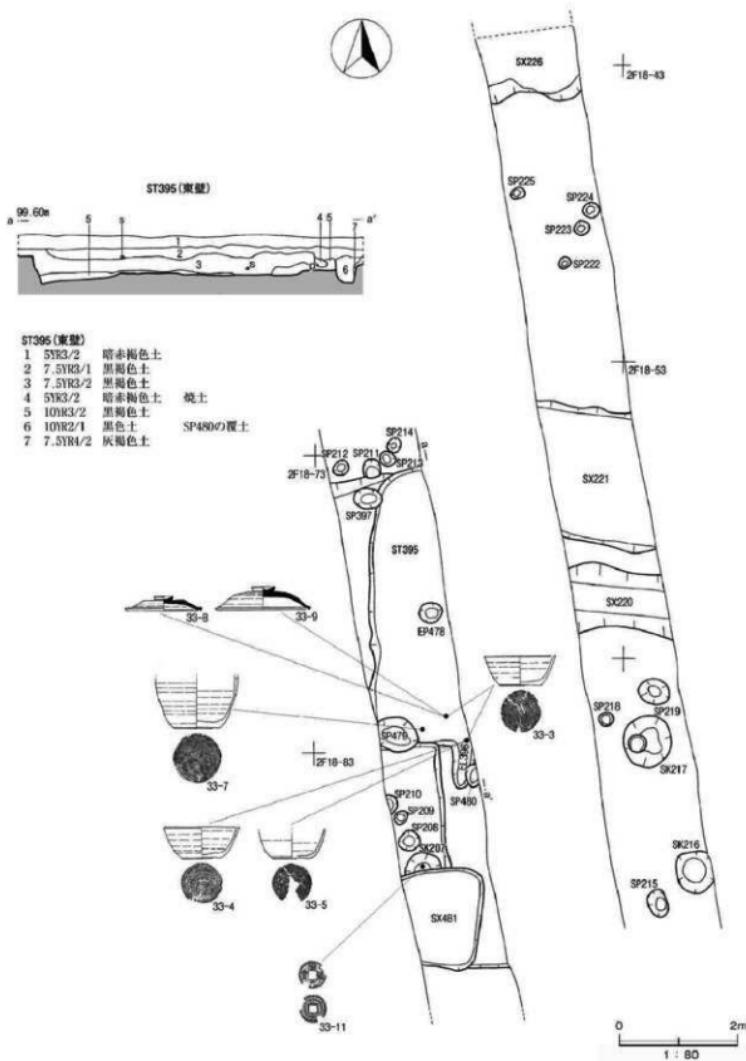


第13図 C区の遺構(堅穴住居跡ほか) ST290・SK280ほか



西壁断面(a-a')		
1	10YR3/2	黒褐色土
プロック片・小石が混じる塊乱		
西壁断面(b-b')		
1	10YR3/2	黒褐色土
2	7.5IR2/2	黒褐色土
3	7.5IR3/1	黒褐色土
4	7.5IR3/1	黒褐色土
ガラス片・小石が混じる塊乱		
表土		
漸移層上層		
地山の暗褐色土を多く含む漸移層下層		

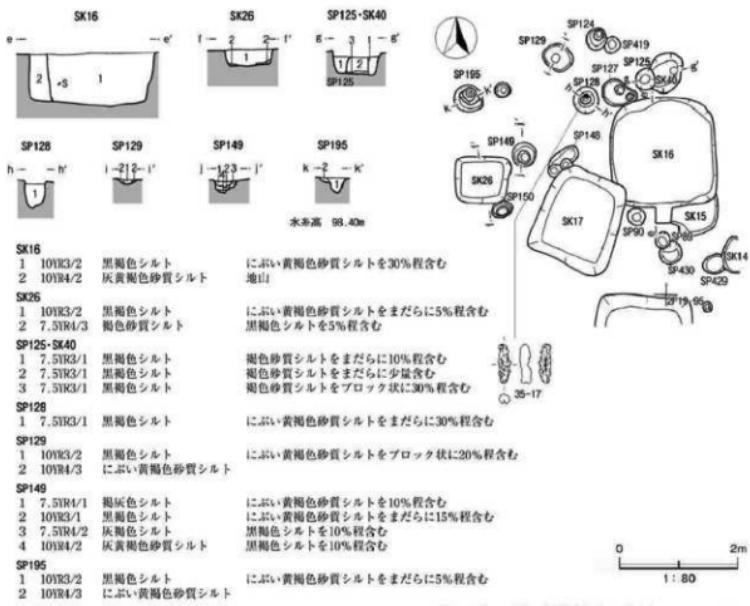
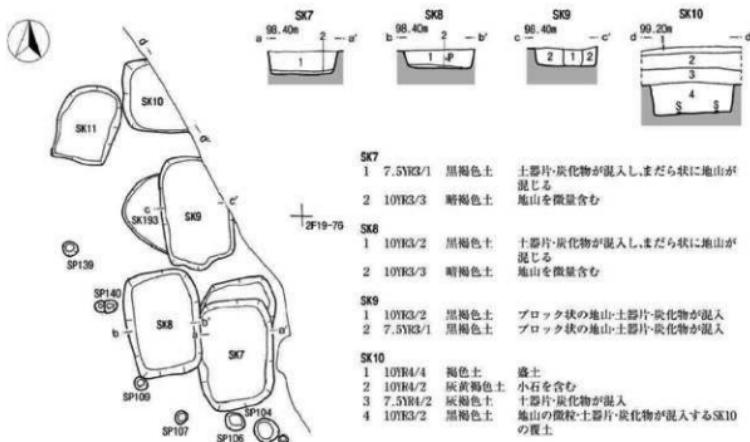
第14図 C区の造構(溝跡ほか) SD227・228ほか



第15図 C区の遺構(竪穴住居跡ほか) ST395ほか

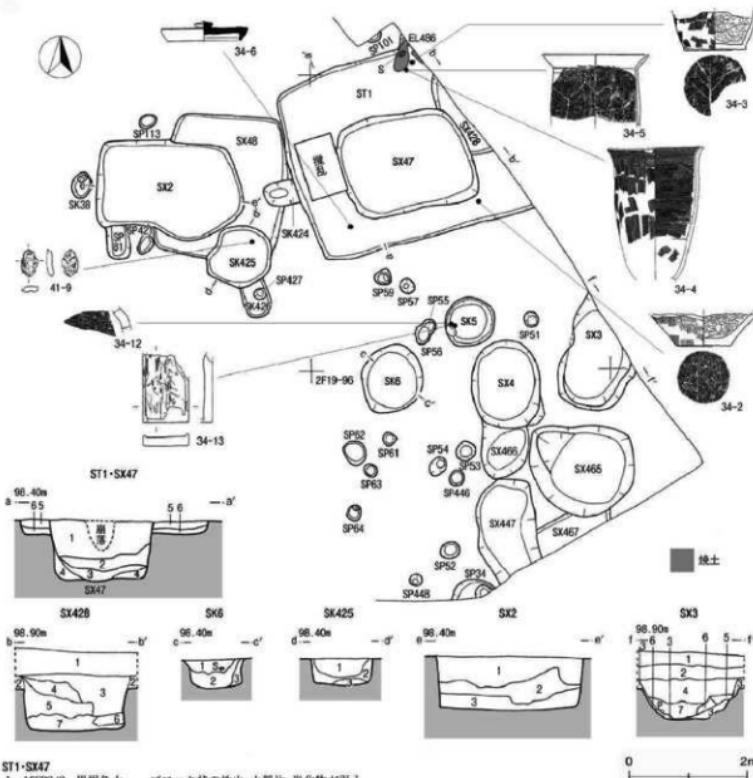


第16図 D区の遺構全体図



第17図 D区の遺構(土坑・柱穴) SK7・16ほか

遺構実測図



ST1・SX47

- 1 10YR2/2 黒褐色土
- 2 7.5YR3/2 黑褐色土
- 3 10YR3/3 喜欅色土
- 4 10YR4/2 黑褐色土
- 5 10YR3/1 黑褐色土
- 6 7.SYR1/3 黄褐色土

ブロック状の地山・土器片・炭化物が混入
地山を多く含み、土器片が混入する裏土
地山を2層より多く含み、土器片が混入
ST1の覆土
ST1の覆土、粘性が強い

にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
暗褐色砂質シルトを30%程度含む
黒褐色シルトを5%程度含む

SX428

- 1 2.SYR/4 にぶい黄色土
- 2 10YR3/2 喜欅色土
- 3 10YR3/1 黑褐色土
- 4 2.SYR3/1 喜欅色灰褐色土
- 5 10YR1/3 にぶい黄褐色土
- 6 7.SYR4/1 灰灰褐色シルト
- 7 7.SYR4/2 灰褐色土

盛土
土器片・炭化物が混入。ST1の覆土
地山の灰黄褐色土の粒が混じり、土器
片・炭化物が混入
3層より多く地山の灰黄褐色土の粒が
混じり、土器片・炭化物が混入
土器片・炭化物が混入し、微量の灰褐
色土を含む
微量の黄褐色土が混入

SX425

- 1 7.SYR3/1 黑褐色シルト
- 2 7.5YR3/1 黑褐色シルト
- 3 10YR1/4 喜欅色シルト

にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
暗褐色砂質シルトを30%程度含む
黒褐色シルトを5%程度含む

SX6

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
- 2 7.5YR3/1 黑褐色シルト
- 3 10YR1/2 灰黄褐色砂質シルト

にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
にぶい黄褐色砂質シルトを20%程度含む

SX2

- 1 7.SYR3/1 黑褐色シルト
- 2 7.5YR3/1 黑褐色シルト
- 3 10YR1/3 にぶい黄褐色砂質シルト

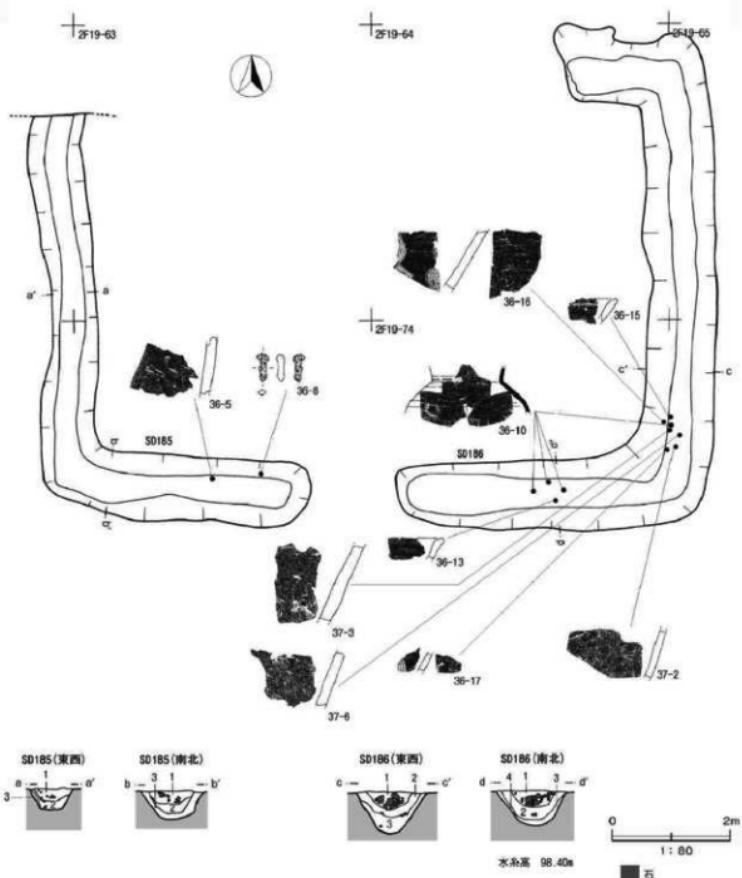
にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状
に20%~30%程度含む
にぶい黄褐色砂質シルト・均質で、若干の黒褐色シルト・
さびを織状に含む

SX3

- 1 2.5YR3/4 にぶい橙色土
- 2 10YR3/2 黑褐色土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土
- 4 7.5YR3/1 黑褐色土
- 5 10YR1/3 にぶい黄褐色土
- 6 7.5YR3/2 黑褐色土
- 7 7.5YR3/1 黑褐色土

小石が混じる盛土
土器片・炭化物が混入する表土
粘性が強い
ブロック状の地山・土器片・炭化物が混入
地山に黒褐色土がブロック状に混入
砂を多量含む
土器片・炭化物が混入

第18図 D区の遺構(堅穴住居跡ほか) ST1・SK6ほか

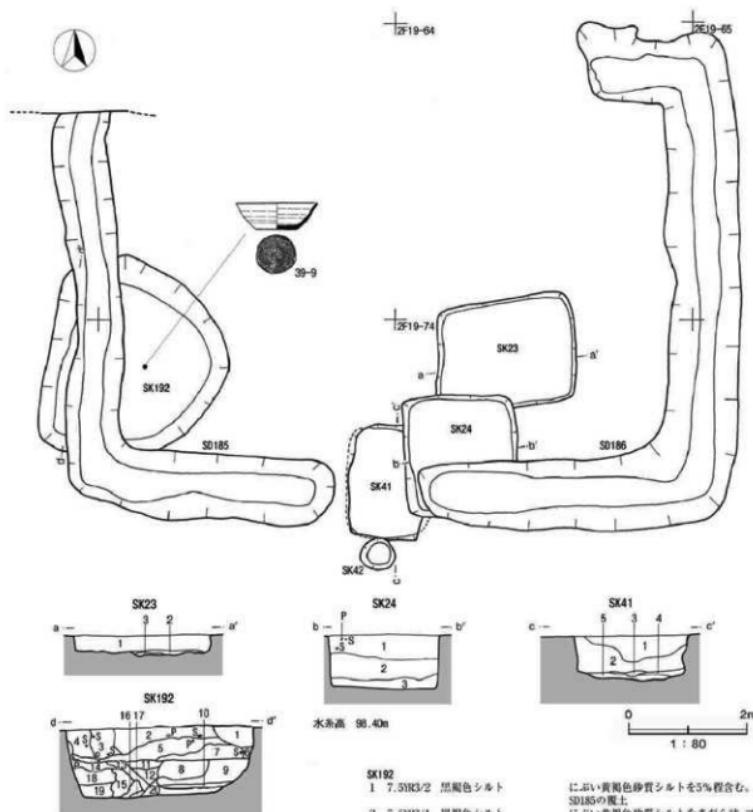
**SD185**

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト 粘を含む
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
- 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトをまだらに10%程含む

SD186

- 1 7.5YR3/1 黑褐色シルト 粘を含む
- 2 10YR3/1 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
- 3 10YR3/1 黑褐色シルト 砂色砂質シルトを10%程含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト

第19図 D区の遺構(溝跡) SD185・186

**SK23**

- 1 10B3/2 黒褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに30%程含む
2 10B5/3 にぶい 黃褐色シルト 黄褐色砂質シルトを40%程含む
3 7.5H3/2 黒褐色砂質シルト

黄褐色砂質シルトをまだらに30%程含む
黄褐色シルトを5%程含む
黒褐色シルトを塊状含む

SK192

- 4 10B4/1 にぶい 黄褐色砂質シルト
5 7.5H3/2 黒褐色シルト
6 10B3/2 黒褐色シルト
7 10B3/1 黒褐色シルト
8 10B4/2 深黄褐色砂質シルト
9 砂利、礫の層
10 砂の層

にぶい 黄褐色砂質シルトを5%程含む。
SD15の覆土
にぶい 黄褐色砂質シルトをまだら状、ブロック状に10%程含む
にぶい 黄褐色砂質シルトをまだら状、ブロック状に20%程含む
黒褐色シルトをまだら状に30%程含む
にぶい 黄褐色砂質シルトを10%程含む
砂利、礫を30%程含む
にぶい 黄褐色砂質シルトを微量含む
砂利、礫を10%程含む
大きめの礫も含む

SK24

- 1 10B3/2 黒褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに30%程含む
2 10B5/3 にぶい 黄褐色砂質シルト 黄褐色シルトを5%程含む
3 10B4/3 にぶい 黄褐色砂質シルト 黑褐色シルトを塊状含む

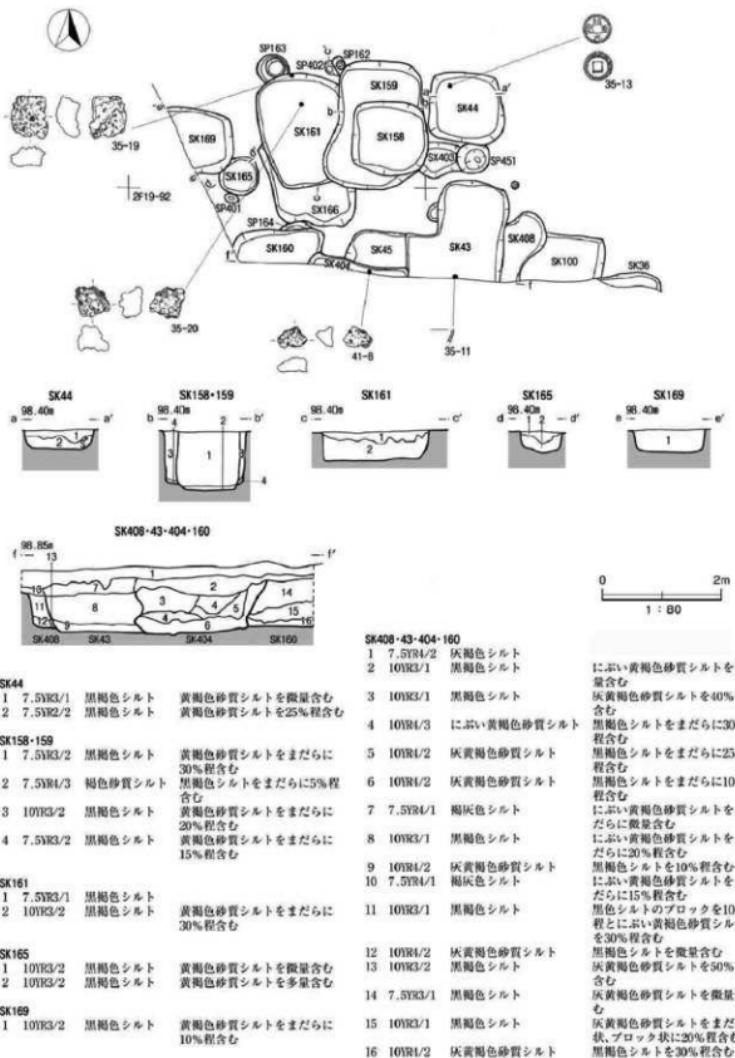
にぶい 黄褐色砂質シルトをまだら状に10%程含む
黒褐色シルトをまだらに30%程含む
サビを多く含む、黒褐色シルトのブロックを5%程含む

SK41

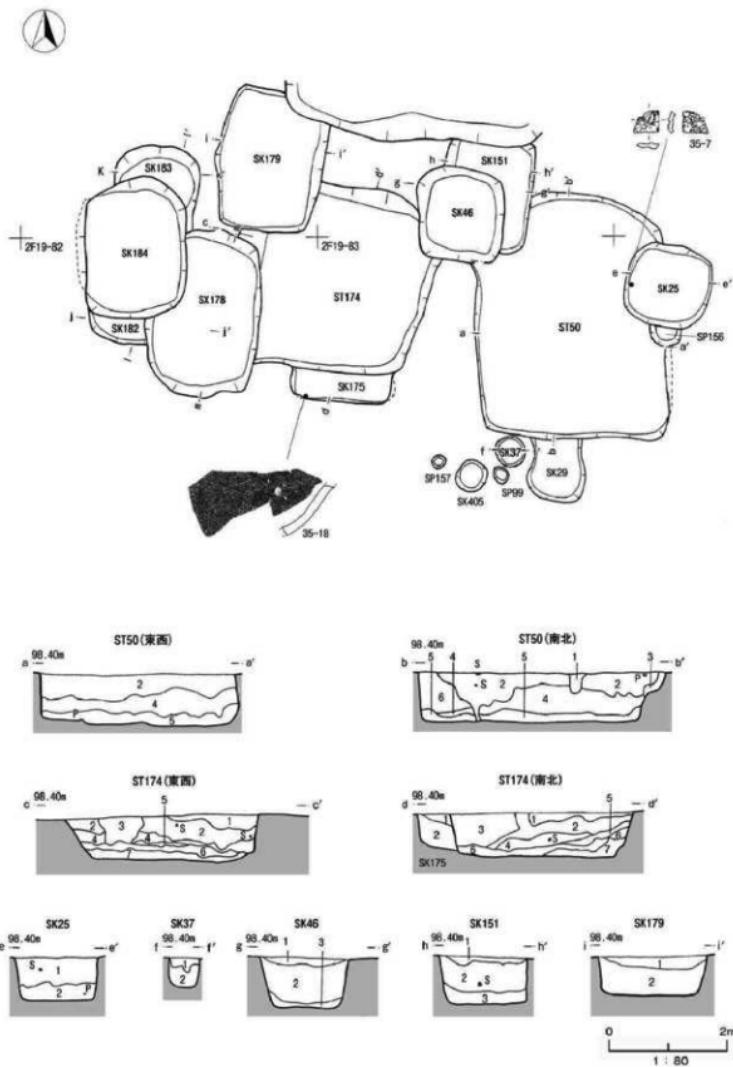
- 1 10B3/2 黒褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに30%程含む
2 10B3/2 黒褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに40%程含む
3 7.5H2/1 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトをブロック状に20%程含む
4 7.5H3/1 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに10%程含む
5 7.5H4/2 黑褐色砂質シルト 黑褐色シルトを10%程含む

にぶい 黄褐色砂質シルトを20%程含む
灰白色の粘土質の部分を40%程含む
灰白色的粘土質の部分を20%程含む
粘土質に近い
粘土質シルトを30%程含む

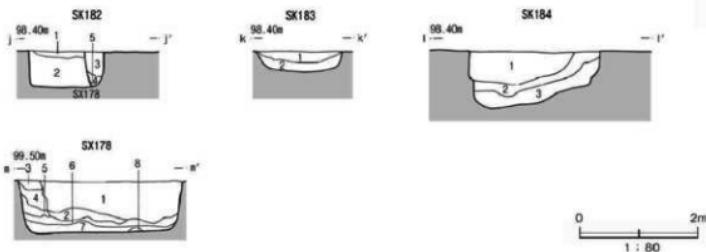
第20図 D区の遺構(土坑) SK23・192ほか



第21図 D区の遺構(土坑ほか) SK44・159ほか

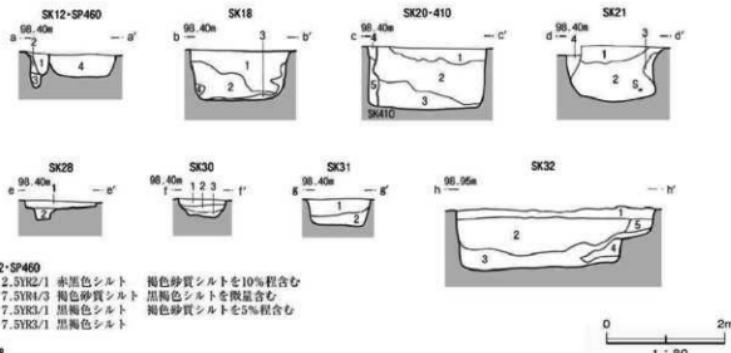
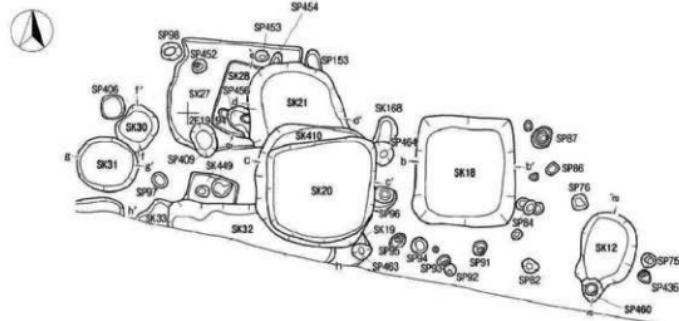


第22図 D区の遺構(堅穴建物跡ほか) ST50・174ほか



- ST50**
- 1 7.5YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを
微量含む
 - 2 10YR3/1 黒褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを
まだらに15%程含む
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 黒褐色シルトを20%程含む
 - 4 7.5YR2/1 黒色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを
ブロック状に40%程含む
 - 5 7.5YR3/1 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを
まだらに40%程含む
 - 6 10YR3/1 黑褐色シルト にぶい黄褐色シルトをまだ
らに50%程含む
- ST174**
- 1 10YR2/2 黑褐色シルト 細粒砂質シルトを10%、黒色シルトを微量含む
 - 2 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト にぶい黄褐色砂質シルトを40%程含む
 - 3 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 細粒砂質シルトを20%含む
 - 4 10YR2/1 黑色シルト 細粒シルトを10~20%、黒色シルトを微量含む
 - 5 10W1.7/1 黑色シルト 細粒シルトを微量含む
 - 6 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 黑褐色シルトを40%程含む
 - 7 10YR2/1 黑色シルト にぶい黄褐色シルトブロックを20%程含む
- SK25**
- 1 7.5YR3/1 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトを微量含む
 - 2 7.5YR3/1 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに50%程含む
- SK37**
- 1 7.5YR2/1 黑褐色シルト 細粒砂質シルトを5%程含む
 - 2 7.5YR4/3 黑色砂質シルト
- SK46**
- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに含む
 - 2 10YR3/2 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトをブロック状に含む
 - 3 7.5YR3/2 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに含む
- SK151**
- 1 10YR3/2 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトをまだ
らに5%程含む
 - 2 10YR3/2 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトをまだ
らに50%程含む
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 黑褐色シルトを10%程含む
- SK179**
- 1 7.5YR4/2 灰褐色土
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色土 直径1cm以下のブロックを30%含む
- SK182**
- 1 7.5Y4/1 灰色土
 - 2 2.5Y4/1 灰灰色土
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 黑褐色シルトをブロック状に30%程含む
 - 4 2.5Y4/1 暗赤灰色シルト 黄褐色砂質シルトを10%程含む
 - 5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
- SK183**
- 1 2.5Y4/1 黄灰色土
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色土
- SK184**
- 1 2.5Y4/1 黄灰色土 直径3cm以下のブロックを30%程含む
 - 2 2.5Y4/1 黄灰色土
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色土
- SX178**
- 1 10YR3/3 灰褐色砂質シルト 黑褐色シルトをまだらに5%程含む
 - 2 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト 黑色シルトを20%、黒褐色シルトを10%含む
 - 3 10YR3/2 黑褐色シルト 黄褐色砂質シルトをまだらに10%程含む
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト 黑褐色シルトをブロック状に30%程含む
 - 5 2.5Y3/1 暗赤灰色シルト 黄褐色砂質シルトを10%程含む
 - 6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
 - 7 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
 - 8 5YR3/1 黑褐色シルト

第23図 D区の遺構(堅穴建物跡ほか) SK182・183ほか

**SK12-SP460**

- 1 2.SYR2/1 赤褐色シルト 棕色砂質シルトを10%程度含む
- 2 7.SYR3/1 棕色砂質シルト 黒褐色シルトを微量含む
- 3 7.SYR3/1 黑褐色シルト 棕色砂質シルトを5%程度含む
- 4 7.SYR3/1 黑褐色シルト

SK18

- 1 10TR3/1 黑褐色シルト 灰黄褐色砂質シルトを微量含む
- 2 10TR3/1 黑褐色シルト 大粒の灰褐色砂質シルトを30%程度含む
- 3 10TR3/1 灰褐色シルト 黑褐色シルトを10%程度含む
- 4 10TR3/1 黑褐色シルト

SK20-410

- 1 7.SYR3/1 黑褐色シルト
- 2 7.SYR3/1 黑褐色シルト 灰黄褐色砂質シルトをまだらに30%程度含む
- 3 10TR4/2 灰黄褐色砂質シルト 黑褐色シルトを10%程度含む
- 4 7.SYR3/1 黑褐色シルト 灰褐色シルトをまだらに5%程度含む
- 5 10TR4/2 灰黄褐色砂質シルト

SK21

- 1 10TR3/2 黑褐色シルト 棕色砂質シルトをまだらに20%程度含む
- 2 10TR3/2 黑褐色シルト 棕色砂質シルトと混じる黒褐色シルトのブロックを20%程度含む
- 3 7.SYR4/3 棕色砂質シルト
- 4 7.SYR4/3 棕色砂質シルト 黑褐色シルトをブロック状に30%程度含む

SK28

- 1 7.SYR3/2 黑褐色シルト 混じる黒褐色シルトを30%程度含む
- 2 7.SYR3/1 黑褐色シルト 混じる褐色砂質シルトを5%程度含む

SK30

- 1 7.SYR3/2 黑褐色シルト 混じる黒褐色シルトをブロック状、まだら状に10%程度含む
- 2 10TR3/3 暗褐色砂質シルト 混じる黒褐色シルトをまだらに微量含む
- 3 10TR4/2 暗褐色砂質シルト

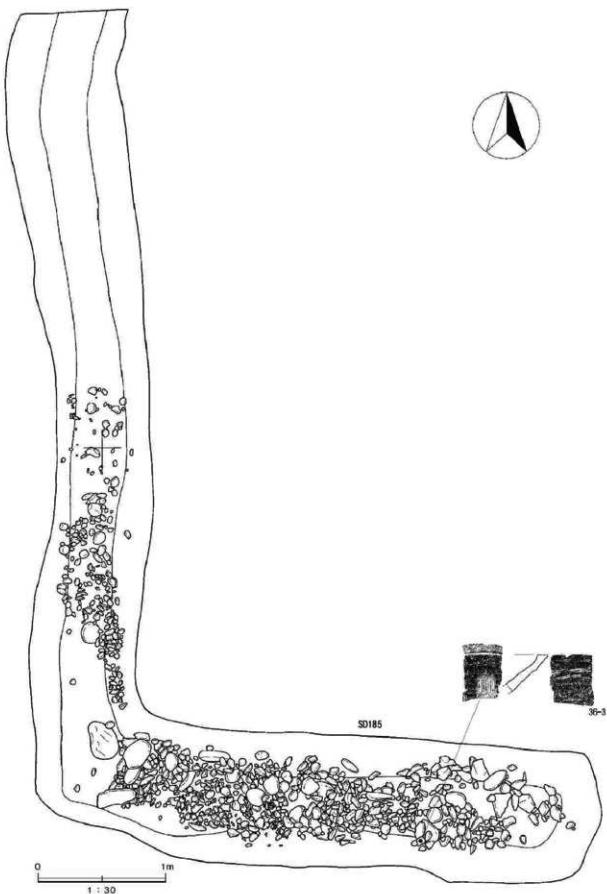
SK31

- 1 7.SYR3/1 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトをまだらに5%程度含む
- 2 7.SYR3/1 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトをブロック状に30%程度含む

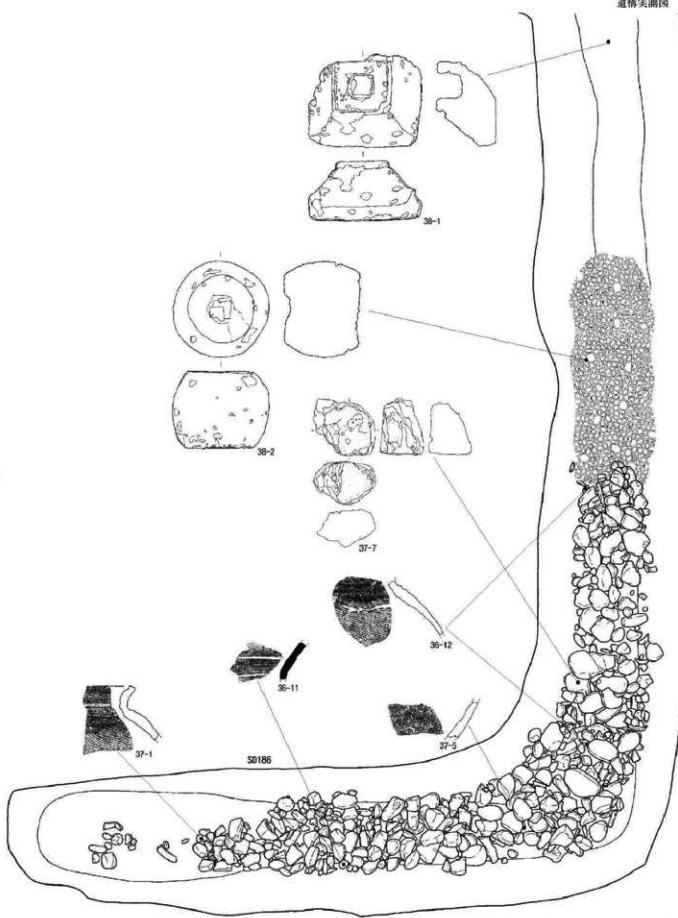
SK32

- 1 10TR3/2 黑褐色シルト にぶい黄褐色砂質シルトを微量含む
- 2 10TR3/1 黑褐色シルト 灰黄褐色砂質シルトをブロック状に20%程度含む
- 3 10TR3/1 黑褐色シルト
- 4 10TR4/2 灰黄褐色砂質シルト 黑褐色砂質シルトを微量含む
- 5 10TR3/1 黑褐色シルト 灰黄褐色砂質シルトをまだらに微量含む

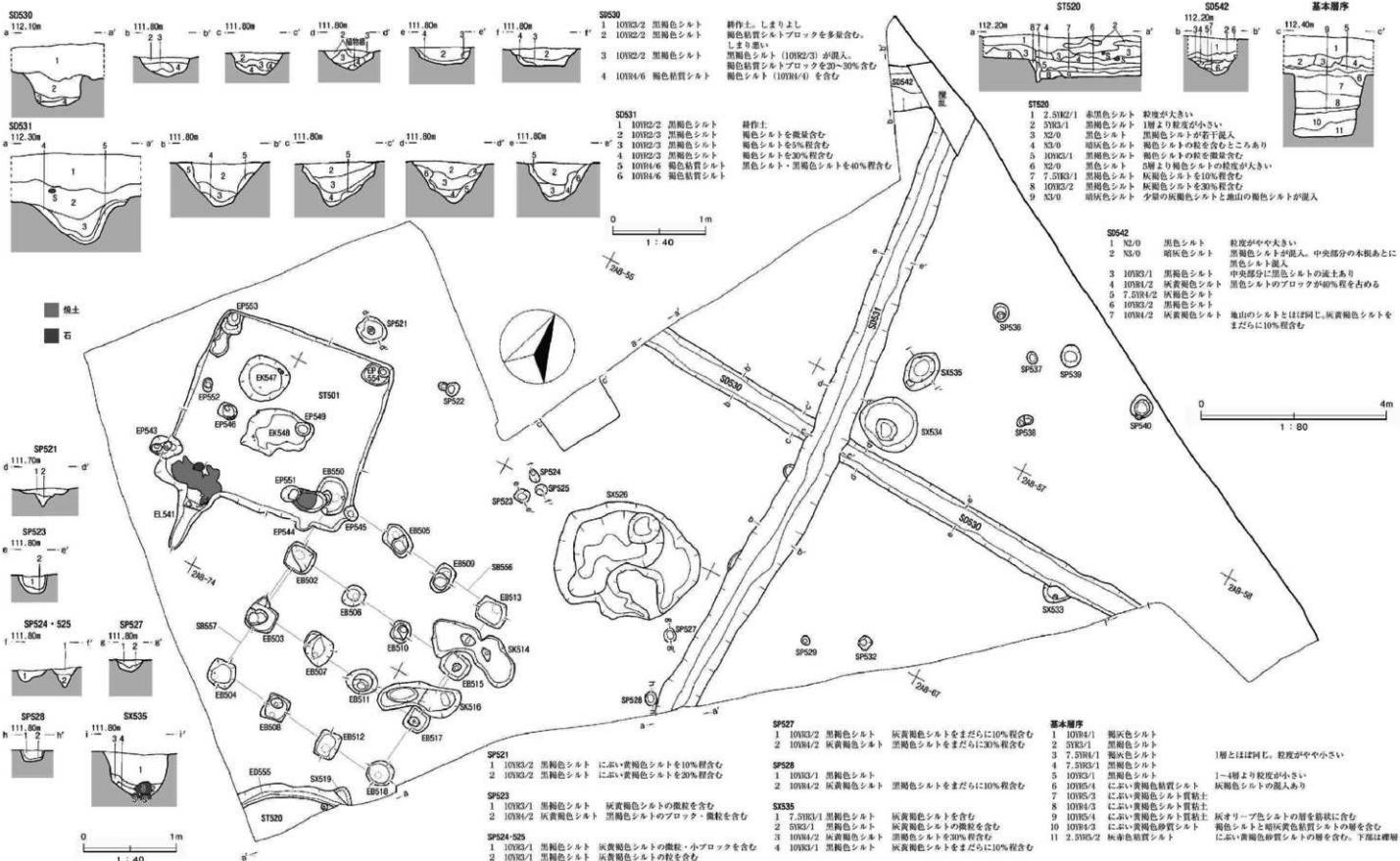
第24図 D区の遺構(土坑ほか) SK12・18ほか



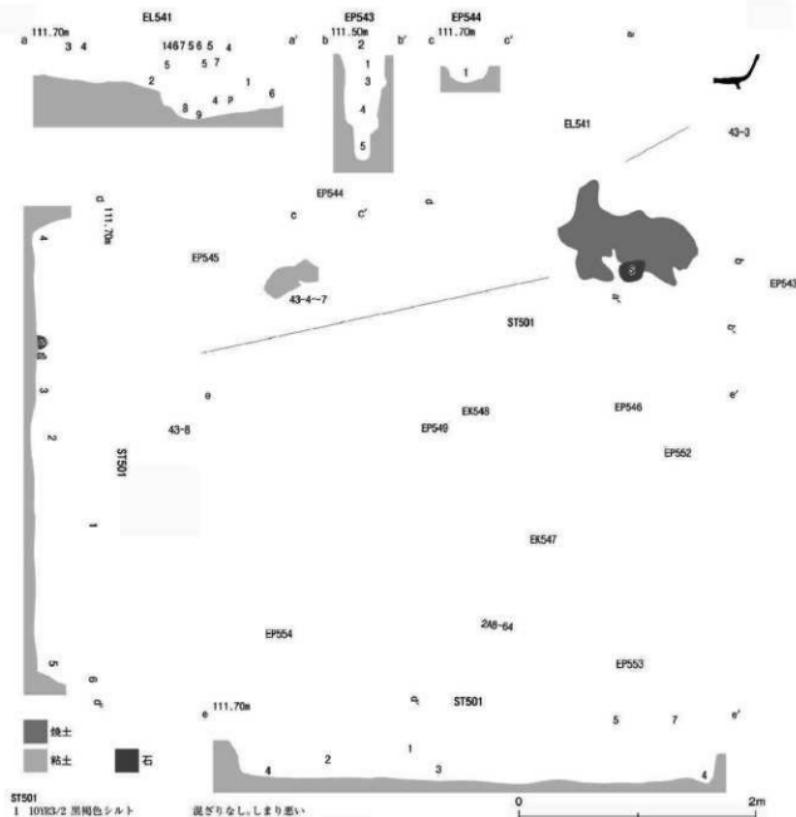
2F19-74



第25図 D区 SD185・186集石配置図

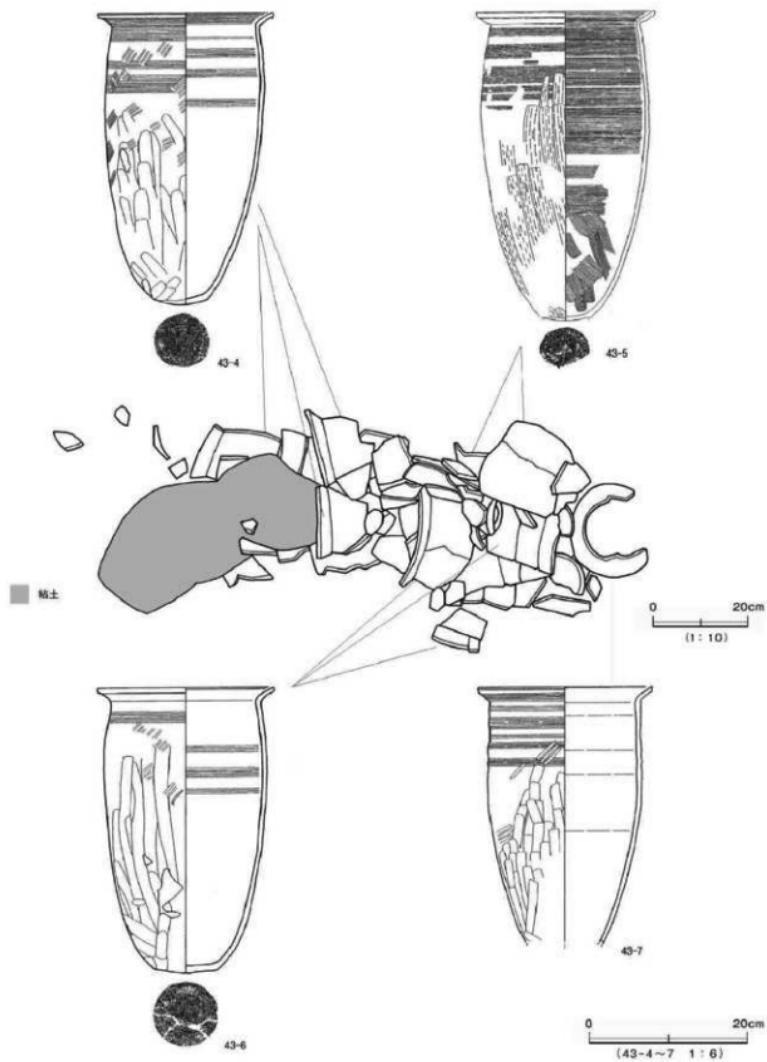


第26図 E区の遺構全体図

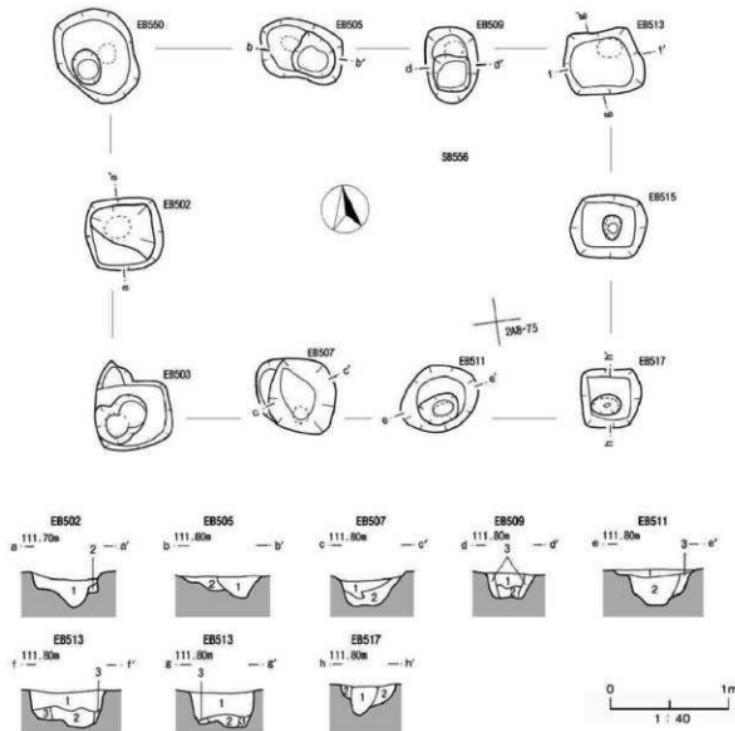


にふい黄褐色粘質シルトを5%以下含む
発土ブロック(直径1m~3m)を含み、
これは黒褐色粘質シルトを10%以上含む。炭化物を含む
発土ブロック(直径1m)・炭化物に云い黄褐色粘質シルトを含む。黒褐色シルトブロック約90%程度混入。
黒褐色シルトブロック約9%程度混入。炭化物はほとんど含まれない。黒褐色シルトを同様含む。焼土を含むが、炭化物はほとんど含まれない。混ざりは極めて少ない。植物の根か黒褐色シルトが混入。4塊との塊に焼土が混入するが、炭化物の混入なし。発土(直径5cm以下)を30%~40%含む。黒褐色シルトブロック(直徑5cm)が若干(5%以下)混入。
地山。焼土(直徑5cm以下)・炭化物がそれぞれ1%以下混入

第27図 E区ST501堅穴住居跡



第28図 E区ST501堅穴住居跡出土遺物



EB502
 1 5YR2/0 黒色シルト
 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト 地山とは同じ。黒褐色シルトをまだらに10%程含む

EB505
 1 5YR2/1 黒褐色シルト
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト 地山は黒褐色シルトを多量含む
 黑褐色シルトをまだらに20%程含む

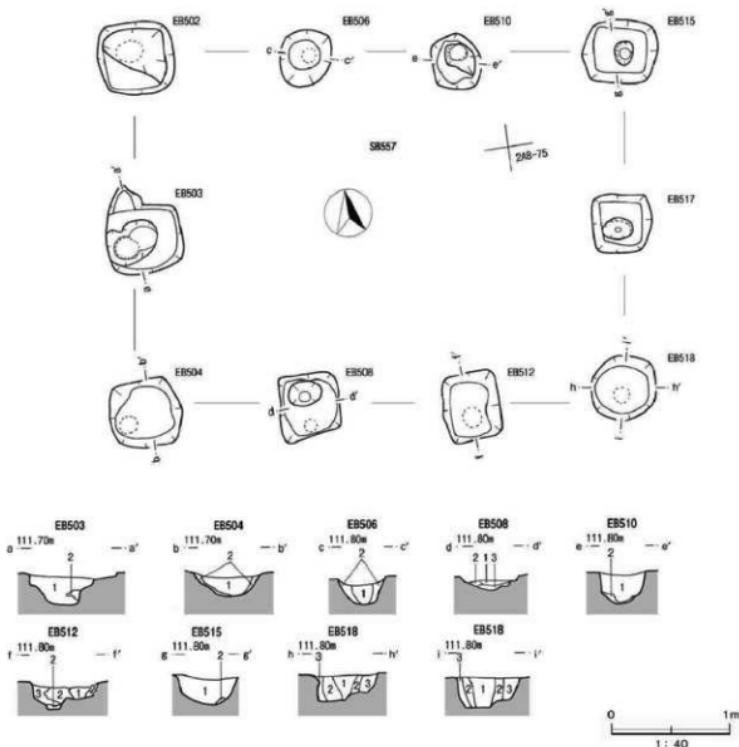
EB507
 1 7.5YR3/1 黒褐色シルト
 2 10YR2/1 黑褐色シルト
 3 7.5YR3/1 黑褐色シルト 地山は黒褐色シルトの粒を10%程含む
 黑褐色シルトをまだらに20%程含む

EB509
 1 10YR3/1 黒褐色シルト
 2 10YR3/1 黑褐色シルト
 3 10YR3/3 黑褐色シルト 地山は黒褐色シルトの微粒を含む
 黑褐色シルトの粒を多く含む
 黑褐色シルトの微粒を含む

EB511
 1 10YR3/1 黑褐色シルト
 2 10YR3/1 黑褐色シルト
 3 10YR3/1 黑褐色シルト 地山は黒褐色シルトを15%程含む
 黑褐色シルトの微粒を多く含む
 黑褐色シルトを5%程含む

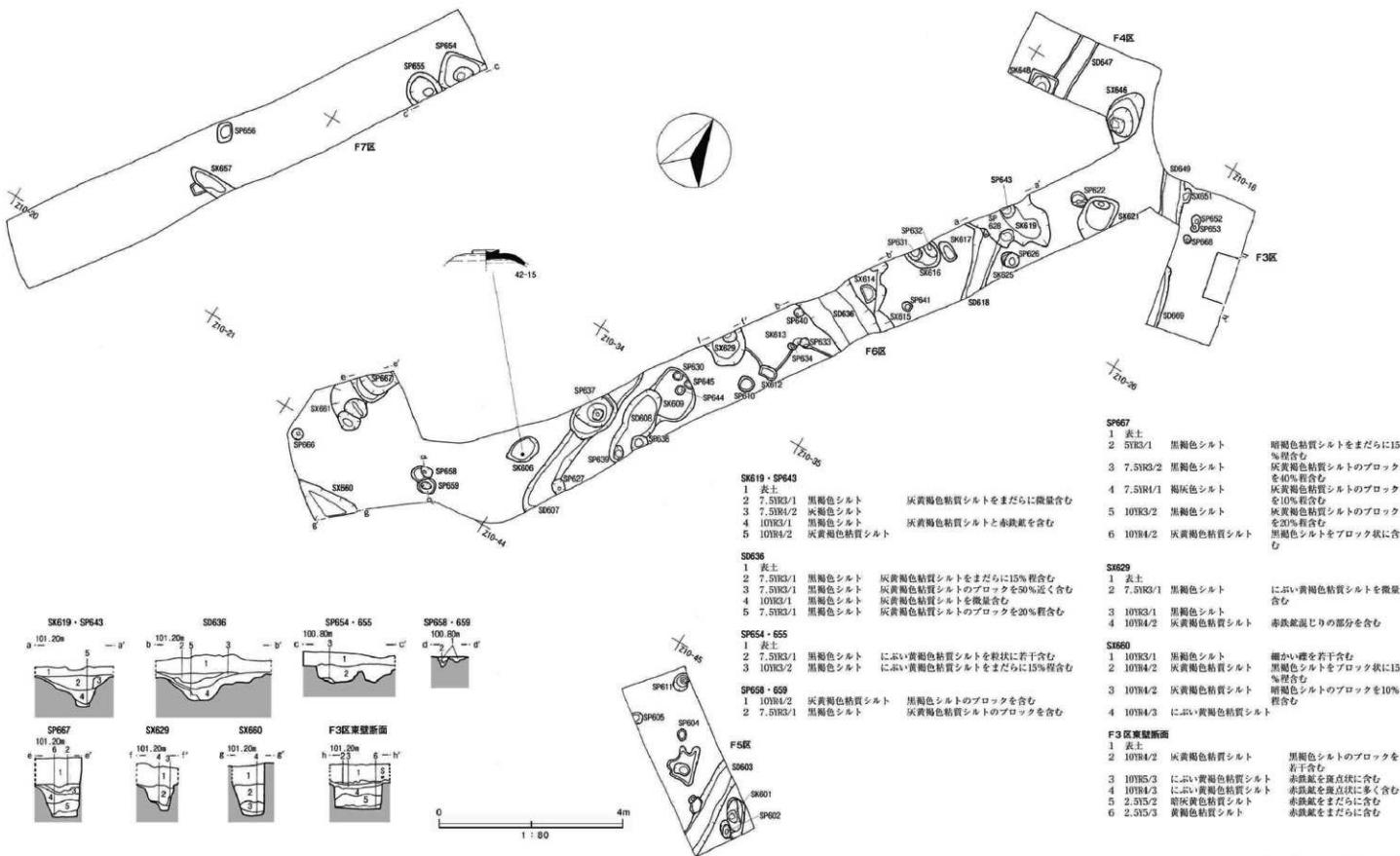
EB513
 1 10YR3/1 黑褐色シルト
 2 10YR2/1 黑褐色シルト
 3 10YR3/1 黑褐色シルト 地山は黒褐色シルトの微粒が多く混入
 黑褐色シルトの微粒を含む

第29図 E区SB556据立柱建物跡

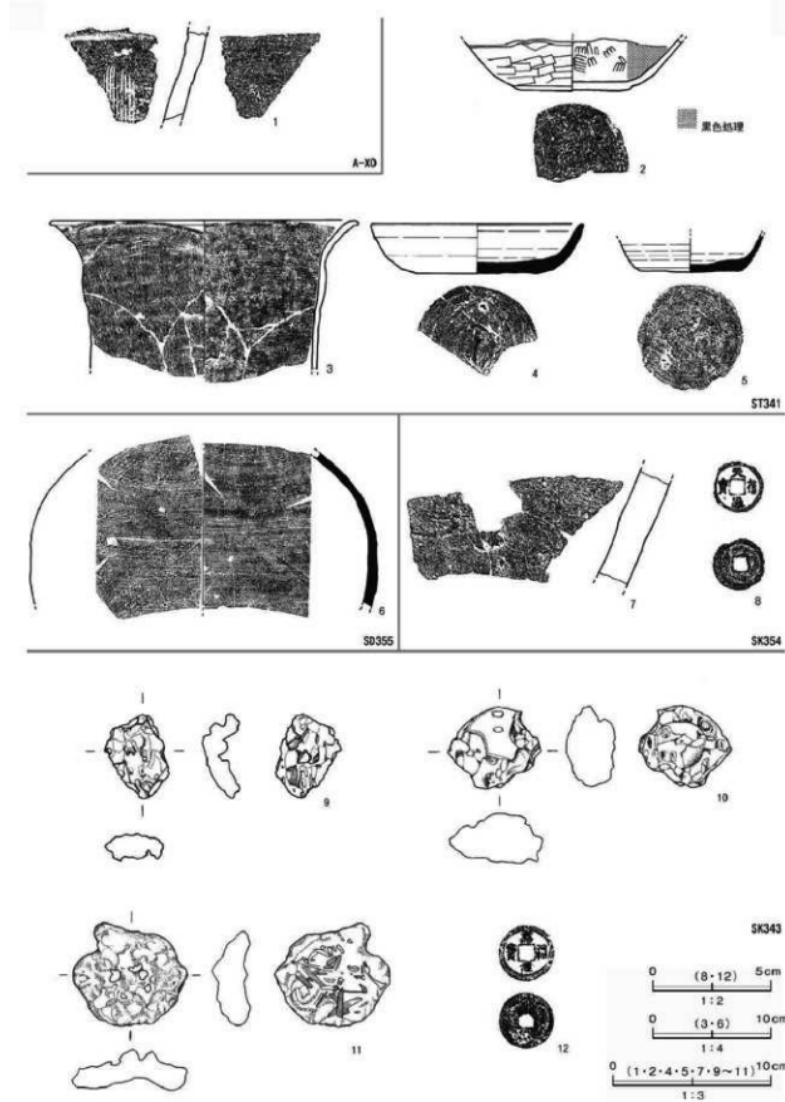


EB503	1 10W3/1 黒褐色シルト	にぶい黄褐色シルトの粒を多量含む	EB510	1 10H3/1 黒褐色シルト	暗褐色シルトの微粒を含む
2 10W4/2 灰黄褐色シルト	黒褐色シルトが10%程混入		2 10H3/3	暗褐色シルト	黒褐色シルトの微粒を含む
EB504	1 10W3/1 黒褐色シルト	にぶい黄褐色シルトの粒を含む	EB512	1 10H3/1 黒褐色シルト	にぶい黄褐色シルトが20%程混入
2 10W4/3 にぶい黄褐色シルト	黒褐色シルトがまだに混入		2 10H4/3	にぶい黄褐色シルト	黒褐色シルトを10%程含む
			3 7.5H3/2	黒褐色シルト	にぶい黄褐色シルトのブロックを含む
EB505	1 10W3/1 黒褐色シルト	灰黄褐色シルトの微粒を含む	EB515	1 10H2/1 黒色シルト	暗褐色シルトの微粒を含む
2 10W3/1 黑褐色シルト	灰黄褐色シルトを20%程含む		2 10H4/2	灰黄褐色シルト	暗褐色シルトを多く含む
EB506	1 10W3/1 黑褐色シルト	灰黄褐色シルトの微粒を含む	EB518	1 10H2/1 黑褐色シルト	暗褐色シルトの微粒を含む
2 10W4/2 灰黄褐色シルト	黑褐色シルトを20%程含む		2 10H2/1	黑褐色シルト	暗褐色シルトの粒を含む
3 10H3/2 黑褐色シルト	黑褐色シルトを10%程含む		3 10H3/1	黑褐色シルト	暗褐色シルトのブロックを含む

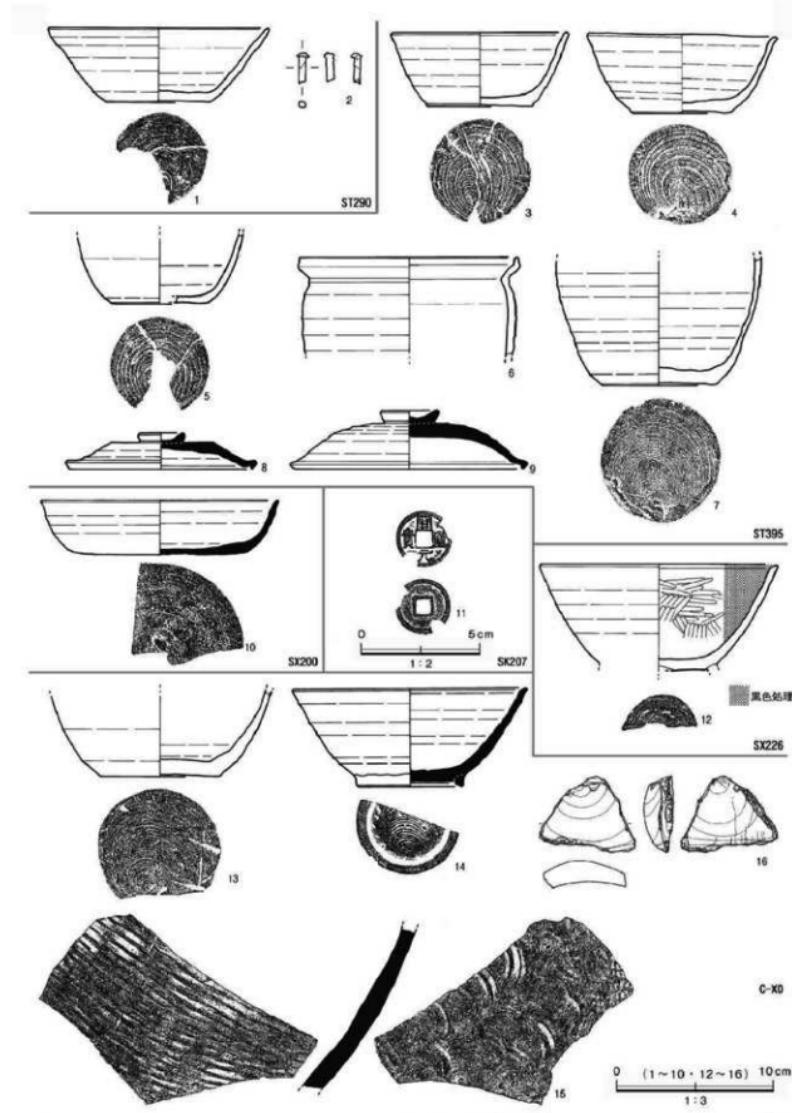
第30図 E区SB557据立柱建物跡



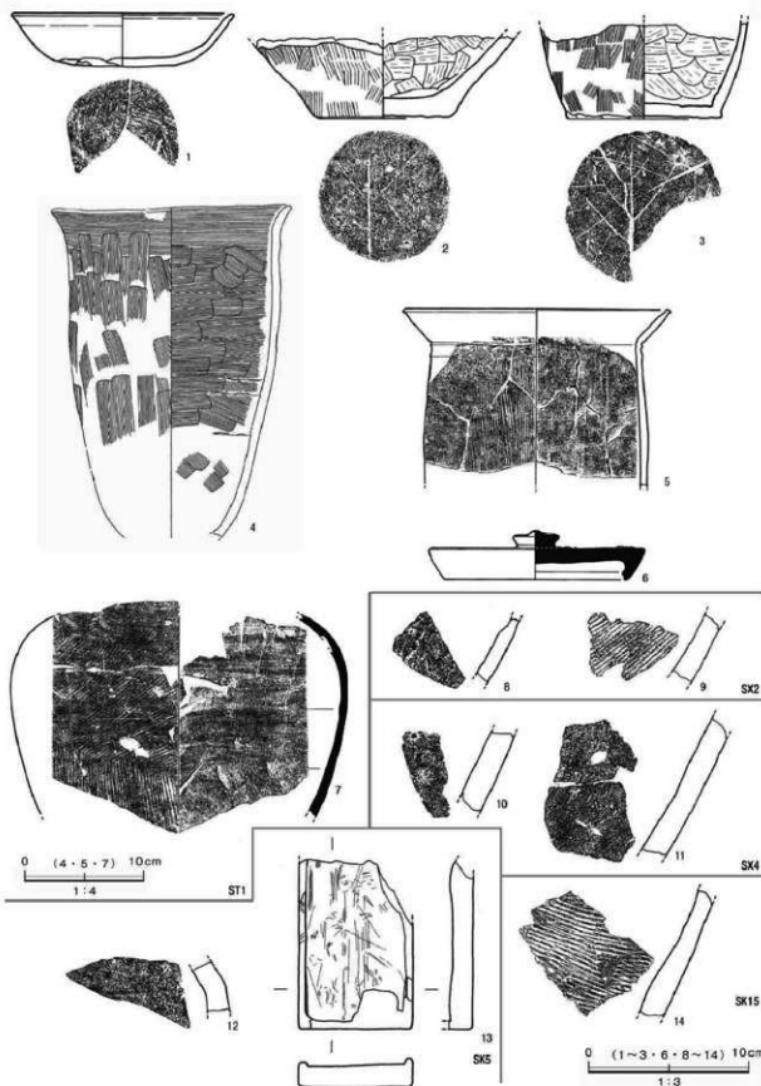
第31図 F区の遺構全体図



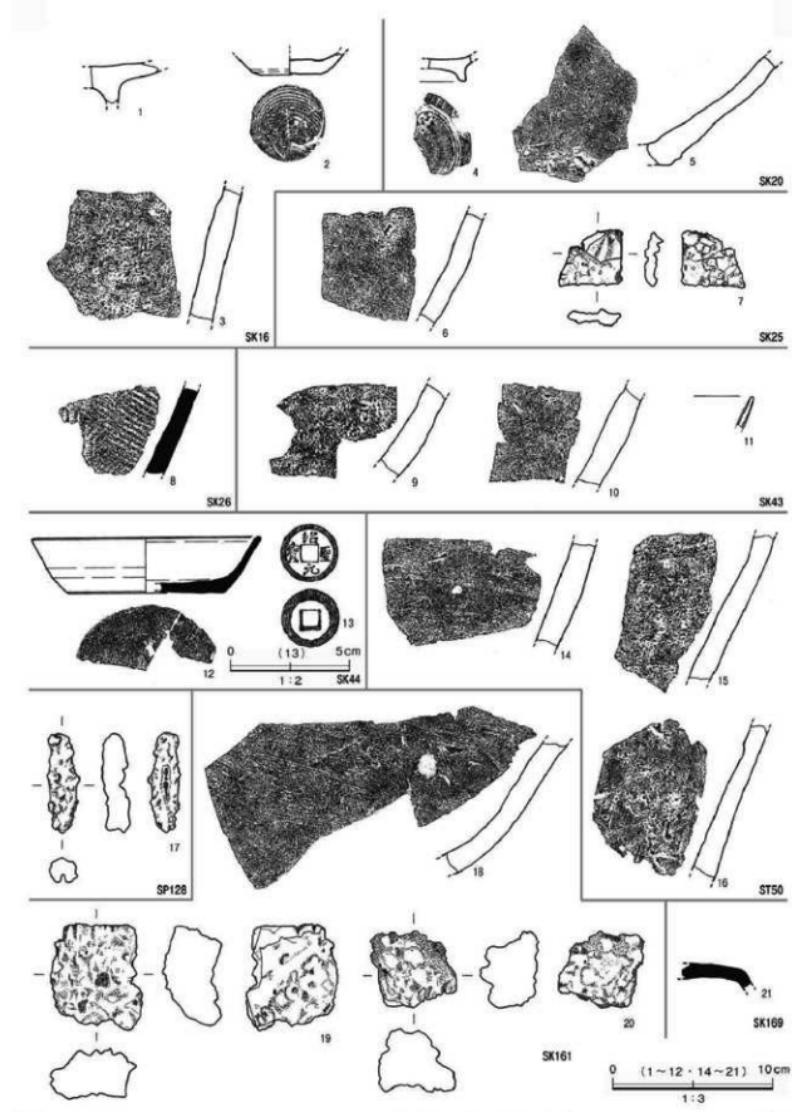
第32图 A·B区出土遗物 ST341、SK343·354、SD355



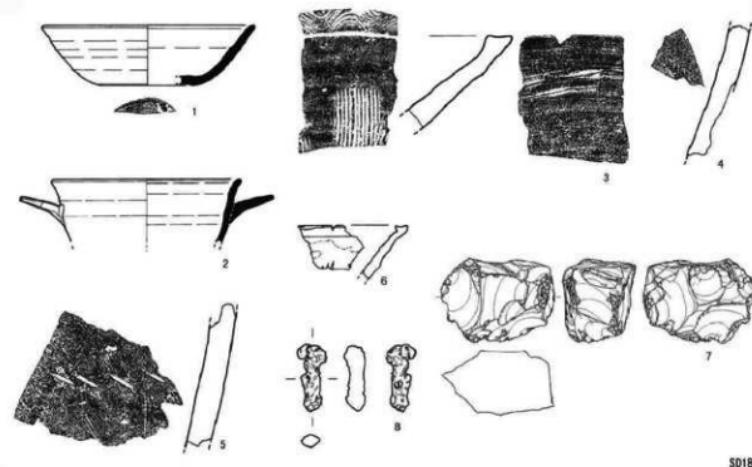
第33図 C区出土遺物 ST290・395、SK207、SX200ほか



第34図 D区出土遺物(1) ST1、SK5・15、SX2・4



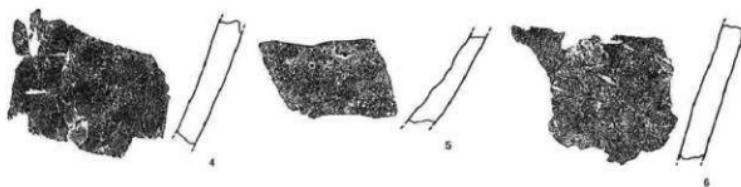
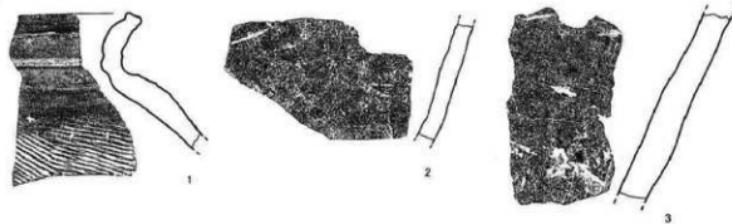
第35図 D区出土遺物(2) ST50、SK16・20・25・26ほか



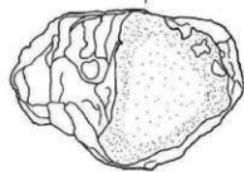
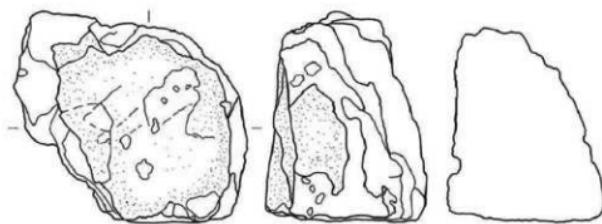
SD185

SD186

第36図 D区出土遺物(3) SD185・186-1



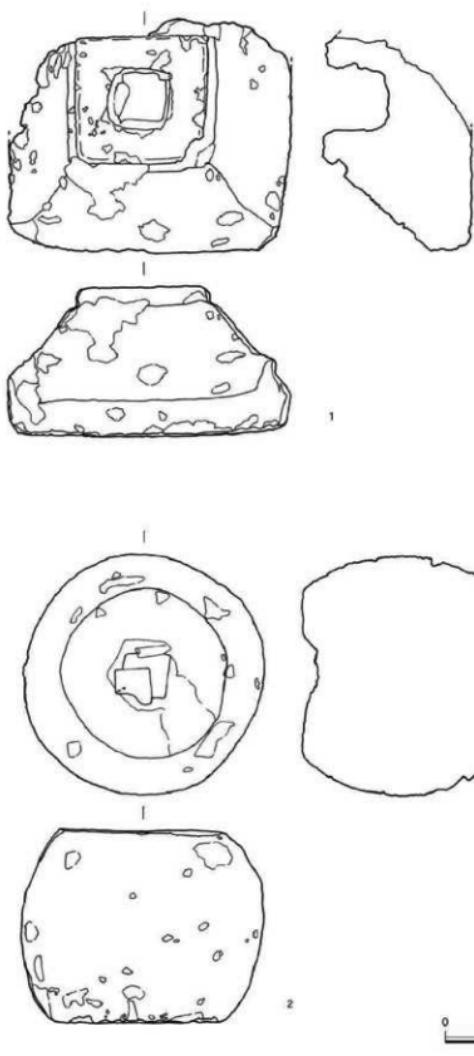
0 (1~6) 10cm
1:3



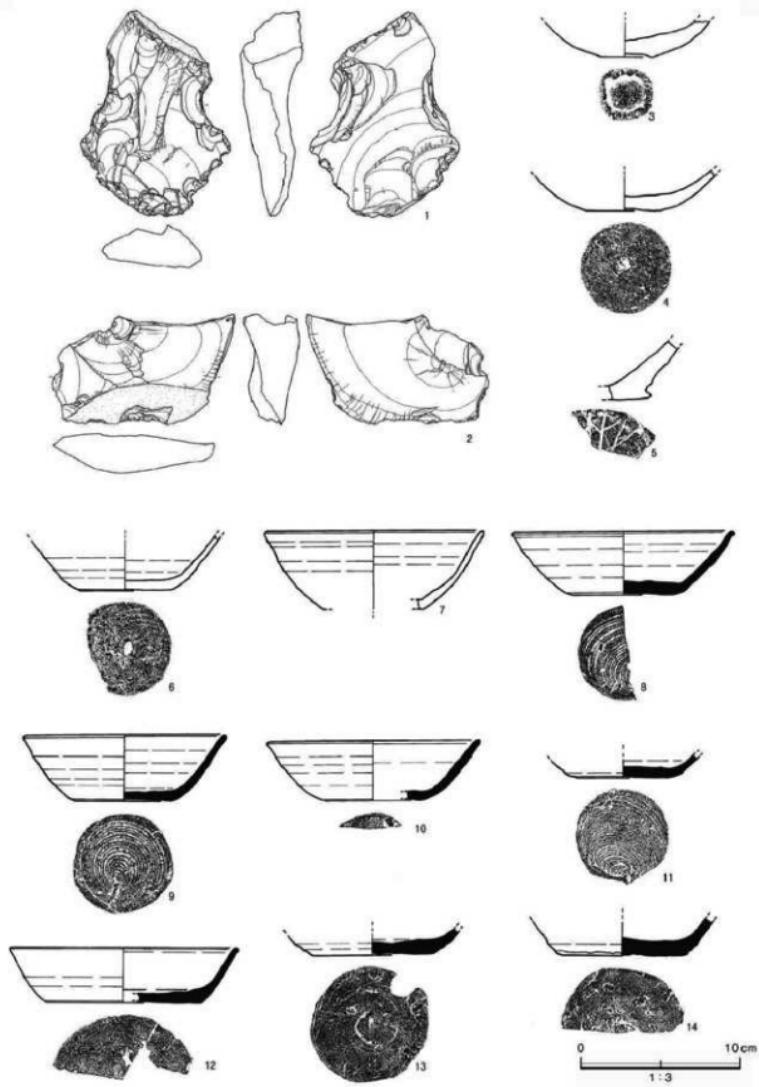
7

0 (7) 10cm
1:4

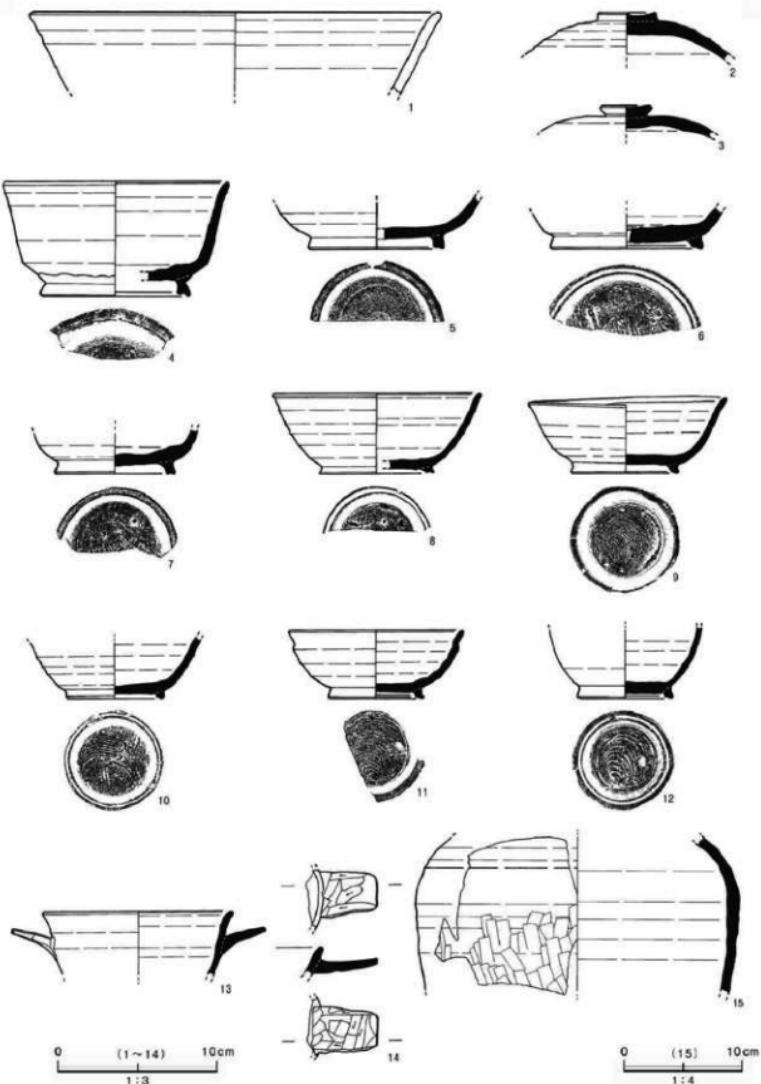
第37図 D区出土遺物(4) SD186-2



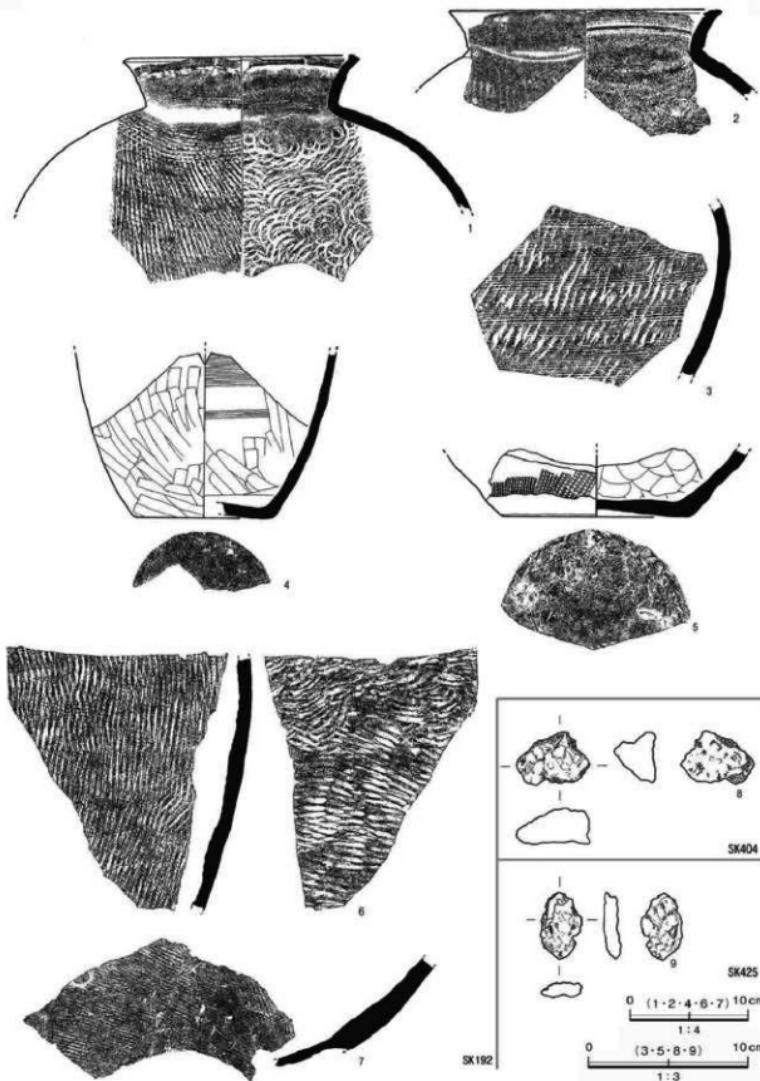
第38図 D区出土遺物(5) SD186-3



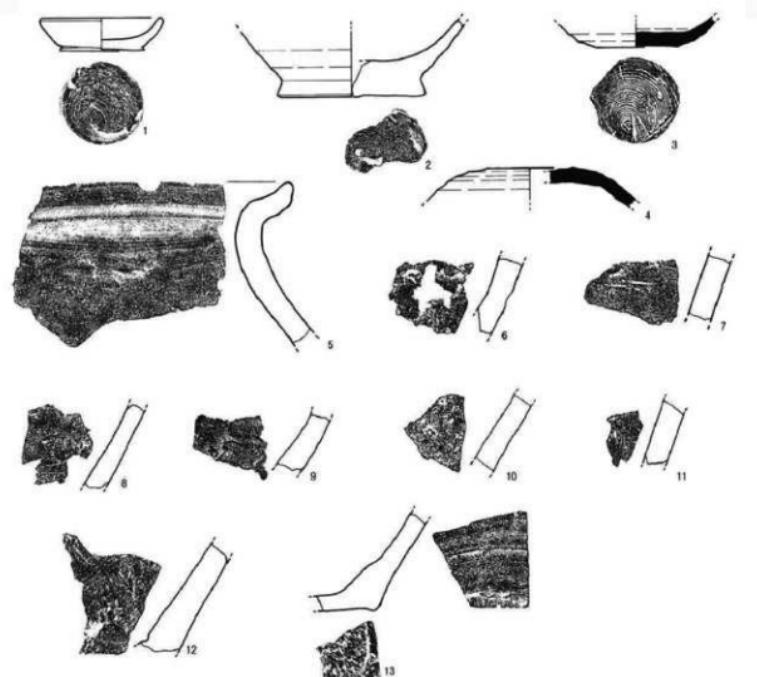
第39図 D区出土遺物(6) SK192-1



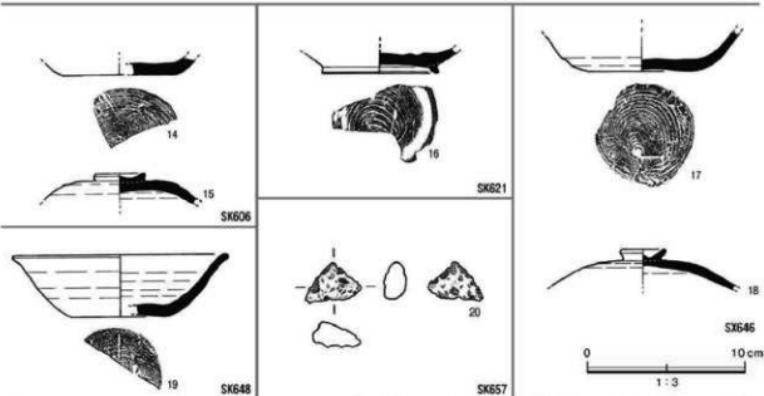
第40図 D区出土遺物(7) SK192-2



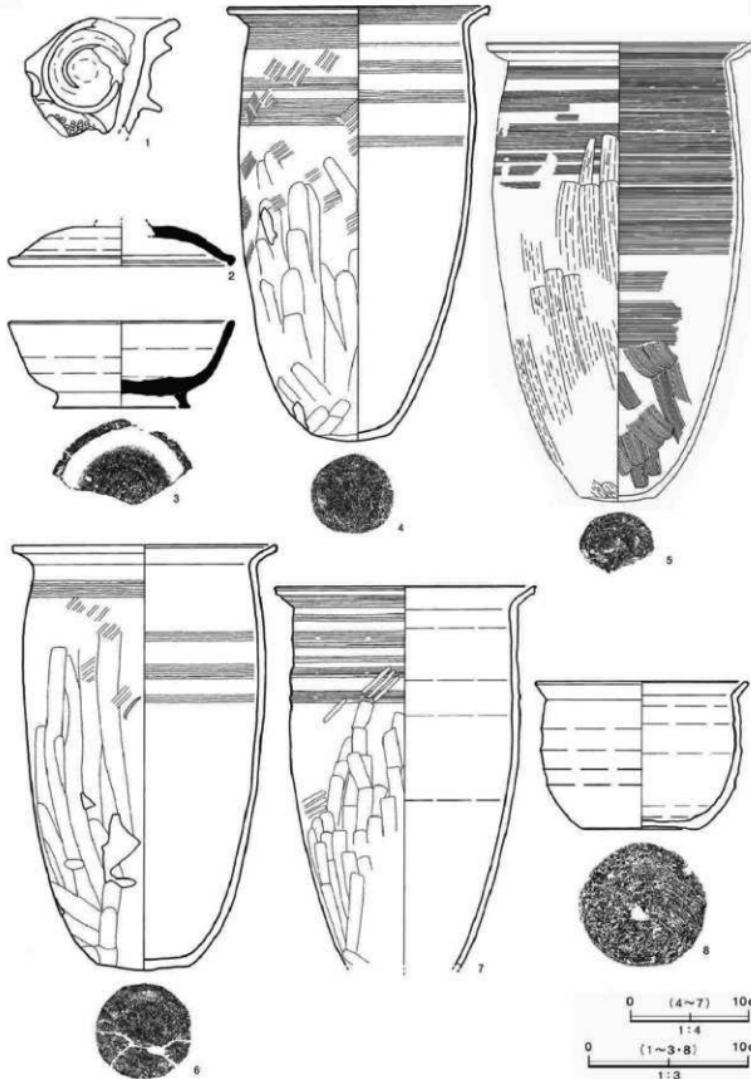
第41図 D区出土遺物(8) SK192-3・404・425



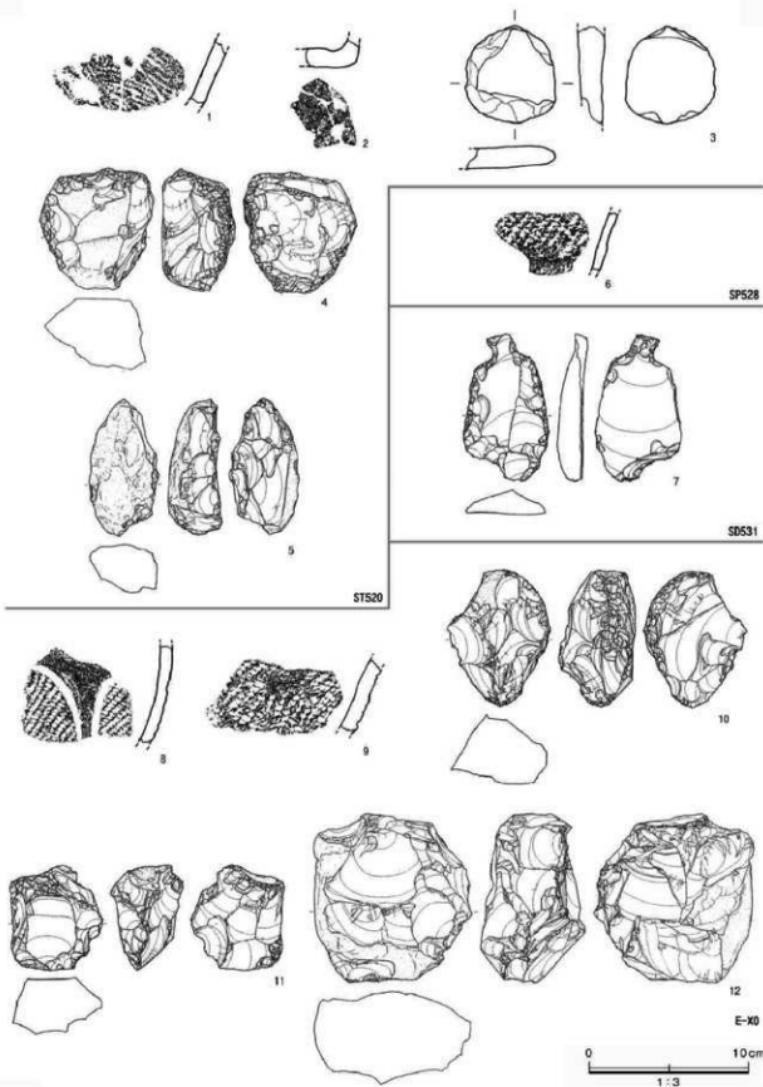
D-X0



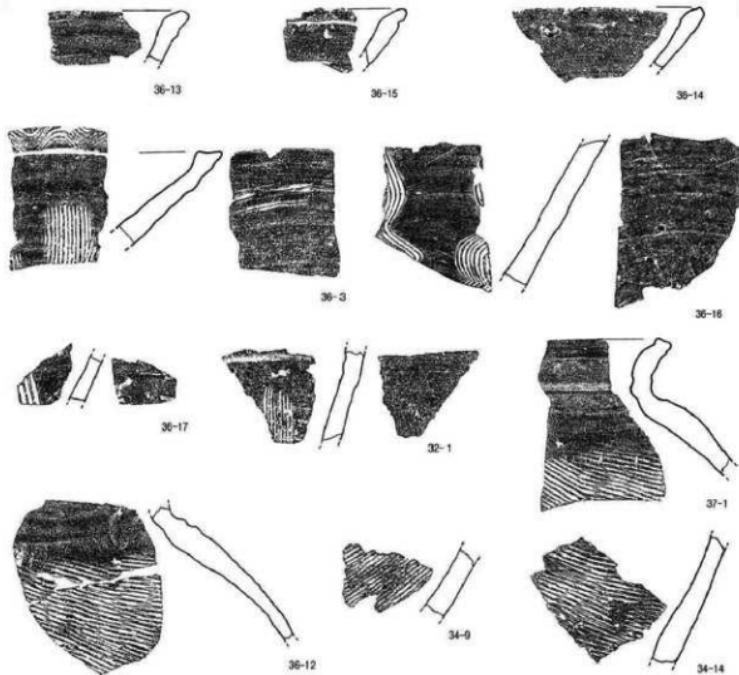
第42図 D区出土遺物(9) 遺構外、F区出土遺物 SK606ほか



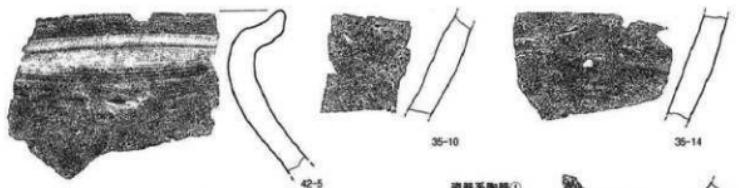
第43図 E区出土遺物(1) ST501



第44图 E区出土遗物(2) ST520、SP528、SD531、遗块



鼎虎器系陶器



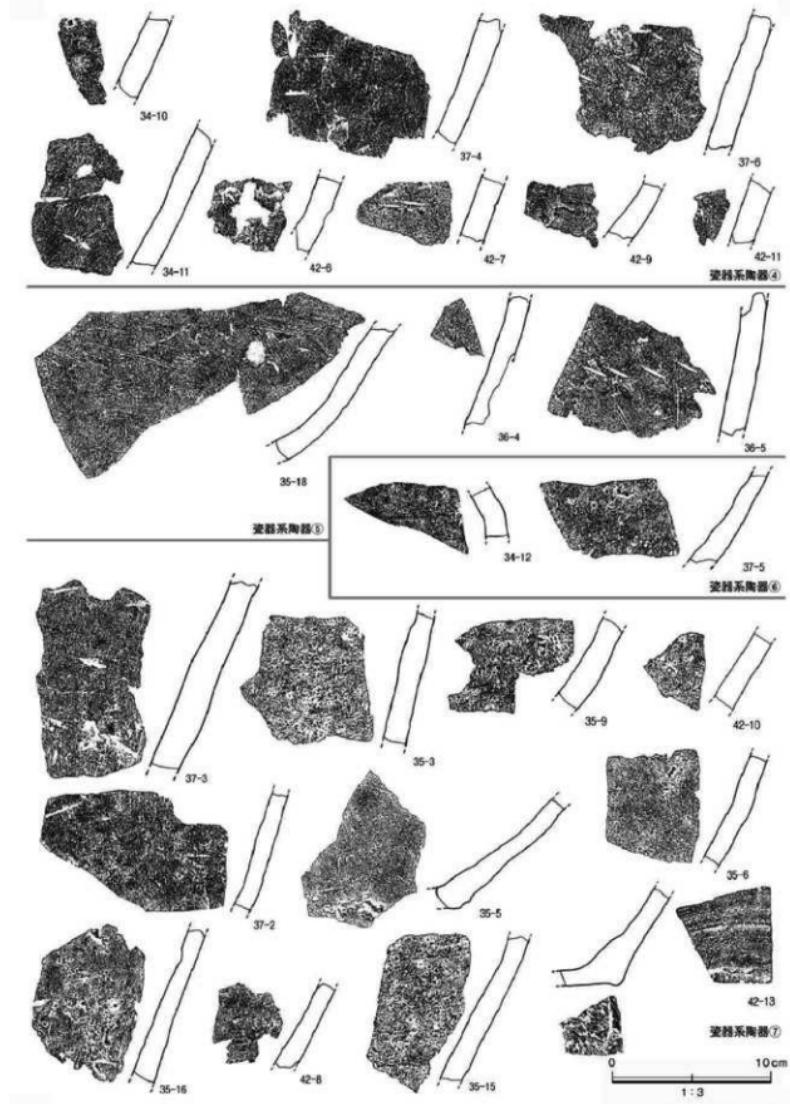
鼎虎器系陶器①



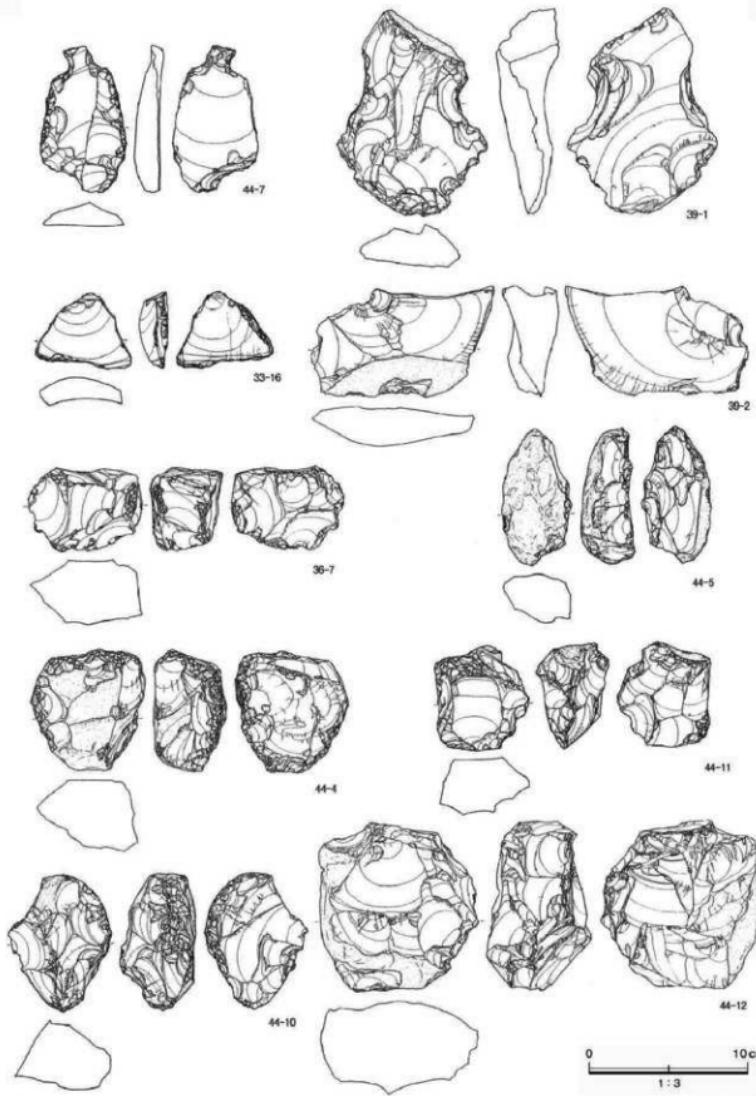
鼎虎器系陶器③

0
1:3
10 cm

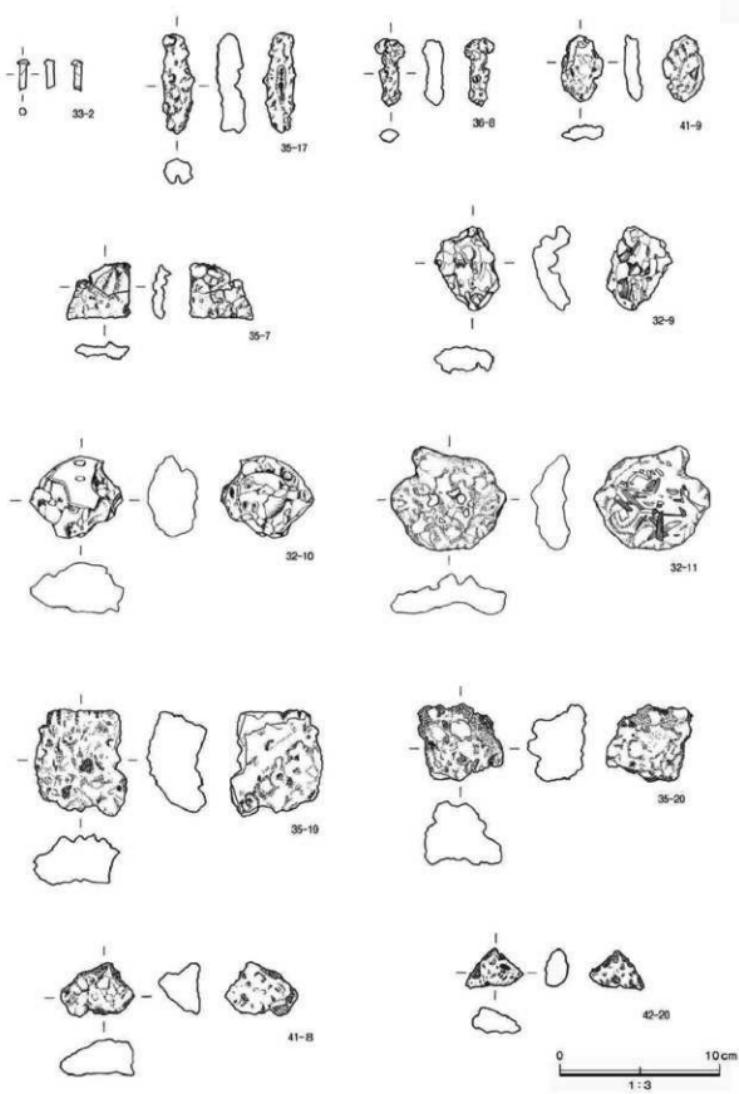
第45図 中世陶器集成図(1)



第46図 中世陶器集成図(2)



第47図 石器集成図



第48図 金属遺物集成図

表2 遺物観察表

種類 番号	地区・遺構名	種別	器種	登録番号	計測値(mm)				調査等			出土	備考
					口径 最大長	底径 最大幅	器高	器厚	外側	内面	底部		
32 1 A XO	須恵器系陶器	縦縫	—	—	—	—	—	12	ロクロナデ	ロクロナデ 溝なし10mm以上	—	海	朱調？ 色調2.5Y4/1灰灰
32 2 B ST341	土師器	环	—	—	(76)	(32)	4	ケズリ	ミガキ 黒色施釉	ヘラ切り・黒面	—	—	—
32 3 B ST341	土師器	甕	RP9	(262)	—	(125)	4~6	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	—	—	ST341内EK300出土	—
32 4 B ST341	須恵器	环	RP8	(134)	(78)	32	3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	—	ST341内EK300出土	—
32 5 B ST341	須恵器	环	RP10	—	64	(22)	2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	—	—	—
32 6 B SD355	須恵器	甕?	RP18-19	—	—	—	5~8	ナデ・ケズリ カキメ・タタキ	ナデ・ナデ カキメ	—	—	周	—
32 7 B SK354	壺器系陶器	甕	—	—	—	—	21	ナデ	ナデ・アナ?	—	—	—	色調3Y4/1灰
32 8 B SK354	金銅製品	古鏡	RM4	22	—	—	135	—	—	—	—	—	天保通寶 1.4g 初鋸年1017年
32 9 B SK343	鉄津	—	RM13	53	37	—	18	—	—	—	—	—	37.8g
32 10 B SK343	鉄津	—	RM14	51	59	—	31	—	—	—	—	—	113.1g
32 11 B SK343	鉄津	—	RM15	66	72	—	29	—	—	—	—	—	116.6g
32 12 B SK343	金属製品	古鏡	RM12	23	—	—	135	—	—	—	—	—	臺裕元寶 2.5g 初鋸年1056年
33 1 C ST290	土師器	环	—	(140)	(68)	47	4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り	赤	赤部露星	—
33 2 C ST290	金銅製品	釘?	—	19	7	—	6	—	—	—	—	—	本片付着 0.5g
33 3 C ST305	土師器	环	RP30-31	(112)	68	47	4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り	赤	—	—
33 4 C ST395	土師器	环	RP31	120	64	51	5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り	海・赤	—	—
33 5 C ST395	土師器	环	RP31	—	(62)	(42)	4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り 黒面	赤	—	—
33 6 C ST395	土師器	甕?	—	(138)	—	(61)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	—	赤	—	—
33 7 C ST395	土師器	甕	RP29	—	74	(78)	3~5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り	赤	赤	放熱
33 8 C ST395	須恵器	甕	RP30	120	(116)	23	3~7	ロクロナデ	ロクロナデ	—	海・黒	—	—
33 9 C ST395	須恵器	甕	RP30	120	(150)	37	3~9	ケズリ ロクロナデ	ロクロナデ	—	海・黒・内面摩滅	—	—
33 10 C SX200	須恵器	环	—	(150)	(108)	35	3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	—	—	開元通寶 1.2g 初鋸年621年
33 11 C SK207	金銅製品	古鏡	RM26	23	—	—	1	—	—	—	—	—	—
33 12 C SX226	土師器	有台耳	—	(150)	—	(67)	4.5	ロクロナデ	ミガキ 黒色施釉	回転角切り 黒面?	海・赤	台部欠損	—
33 13 C XO	土師器	甕?	—	(76)	(51)	4~10	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	赤	—	—
33 14 C XO	須恵器	有台耳	—	(148)	(67)	72	3~6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り	海・黒	—	—
33 15 C XO	須恵器	甕?	—	—	—	—	11	平行タタキ	同心円アテ	—	—	—	直口鋸 46.2g
33 16 C XO	石器	3.8×1.7×1.0	—	48	60	—	18	—	—	—	—	—	—
34 1 D ST1 SX47	土師器	环	—	(140)	(67)	34	5	ケズリ・ナデ	ロクロナデ	ケズリ	赤	—	—
34 2 D ST1	土師器	甕?	RP60	—	84	(48)	8	ハケメ	ナデ	木葉痕 黒面	—	—	—
34 3 D ST1	土師器	甕	RP62	—	(98)	(58)	5	ハケメ	ナデ	木葉痕	—	—	外側帶付着
34 4 D ST1	土師器	甕	RP41	220	—	(280)	7	ナデ・ハケメ	ナデ	輪縁痕 ハケメ	赤	—	口縁片付(つまみ出し)
34 5 D ST1	土師器	甕	RP41	(226)	—	(147)	6	ナデ・ハケメ	ナデ	—	赤	—	内外面帶付着
34 6 D ST1	須恵器	甕	RP38	120	(114)	31	5~9	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	短強密蓋
34 7 D ST1 SX47	須恵器	甕?	—	—	—	—	6	平行タタキ ロクロナデ (駆逐?)	ナデ	—	—	—	焼成不良?
34 8 D SX2	壺器系陶器	甕	—	—	—	—	9	自然釉	ナデ	—	—	越前?	—
34 9 D SX2	須恵器系陶器	甕	—	—	—	—	13	タタキ	アテ	—	—	海調	色調2.5Y1/灰
34 10 D SX4	壺器系陶器	甕	—	—	—	—	15	ナデ	ナデ	—	—	34-11と同・側体	色調2.5Y R6.6盤
34 11 D SX4	壺器系陶器	甕	—	—	—	—	15	ナデ	ナデ	—	—	34-10と同・側体	色調2.5Y R6.6盤
34 12 D SK5	壺器系陶器	甕	RP32	—	—	—	13	自然釉	ナデ	—	—	—	色調2.5Y1/灰
34 13 D SK5	石製品	瓶	RQ25	(106)	(72)	—	19	—	—	側面切出し痕	—	—	黒色 海面磨耗付 粘板岩、鉛埋入の 230.9g
34 14 D SK15	須恵器系陶器	甕	—	—	—	—	11~16	平行タタキ	アテ	—	—	—	青調 色調3Y1/灰白

註 出土は以下の略称を用いた。
海 (海面骨針) 黒 (黒色吹き出し) 赤 (赤色)

種別番号	地区・遺物名	種別	器種	登録番号	計測値(mm)			調整等			出土	備考
					口径 最大長	底径 最大幅	器高	器厚	外面	内面	底部	
35 1 D SK16	土師器	器台	—	—	—	—	9				赤	全体的に磨滅
35 2 D SK16	土師器	环	—	—	40	(12)	5	ロクロナダ	ロクロナダ	回転条切り	赤	
35 3 D SK16	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	15		ナダ			色調10R4/1暗灰
35 4 D SK20	土師器	有台耳	—	—	—	—	5	ロクロナダ	ロクロナダ	回転条切り		
35 5 D SK20	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	13~17		自然輪			色調2.5Y5/1灰
35 6 D SK25	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	12	ナダ	ナダ			色調2.5Y5/1灰
35 7 D SK25	金属製品	容器?	RM148	36	40	—	13					20.8g
35 8 D SK26	須恵器	壺	—	—	—	—	10	タキ	アテ		海・黒	
35 9 D SK43	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	16		ナダ			色調10R4/1暗灰
35 10 D SK43	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	15		ナダ			色調10Y5/1暗灰
35 11 D SK43	青磁	碗	RP198	—	—	—	4	無	袖			色調10Y7/1灰白
35 12 D SK44	須恵器	环	—	(144)	(100)	35	3	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ヘラ切り		39~12と同じもの
35 13 D SK44	金属製品	古鉄	RM177	15	—	—	10.5				赤	新鋭元年 2.1g 初鉄元年1096年
35 14 D ST30	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	15	ナダ	ナダ			色調2.5Y6/2灰黄
35 15 D ST30	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	13	ナダ	ナダ			色調2.5Y4/6に少々黒
35 16 D ST30	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	11~15	ナダ	ナダ			色調2.5Y5/1灰
35 17 D SP128	金属製品	釦?	RM257	63	20	—	17.5					23.0g
35 18 D SK161	壺器系陶器	壺	RP199	—	—	—	13	ナダ	ナダ			色調10Y6-4に少々黒
35 19 D SK161	跳洋		RM101	67	58	—	37					204.5g
35 20 D SK161	跳洋	—	RM102	48	58	—	40					108.7g
35 21 D SK169	須恵器	壺	—	—	—	—	6~9	ロクロナダ	ロクロナダ			
36 1 D SD185	須恵器	环	—	(134)	(64)	38	4	ロクロナダ	ロクロナダ	回転条切り	海・黒	39~10と同じもの
36 2 D SD185	須恵器	双耳杯	—	(120)	—	(40)	3.5	ロクロナダ	ロクロナダ		海・黒	40~13と同じもの
36 3 D SD185	須恵器系陶器	鍤	RP118	—	—	—	10~15	ロクロナダ	押し目12条 口縁部波状文		海	珠西 V期 色調Y6/1灰
36 4 D SD185	壺器系陶器	壺	RP191	—	—	—	14	ナダ	ナダ			36~5と同一個体 色調10Y6に少々黒
36 5 D SD185	壺器系陶器	壺	RP174	—	—	—	15	ナダ	ナダ			36~4と同一個体 色調10Y6に少々黒
36 6 D SD185	陶器(煮戻)	跳洋	—	—	—	—	6	無	押し目3名以上 袖			古跡V1期~第Ⅱ段 色調10Y7/1灰白
36 7 D SD185	石器	石核	—	53	72	—	41					頁岩 178.2g
36 8 D SD185	金銅製品	釦?	RM176	42	19	—	13.5					8.7g
36 9 D SD186	土師器	鉢	RP131	—	—	—	9	ナダ	ナダ		赤	把手部
36 10 D SD186	須恵器	壺	RP	137~147 184~187	—	—	(89)	7~9	タキ・カキ目 自然輪	ロクロナダ	海・黒	
36 11 D SD186	須恵器	壺	RP183	—	—	—	10	ロクロナダ	ロクロナダ		海・黒	
36 12 D SD186	須恵器系陶器	壺	RP	105~142	—	—	7~16	ロクロナダ 平行タキ	ロクロナダ・ナダ		海	珠西 V期 37~12と同一個体 色調2.5Y6~1灰黄
36 13 D SD186	須恵器系陶器	鉢	RP192	—	—	—	9	ロクロナダ	ロクロナダ		海	珠西 V期 色調2.5Y5/1灰
36 14 D SD186	須恵器系陶器	鉢	—	—	—	—	7	ロクロナダ	ロクロナダ		海	珠西 V期 内面摩滅 色調10Y6/2灰ナーベル
36 15 D SD186	須恵器系陶器	鉢	RP173	—	—	—	9	ロクロナダ	ロクロナダ		海	珠西 V期 色調10Y6/2灰ナーベル
36 16 D SD186	須恵器系陶器	鍤	RP162	—	—	—	14	ロクロナダ 自然輪	ロクロナダ 押し目8角以上 波状			珠西 色調2.5Y5/1灰
36 17 D SD186	須恵器系陶器	鍤	RP152	—	—	—	9	ロクロナダ	ロクロナダ 押し目3角以上		海	珠西 色調2.5Y5~2周灰黄
37 1 D SD186	須恵器系陶器	壺	RP116	—	—	—	12	ロクロナダ タチ	ロクロナダ・ナダ		海	珠西 V期 36~12と同一個体 色調2.5Y6~1灰黄
37 2 D SD186	壺器系陶器	壺	RP139	—	—	—	11	ナダ	ナダ		黒	内面付着物 色調10Y5~1灰灰
37 3 D SD186	壺器系陶器	壺	RP138	—	—	—	18.5	ナダ	ナダ		黒	色調10Y4/2灰黃
37 4 D SD186	壺器系陶器	壺	RP129	—	—	—	14	ナダ	ナダ		赤	37~6と同一個体 色調10Y7~6灰黃
37 5 D SD186	壺器系陶器	壺	RP114	—	—	—	10~15	ナダ	ナダ		黒	色調5Y5/1灰

遺物観察表

神岡 番号	地区・遺構名	種別	器種	登録番号	計測値(mm)				調査等			貼上	備考
					口径 最大長	底径 最大巾	器高	器厚	外面	内面	底部		
37 6	D SD186	炎器系陶器	甕	RP167	—	—	—	16	ナデ	ナデ			37-4と同じ体 色調10YR7.5/6青黄
37 7	D SD186	石製品	五輪塔の 台座	RQ103	(197)	(179)	(135)	132					基杯形 23kg 色調2.5YR7.5/6白
38 1	D SD186	石製品	五輪塔 (火葬)	RQ27	355	296	191	190					基杯形 9kg 色調2.5YR7.5/6白
38 2	D SD186	石製品	五輪塔 (本輪)	RQ28	304	303	245	244					基杯形 15.4kg 色調2.5YR7.5/6白
39 1	D SK192	石器	石斧	—	130	94	—	40					自重 320kg
39 2	D SK192	石器	刮片	—	70	115	—	35					178.3g ZG重上.
39 3	D SK192	土師器	壺?	—	—	30	(22)	8	ナデ・黒腹	円	赤		
39 4	D SK192	土師器	鉢?	—	—	48	(22)	4	ナデ・黒腹	ナデ	円	赤	
39 5	D SK192	土師器	壺	—	—	—	—	8.5	ハケメ・ナデ	ハケメ	木座痕		
39 6	D SK192	土師器	壺	—	—	(60)	(32)	5	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	赤	然然
39 7	D SK192	土師器	壺	—	(138)	—	(49)	4	クロロナデ	クロロナデ		海・赤	外表面被熱
39 8	D SK192	須恵器	壺	—	(140)	(74)	40	4	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	油煙?
39 9	D SK192	須恵器	壺	RP260	128	66	42	35	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	内外面被付着
39 10	D SK192	須恵器	壺	—	(134)	(64)	38	4	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	36-1と同じもの
39 11	D SK192	須恵器	壺	—	—	58	(12)	35	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	
39 12	D SK192	須恵器	壺	—	(144)	(100)	35	3	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	35-12と同じもの
39 13	D SK192	須恵器	壺	—	—	72	14	4.5	クロロナデ	クロロナデ	回転ヘラ切り	海・黒	
39 14	D SX192	須恵器	壺	—	—	(83)	(21)	5	クロロナデ	クロロナデ	回転ヘラ切り	海・黒	
40 1	D SK192	土師器	鉢	—	(260)	—	(50)	6	クロロナデ	クロロナデ		海・赤	
40 2	D SK192	須恵器	壺	—	—	(26)	—	5	クロロナデ	クロロナデ		海・黒	内面摩滅
40 3	D SK192	須恵器	壺	—	—	(16)	6	クロロナデ	クロロナデ		海・黒		
40 4	D SK192	須恵器	有台坪	—	(142)	(94)	72	4	クロロナデ	クロロナデ	回転ヘラ切り	海・黒	体部下平屈曲 後綱
40 5	D SK192	須恵器	有台坪	—	—	(86)	(20)	5	クロロナデ	クロロナデ	回転ヘラ切り	海・黒	
40 6	D SK192	須恵器	有台坪	—	—	(96)	(22)	5	クロロナデ	クロロナデ	回転ヘラ切り (底板?)	海・赤	
40 7	D SK192	須恵器	有台坪	—	—	(76)	(25)	4	クロロナデ	クロロナデ	回転ヘラ切り	海・黒	
40 8	D SK192	須恵器	有台坪	—	(132)	(73)	51	3	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	
40 9	D SK192	須恵器	有台坪	—	(125)	67	49	3	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	内底面磨滅
40 10	D SK192	須恵器	有台坪	RP2	—	62	(46)	4	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	
40 11	D SK192	須恵器	有台坪	—	(110)	(60)	43	4	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	口縁部屈曲
40 12	D SK192	須恵器	壺	—	—	(60)	(44)	3	クロロナデ	クロロナデ	回転系切り	海・黒	
40 13	D SK192	須恵器	双耳坪	—	(120)	—	(40)	3.5	ロクロロナデケル	ロクロロナデ		海・黒	36-2と同じもの
40 14	D SK192	須恵器	双耳坪	—	—	—	—	5	ロクロロナデ 耳部ケル	ロクロロナデ		海・黒	
40 15	D SK192	須恵器	壺?	—	—	—	(129)	7~10	ケズリ ケズリ	ロクロロナデ		海・黒	
41 1	D SK192	須恵器	壺	—	(200)	—	(130)	8	平行タキキ ロクロロナデ 自然筋	同心円アテ ロクロロナデ		海・黒	
41 2	D SK192	須恵器	壺	—	(230)	—	(66)	10	平行タキキ ロクロロナデ 自然筋	ロクロロナデ		海・黒	
41 3	D SK192	須恵器	壺	—	—	—	—	8	タキキ・カキタ 自然筋	アテ・カキメ		海・黒	
41 4	D SK192	須恵器	壺	—	—	(120)	(139)	7	ケズリ・ナデ	カキメ・ナデ		海・黒	
41 5	D SK192	須恵器	壺	—	—	(120)	(39)	8	タキキ・ナデ	アテ・ナデ		海・黒	
41 6	D SK192	須恵器	壺	—	—	—	—	10	平行タキキ	平行アテ		海・黒	
41 7	D SK192	須恵器	壺	—	—	—	—	16	平行タキキ	アテ・ナデ	欠損	海・黒	
41 8	D SK404	跋洋	—	RM156	33	46	—	26					36.6g
41 9	D SK425	金属製品	刀子?	RM259	42	26	—	11					12.8g
42 1	XO	土師質土器	かわらけ	—	(78)	54	21	5	ロクロロナデ	ロクロロナデ	回転系切り	海・赤	油煙
42 2	XO	土師質土器	柱状高台	—	—	(94)	(42)	7	ロクロロナデ	ロクロロナデ	回転系切り	海・赤	

神岡 番号	地区・遺物名	種別	器種	登録番号	計測値(mm)				調査等		貼上	備考	
					口径 最大長	底径 最大巾	器高	器厚	外面	内面			
42_3 D XO	須恵器	环	—	—	(32)	(15)	4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転角切り	海・里	内底面彎曲	
42_4 D XO	須恵器	蓋	—	—	—	(25)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里		
42_5 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	16	ナデ	ナデ	ロクロナデ		色調10YR5/3(深黄褐)	
42_6 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	15	ナデ	ナデ	ナデ		Q2-73IIと同一個体 色調2.5YR6/6段	
42_7 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	15	ナデ	ナデ	ナデ		Q2-63IIと同一個体 色調2.5YR6/6段	
42_8 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	12	ナデ	ナデ	ナデ		色調2.5Y5/1灰	
42_9 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	14	ナデ	ナデ	ナデ		Q2-62IIと同一個体 色調2.5YR6/6段	
42_10 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	13	ナデ	ナデ	ナデ		色調2.5YR4/1灰褐	
42_11 D XO	壺器系陶器	壺	—	—	—	—	15	ナデ	ナデ	ナデ		Q2-62IIと同一個体 色調2.5YR6/6段	
42_12 D XO	壺器系陶器	鉢	—	—	—	—	16	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			
42_13 D XO	壺器系陶器	縦鉢	—	—	—	—	12	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		内底面彎曲 色調10YR4/1灰灰	
42_14 F SK600	須恵器	环	—	—	(72)	(8)	7	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里		
42_15 F SK600	須恵器	蓋	RP261	1-18638	(16)	—	5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里		
42_16 F SK621	須恵器	有台环	—	—	(74)	(15)	4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里		
42_17 F SX546	須恵器	环	—	—	66	(32)	4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里		
42_18 F SX546	須恵器	蓋	—	—	(25)	—	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里	内底面彎曲	
42_19 F SK648	須恵器	环	—	—	(136)	(60)	39	4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里	
42_20 F SK657	鉢洋	—	—	25	33	—	16						
43_1 E ST501	楕文土器	縦鉢	RP216	—	—	—	6	墨書き(陰起成) ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	縦縫		
43_2 E ST501	須恵器	蓋	—	—	(137)	(25)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	海・里		
43_3 E ST501	須恵器	有台环	RP230	(141)	(85)	55	4	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ST501内EL54I出土		
43_4 E ST501	土師器	壺	RP 207-208 209-b	220	65	368	5	平行タケ カキメ	平行タケ カキメ	ロクロナデ	赤		
43_5 E ST501	土師器	壺	RP 207-208 209-a-b	224	64	388	5	タマリ・カキメ ロクロナデ	タマリ・カキメ ロクロナデ	ロクロナデ・ハゲタ	やや凸 赤		
43_6 E ST501	土師器	壺	RP 207-208	222	80	360	6	タマリ・カキメ ロクロナデ	タマリ・ロクロナデ ロクロナデ	タマリ・ロクロナデ ロクロナデ	やや凸 赤	外表面被然	
43_7 E ST501	土師器	壺	RP209-b (220)	—	(321)	5	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	赤		
43_8 E ST501	土師器	壺	RP225 (134)	74	94	4-6	ロクロナデ	カキメ	カキメ	ロクロナデ	回転角切り 穿孔	赤	
44_1 E ST520	楕文土器	縦鉢	—	—	—	9	RLR椭文	ナデ	ナデ	ナデ		粗砂	
44_2 E ST520	楕文土器	縦鉢	—	—	—	10		ナデ	ナデ	ナデ		砂粒多 摩擦度 摩擦やや不規	
44_3 E ST520	円盤伏石質品	—	—	粗粒(大)	3(重太)	—	17						
44_4 E ST520	石器	石核	—	76	73	—	45					頁岩 298.2g	
44_5 E ST520	石器	石核	—	86	34	—	33					頁岩 120.7g	
44_6 E SP528	楕文土器	縦鉢	—	—	—	—	6	RLR椭文	ナデ	ナデ	砂粒		
44_7 E SD531	石器	石核	—	92	54	—	19					頁岩 69.4g	
44_8 E XO	楕文土器	縦鉢	—	—	—	7	ナデ・RLR椭文 精細(沈成)	ナデ	ナデ	ナデ			
44_9 E XO	楕文土器	縦鉢	—	—	—	9	RLR椭文	ナデ	ナデ	ナデ	砂粒多		
44_10 E XO	石器	石核	—	86	65	—	48					頁岩 加理有 226.7g	
44_11 E XO	石器	石核	—	66	59	—	45					頁岩 160.5g	
44_12 E XO	石器	石核	—	107	100	—	65					頁岩 716.4g	

引用・参考文献

- 寒河江市史編さん委員会 1994 「寒河江市史 上巻」
山形県教育委員会 2004 「分布調査報告書(30)」山形県埋蔵文化財調査報告書第204集
吉岡康鶴 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
東北中世考古学会編 2001 「獨立と堅穴」高志書院
水井久丈男 2002 「中世出土鏡の分類図版」高志書院
中野晴久はか 1997 「財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要第5輯」財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター
飯村均 1995 「東北諸窯」概説 中古の土器・陶磁器」中世土器研究会
大三輪龍彦はか 1989 「静明寺釈迦堂ヶ谷遺跡」静明寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団
古代城柵官衙遺跡 1999 「第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
検討会事務局編
佐藤庄一ほか 1996 「西村山地城史の研究 第14号」西村山地城史研究会
佐藤樹宏はか 1977 「庄内考古学 第14号」庄内考古学研究会
宇野修平はか 1981 「高瀬山遺跡群分布調査報告書」山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第1集 寒河江市教育委員会
宇野修平はか 1983 「高瀬山」遺跡発掘調査報告書 山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第2集 寒河江市教育委員会
黒田富善はか 1987 「高瀬山B・K遺跡発掘調査報告書」山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第6集 寒河江市教育委員会
大宮富善・阿子島功はか 1999 「洗衣長者屋敷遺跡発掘調査報告書」山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第19集 寒河江市埋蔵文化財調査委員会
小林圭一ほか 2005 「高瀬山遺跡(日〇地区)発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
齊藤圭祐はか 2004 「高瀬山遺跡(1期)第1~4次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
丸山晶子はか 2000 「高瀬山遺跡(2期)第2・3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第80集)
財團法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤邦弘 2001 「高瀬山遺跡(3A)第2・3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集)
財團法人山形県埋蔵文化財センター
高桑弘美 2001 「三条遺跡第2・3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第93集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
黒板雅人ほか 2001 「洗衣長者屋敷遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第79集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
佐藤圭一ほか 1998 「平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤邦弘 1989 「大船遺跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第139集)山形県教育委員会
伊藤邦弘 1990 「鶴島城跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第159集)山形県教育委員会
高桑登ほか 2004 「小田島城跡遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第131集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤邦弘ほか 2007 「梅野木前1遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第160集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
須藤孝宏 2007 「上野遺跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第162集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
山口博之 2005 「小平4遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第139集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤成賛はか 2006 「上北遺跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第154集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
長瀬えみ子はか 2007 「上敷先遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第159集)財團法人山形県埋蔵文化財センター
押切智紀はか 2007 「灰垣遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集)財團法人山形県埋蔵文化財センター

写真圖版



A区完掘状況（北から）



B区完掘状況（西から）



C区完掘状況（北から）



F区完掘状況（北東から）



SX390完掘状況（東から）



A区西壁 e断面（東から）



B区北壁 SD355断面（南から）



B区東側完掘状況（北から）



B区西侧・中央部完掘状況（西から）



ST341東西ベルト断面（北から）



ST341 RP10出土状況（北から）



ST341完掘状況（北東から）



SK343 RM12～15出土状況（東から）



SK354・356完掘状況（南から）



SD355 RP18～23出土状況（西から）



B区作業風景



C区西壁b断面（東から）



ST290東壁断面（北西から）



ST290完掘状況（北から）



ST395出土状況（北西から）



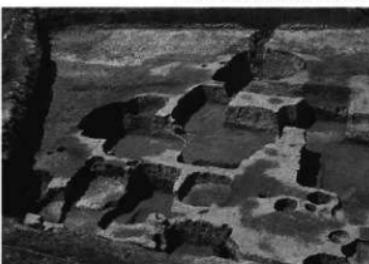
ST395 EL396出土状況（北から）



C区中央部完掘状況（南から）



D区東側完掘状況（南から）



D区西側完掘状況（南から）



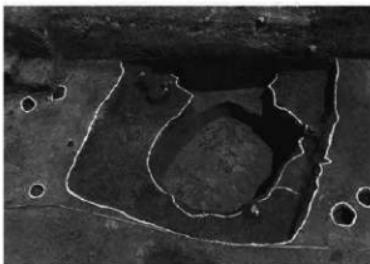
D区中央部完掘状況（北から）



D区北側完掘状況（南東から）



D区北壁断面（南から）



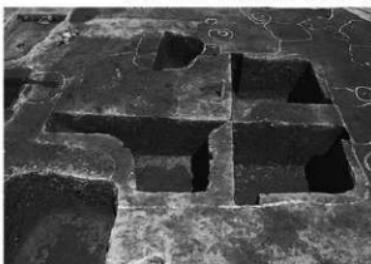
ST1出土状況（西から）



ST1 RP41 - 42出土状況（北西から）



ST1 RP38出土状況（南東から）



ST50南北断面（西から）



ST50完掘状況（南から）



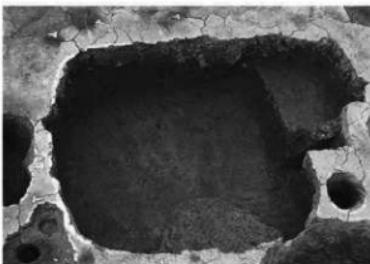
ST174、SK161周辺（南から）



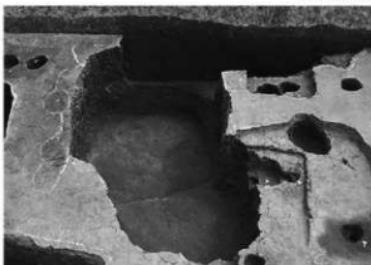
ST174完掘状況（西から）



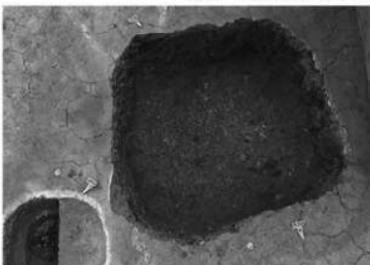
調査説明会



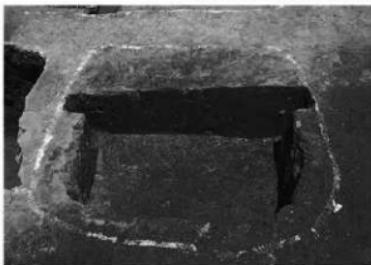
SK15・16完掘状況（西から）



SK20・21完掘状況（北から）



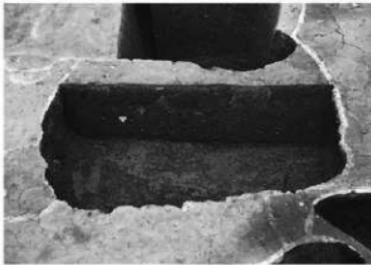
SK26完掘状況（北から）



SK44断面（南から）



SK44 RM177出土状況（南から）



SK161断面（西から）



SK161 RM102出土状況（西から）



SK192 RP260出土状況（北から）



SK192完掘状況（北から）



SK404断面（北から）



SK425 RM259出土状況（東から）



SD185・186発出土状況（東から）



SD185南北断面（西から）



SD185 RP118出土状況（南から）



SD186東西断面（北から）



SD186 RQ27出土状況（南東から）



SD186 RQ28出土状況（東から）



SD186 RP160~167出土状況（東から）



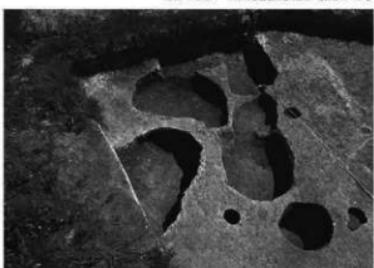
SD186 RP185~187出土状況（東から）



SD185・186完掘状況（西から）



SX2・48完掘状況（西から）



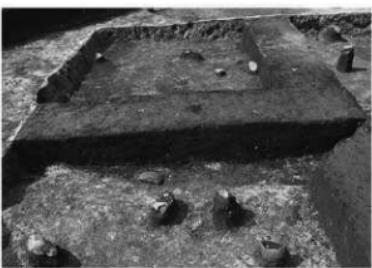
SX4 SK5周辺完掘状況（北から）



D区調査風景（北から）



E区西壁断面（南東から）



ST501東西ベルト西断面（南から）



ST501出土状況（南から）



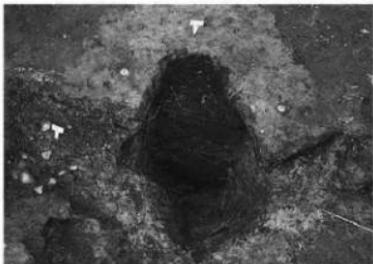
ST501 RP207~209出土状況（北から）



ST501 EL541（北から）



ST501完掘状況（西から）



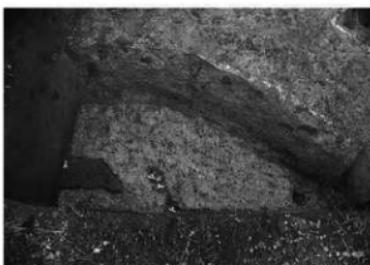
EP543断面（東から）



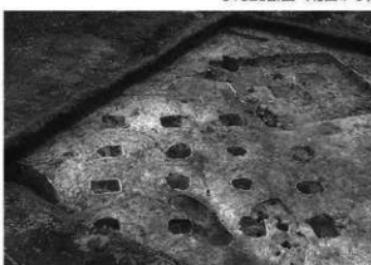
EP545完掘状況（西から）



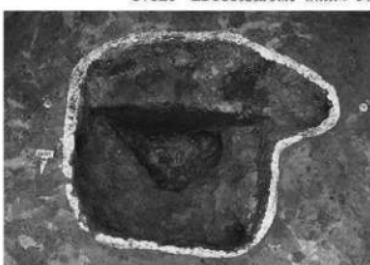
ST520断面（北西から）



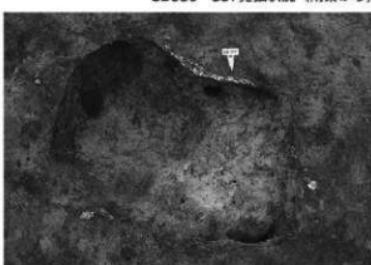
ST520 ED555完掘状況（南東から）



SB556・557完掘状況（南東から）



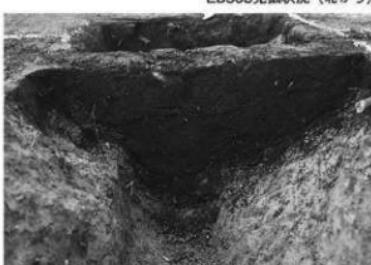
EB503断面（東から）



EB505完掘状況（北から）



SD530b断面（西から）



SD531c断面（東から）



SD530・531完掘状況（南から）



F3・4・6区発掘状況（東から）



F3区東壁断面（西から）



SK606 RP261出土状況（北から）



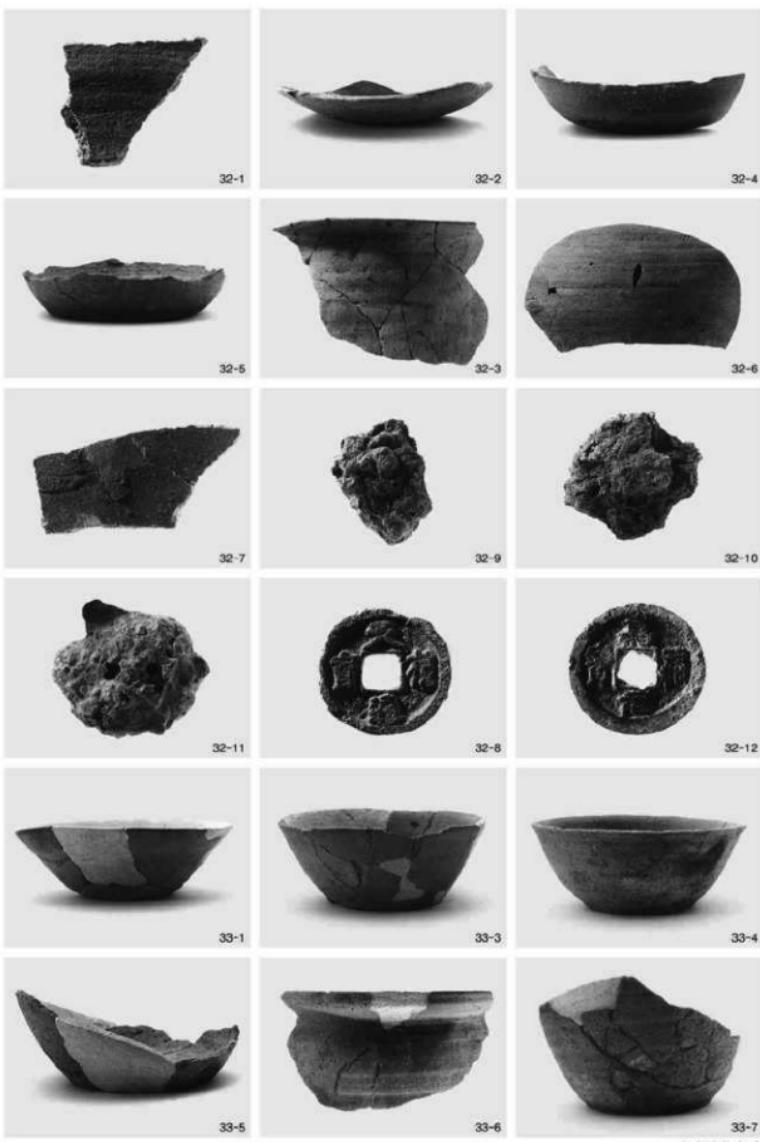
SD618、SK619発掘状況（南から）



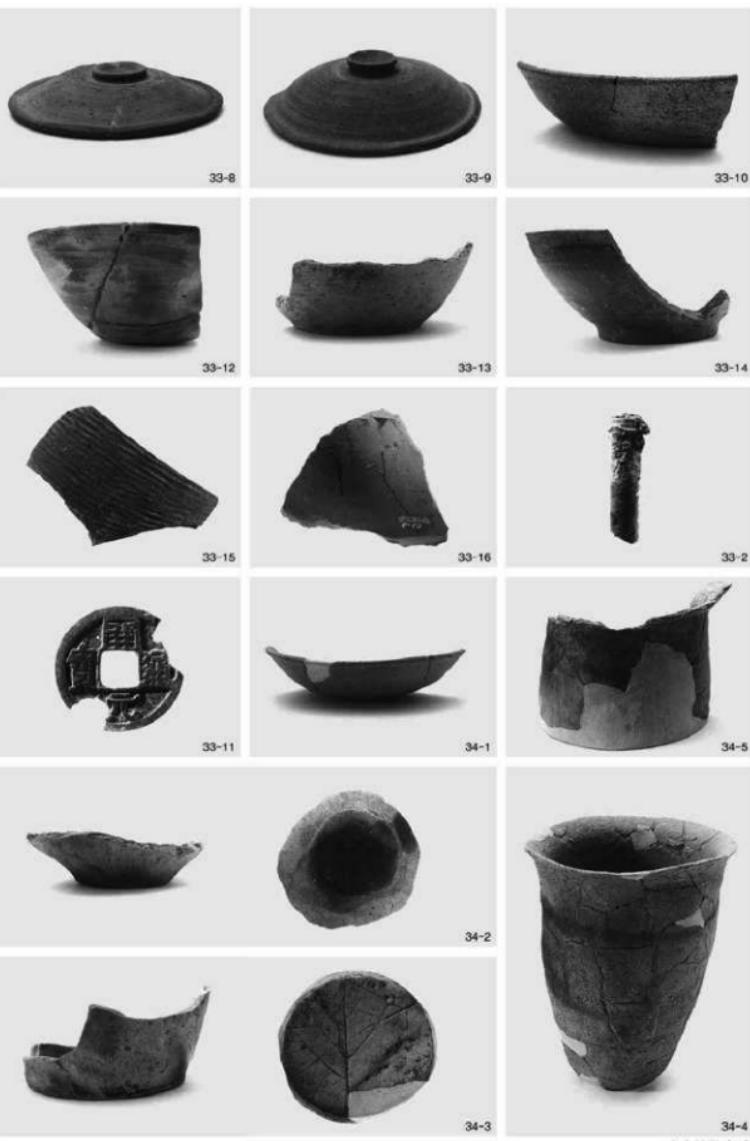
F5区発掘状況（北西から）



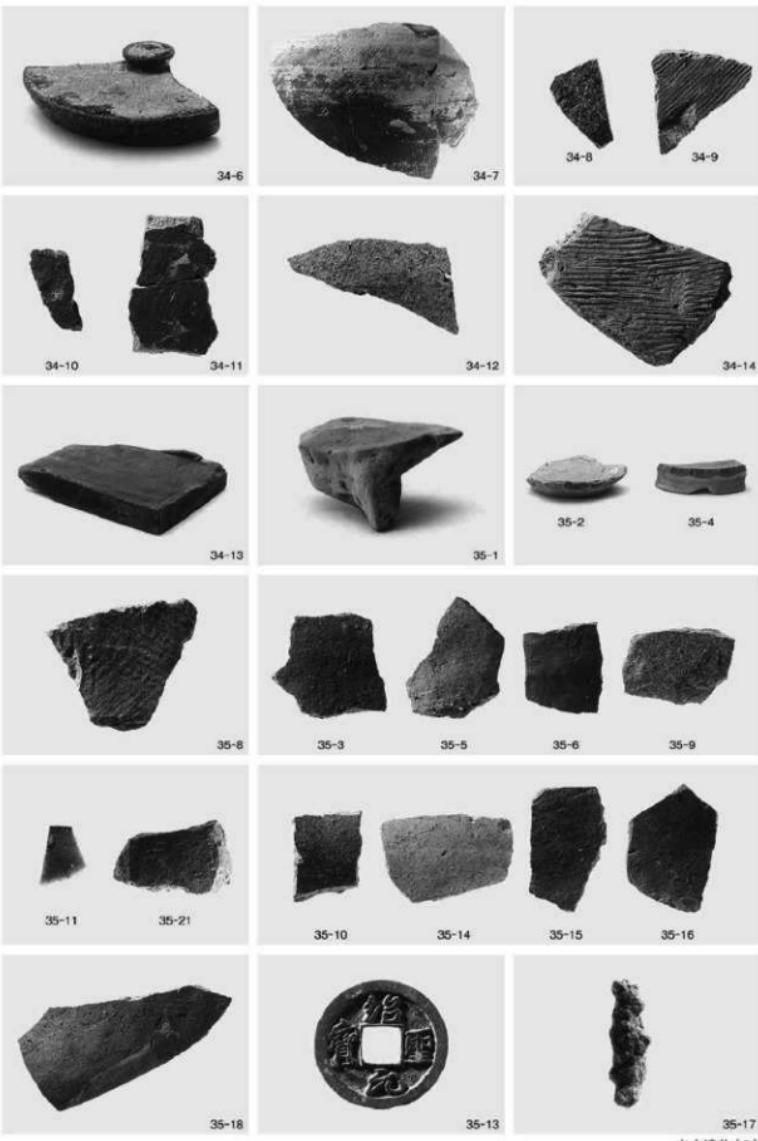
F7区発掘状況（北東から）



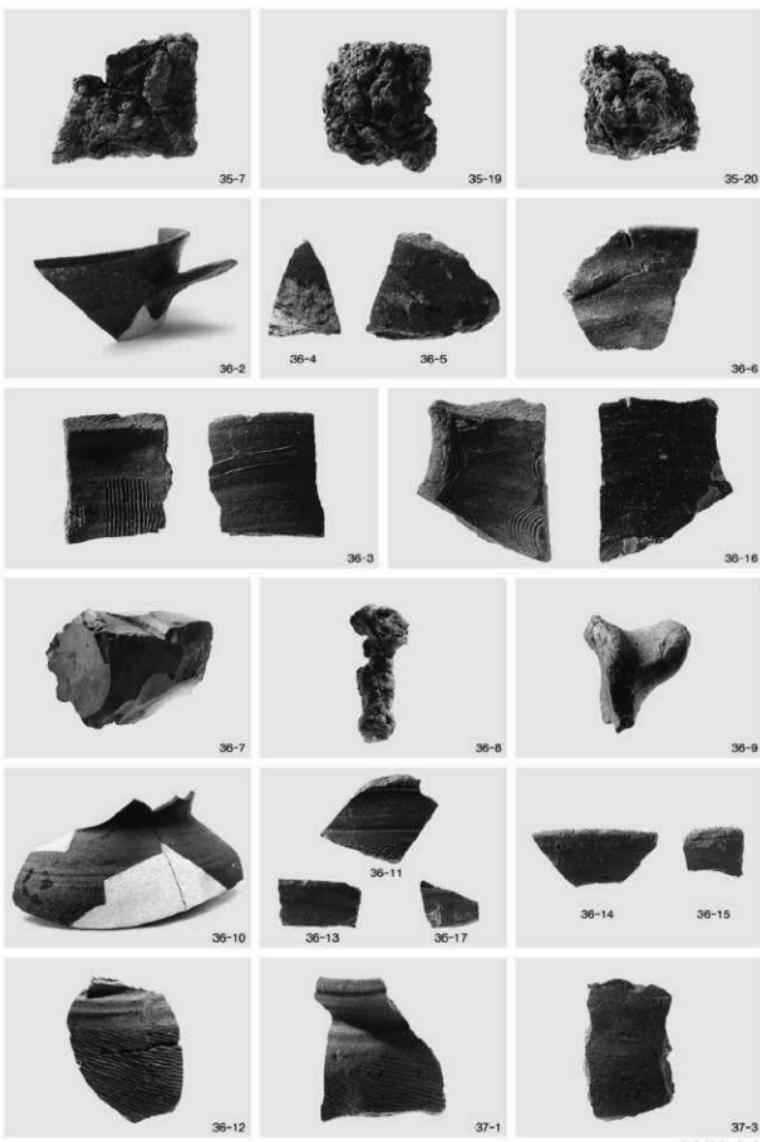
出土遺物(1)



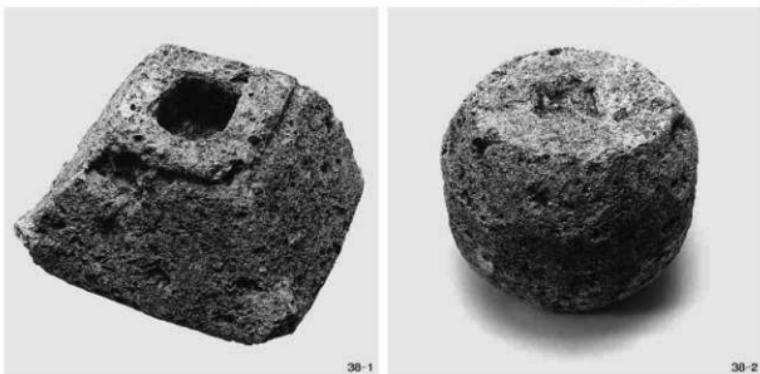
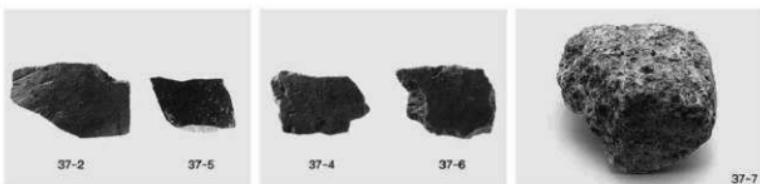
出土遺物(2)



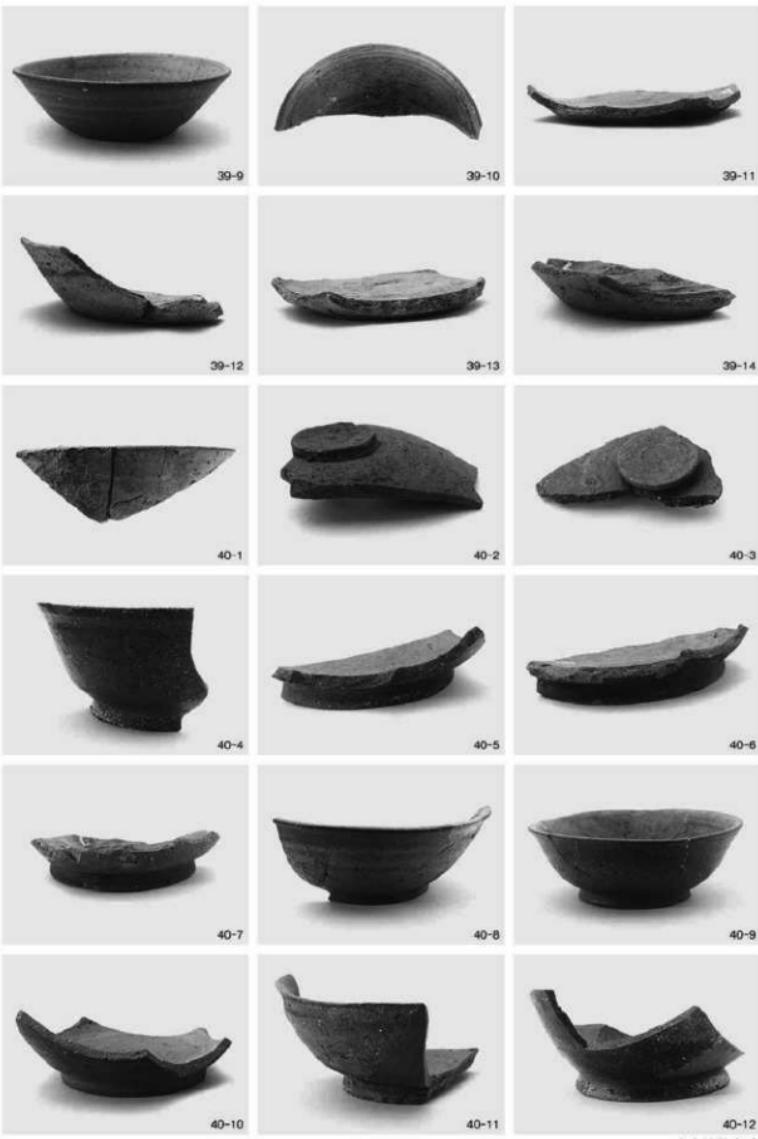
出土遺物(3)



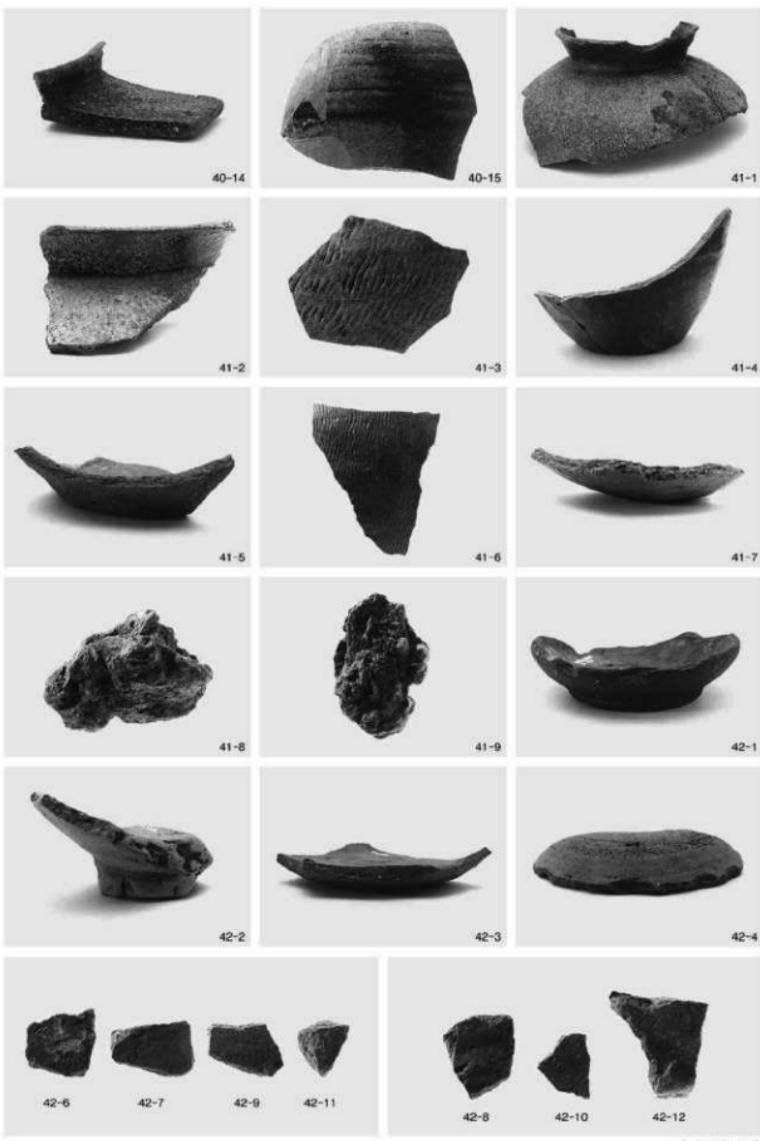
出土遺物(4)



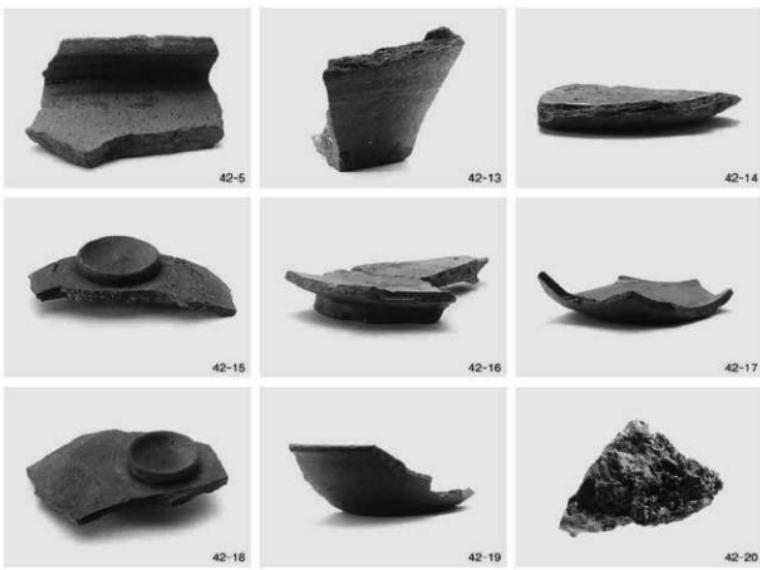
出土遺物(5)

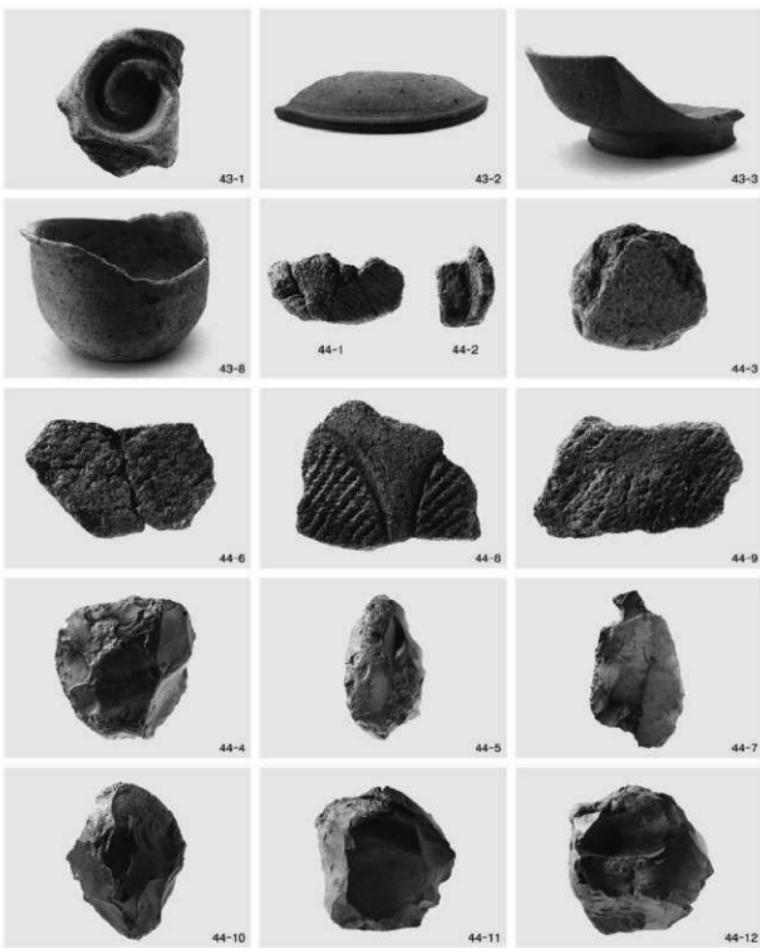


出土遺物(6)



出土遺物(7)





出土遺物(9)

報告書抄録

ふりがな	たかせやまいせき（H.O）2きはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	高瀬山遺跡（H.O）2期発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第167集							
編著者名	今田秀樹							
編集機関	財團法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2008年3月21日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m)	調査原因	
たかせやまいせき 高瀬山遺跡	山形県寒河江市 大字島 字島西ほか	06206	昭和60年度 登録	38度 21分 32秒	140度 16分 13秒	20040426～ 20040604 20050425～ 20050714	第1次 第2次 460 800	第1次 第2次 最上川しふるさと 総合公園整備事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	縄文時代 (中期)	堅穴住居跡		縄文土器、石器			縄文時代から中世にわたる複合遺跡。縄文時代の堅穴住居跡、奈良・平安時代の堅穴住居跡と掘立柱建物跡が検出された。	
	奈良・平安 時代	堅穴住居跡 掘立柱建物跡、土坑 溝跡		土器、須恵器			中世では堅穴建物跡が確認され、高瀬山遺跡及び周辺の集落の構成と変遷を解明する資料を得た。 (文化財認定箱数: 65箱)	
	中世	堅穴建物跡、土坑、溝跡		陶器、金属製品				

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第167集

高瀬山遺跡（H.O）2期発掘調査報告書

2008年3月21日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 麗庄印刷 株式会社
〒990-0821 山形市北町1丁目3-1
電話 023-684-5555